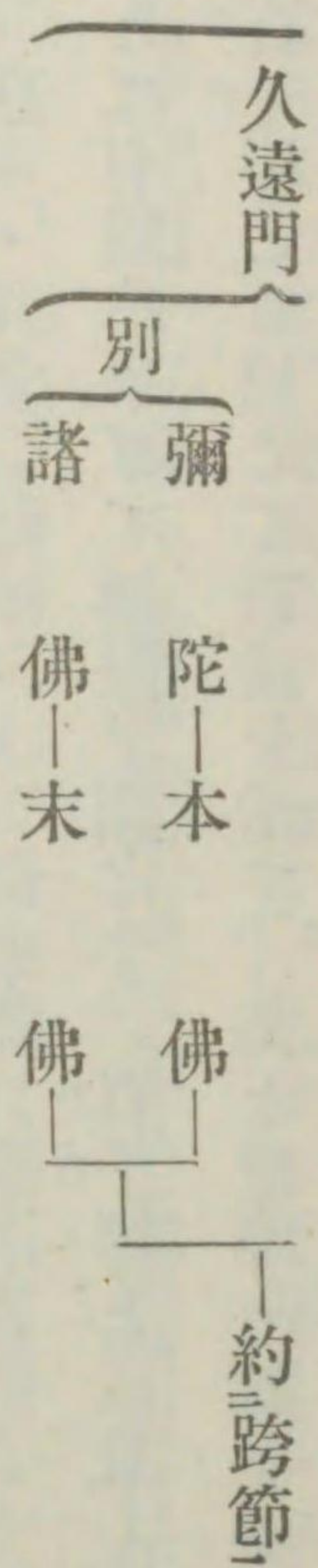
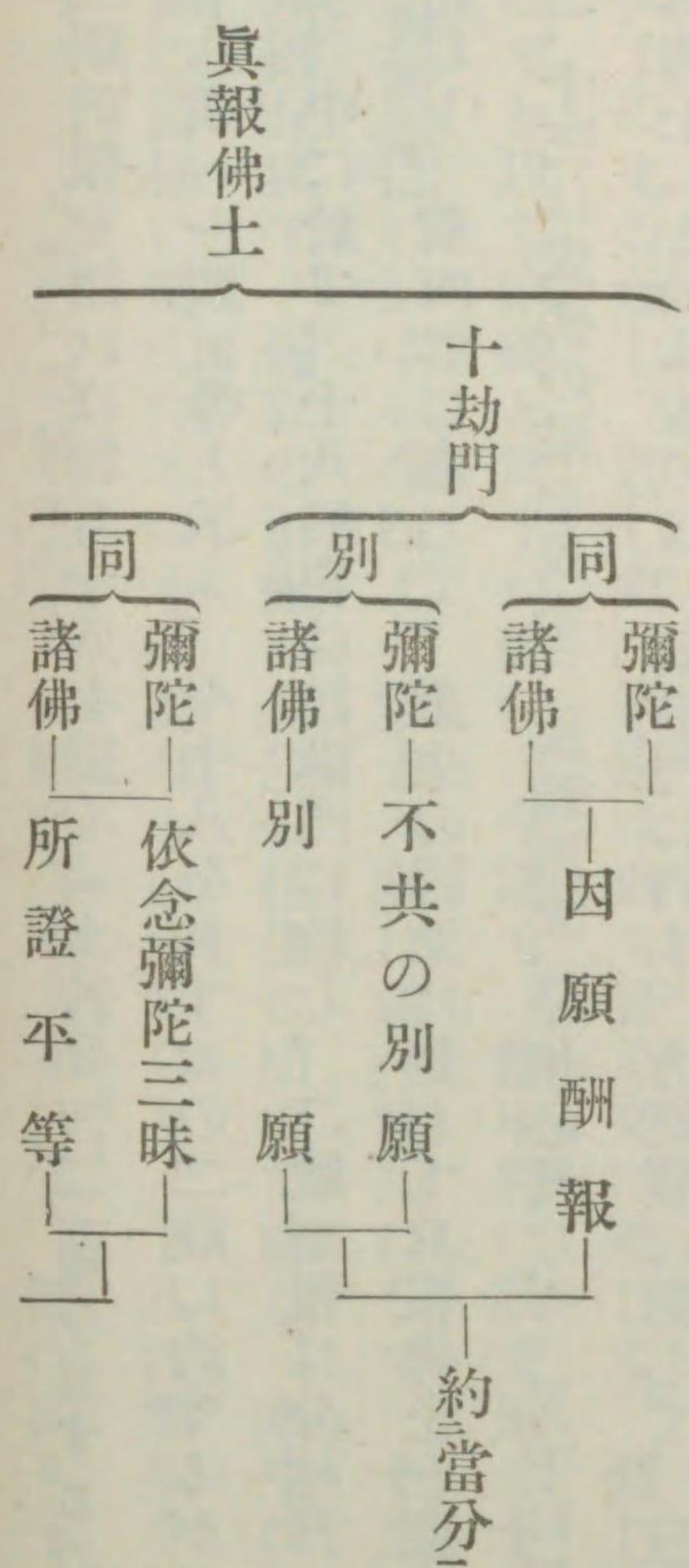


悲化物の相に非ず。然に衆生の因果は眞佛土よりして流れ出づるが故に、讚に「光明壽命の誓願を、大悲の本としたまへり」と云ふ。光壽は即ち大悲の本にして依主に約して解す、十七等の願を末となし、二十三を本と爲す。今末を以て本に名けて大悲誓願と云ふなり。二に攝化に約して解すれば、凡そ六八願は爲物方便の誓願なるが故に、皆大悲の願ならざるはなし。中に於て光壽の佛徳を本となし、衆生の因果を末と爲す。大悲の誓願に本末ありて、十二、十三は是れ其本なり。大悲即本にして、持業に約して解す、今其本に就いて大悲誓願と云ふなり」と。蓋し考ふべし。

眞報佛土とは假報佛土即ち化身土に對するの言なり。『對問記』『仰信錄』にこの眞報佛土を解するに十劫、久遠、同、別、當分、跨節の目を以てせり。今其の要を取りて圖示すれば左の如し。



而して今此中の意は當分の別に居し、跨節の別を攝して眞報佛身を成立すと云へり。

指 因 願

〔本文〕 既而有願即光明壽命之願是也

〔校異〕 校異なし。

〔細釋〕 果に居して因を指す、故に既而有願と云ふ。次上の二科は眞報佛土の義を明し訖り、今其の因願を指すが故なり。

引 文

〔大意〕 直明上に竟りて二に引文なり。此中二有り、一に經說、二に師釋なり。初の中亦二、一に本經、二に末經なり。本經の中二、一に正依、二に異譯なり。初の中二、一に因願、二に成就なり。今は其の初めなり。

因願引意

〔本文〕 大經言設我得佛光明有能限量乃至下至百千億那由他劫者不取正覺。

〔校異〕 (一)大經正依第十二願(上)設我等の右『本願寺本』「十二光明無量之願」八字を細書す。

(二)大經正依第十三願(上)設我等の右『本願寺本』「十三壽命無量之願」の八字を細書す。

〔細釋〕 この中二願有り、初は光明、後は壽命なり。初の中、光明とは『六要』五(五)に云く「問今此佛光是常光歟。現起光歟。答是常光也。既酬本願感此勝光何現起光。若非常光何超諸佛是故楞嚴略記釋云常光一尋雖常非遍別緣遍照、雖遍非常。此佛光明即不如是經無量劫遍照十方」と見るべし。

有能限量とは有限を擧げて無限を顯はす。百千等とは且く下數を擧げん上數を略するなり。『述聞』に云く「百千等とは總じて數量を示す。萬々億等も義を示せば此に攝して、咸な下と爲すを得。

而して其上なるものは、諸數量を超越す。如來の所得は多少皆數量を離る、故に滅度中の光壽は斯を實義となす。第十五願に「壽命無能限量除其本願脩短自在」と云ふが如し。此れ其脩短元は收めて無量中に在り、此故に脩短にして脩短並に皆不可得なり。壽の如く光明も亦然り、故に論に相好光一尋といふ。下に『法事讚』を引きて云く「彌陀妙果號曰無上涅槃」と。斯を實義と爲す。下に至つて二乘門を引く、知るべし。然に處々の文、短を揀んで長を取り、勝に據つて以て論ずるものは所被の類久しく生死に疲れて其情短を惡む。爲に、且く世俗に就て説くが故に、而も以て實際を動せず、此俗仍ち是れ眞實なり。意を得て解すべし」と。蓋し大に宗意を得たり。『六要』五(三)に下至百億千那由他劫を釋して云く「問。下至百千億那由他劫者所言劫者指所至歟。指所超歟。答。約所至者義當有量。若約所超意協無量是故可云所超劫也。問。依何道理云所超耶。答於餘願中有所准知。謂五通願皆云不知不見不超當願之中不云不至既云不照故非所至是所超也」と見るべし。

次に壽命無量の願を引く。願意を云はゞ、我若し佛となるも、壽命に限りありて、上多きは有量の無量、下少きは百千億那由他劫に至つて、入滅して衆生を濟度する事能はざることあらば、我は阿彌陀佛なる正覺を取らずと遮顯し給ふ。若し之を表顯すれば、眞の無量の無量壽たるを得ば、我は阿彌陀佛なる正覺を取るべしと云ふ願意なり。圖解すれば左の如し。

表顯(無限量)——無量之無量——取正覺
 遮顯(有限量)——上——有量之無量——不取正覺
 下——百千億那由他劫

然に淨影、天台、嘉祥等の諸師は彌陀の壽命を有量の無量なりとし、報身に非ずして應身なりと稱す。今其の文を擧ぐれば左の如し。

先づ淨影は其著『無量壽經義疏』卷上(大正卅七⁹²)に彌陀の報應を論じて云く、

此佛從其壽命彰名。壽有眞應、眞卽常住性同虛空應壽不定或長或短、今此所論是應非眞。

於應壽中此佛壽長、凡夫二乘不能測度知其限算故曰無量命限稱壽、云何得知是應非眞。如觀

世音及大勢至授記經說。無量壽佛壽雖長遠亦有終盡。彼佛滅後觀音大勢至次第作佛、故知是應。

と。又『觀無量壽經疏』本(大正卅七¹⁷³)に云く

然佛壽命有眞有應。眞如虛空畢竟無盡。應身壽命有長有短。今此所論是應非眞。故彼觀音

授記經云無量壽佛命、雖長久亦有終盡故知是應、此佛壽長久無邊非餘凡夫二乘能測故曰無

量命限稱壽。

と。

之等の文に依るに、彌陀佛の壽命は無量壽と雖も、眞の無量に非ず、たゞ凡夫、二乗の智慧を

以ては測量すること能はざるが故に、二乘凡夫に約して無量と云ひしのみとの義となる。

次に天台の智顛は『觀無量壽經疏』(大正卅七¹⁸⁸)に云く

有量有二義。一爲無量之量。二爲有量之量。如七百阿僧祇及八十等是有量之量。如阿彌

陀實有期限人天莫數是有量之無量。應佛皆有有量逐物隨緣參差長短。

と。

之に依るに、有量に、無量の量と、有量の量との二あり。八十入滅の釋尊の壽命の如きは有量の量なり。阿彌陀佛の如きは、實に壽命に限りあれども、人天が測量すること能はざれば有量の無量と云ふべし。而して應身佛には皆この有量の量と、有量の無量の二種の壽命ありて所化の機及び縁に従つて、長となり、短となり、參差するものなりと云ふの義なり。

次に三論の嘉祥は『觀無量壽經疏』(大正卅七²³⁴)に云く

胡云阿彌陀佛陀。此云無量壽覺者。以無量壽通三佛。何者法佛非彼此邊量可度故強名無

量。修成佛壽量同虛空故云無量壽。應佛無量者若通論門衆生無量垂迹何盡。如大經十三願云云

何捨慈悲永入於涅槃。別論彌陀者廣大願造土壽長遠二乘凡夫不能測量故云無量。

と。

之に依ると、無量壽と云へることは、法報應の三佛に通じて稱することをも。何者、法佛は有

量、無量などと度るべからざるものなれども強て名けて無量と云ふを得。次に修成佛は壽命虚空と同じきが故に無量壽といふ。最後に應身佛は若し通論門に據して云へば衆生、無量なるが故に佛も慈悲を捨て、永く涅槃に入ることを得ず。此點より云へば大經十三願の如く、無量壽と云ふべきなり。然に別して西方の彌陀に就て論せば、無量壽と雖も、實は凡夫、二乗の測量すること能はざるが故に、無量壽と云ふとなす。更に『觀經疏』(大正卅七²³⁷)には壽命の量、無量に就き四句分別を設けて説明せり。其中に於て無量なるも、有量と稱せし場合と、有量なるも、無量と稱せし場合との二を茲に引用せん。即ち文に云く、

言壽無量名有量者如金光明及法華。金光明云虚空分齊尚可盡邊。無有能知釋尊壽命。此壽命無量而云壽量品。法華亦爾。始不見其邊終不見其際。如肇師所明。隨之不得其蹤。迎之罔眺其首。故經云是阿逸多不知壽量始終而云壽量品。故壽無量而稱有量。

壽有量而稱無量者即是此經、外國云阿彌陀此云無量壽。然佛壽實有量此佛壽半閻浮提微塵數劫滅度。觀音補處觀音滅度後勢至補處故壽有量而稱無量壽也。問壽有量那得無量壽耶。解云恒河水亦無量、大海水亦無量、小分無量、對此土短役故云無量也。又稱無量壽者聲聞二乘不能思量此佛壽命故云無量壽非彼佛壽實無量也。と。

此文の説明に依れば、無量壽を有量と呼びし場合は金光明及び法華經の壽量品の如し。即ち釋尊の壽命は實に際限なきも『法華經』及び『金光明經』に於て品名を壽量品と云ふ。これ無量を有量と稱せし例なりとす。

次に有量を無量と云ひし場合は、阿彌陀佛の如し、之に三由有り。一は恒河の水も無量と云ふを得、大海の水も亦無量と云ふを得。然に大海の無量に比すれば恒河の無量は小分の無量なり。今彌陀の如きも小分の無量にして壽量品の釋尊の如く眞の無量に非ず。二は此土の短役に對比して無量と云ふ。三には聲聞、緣覺等の二乗が測量すること能はざれば一往無量壽と稱せしなり。以上の三由によつて彌陀を有量の應身佛となすなり。

上述の如く、三師の主張は殆ど揆を一にして、彌陀佛の壽命を無量と云ふは、眞の無量に非ず、二乗凡夫の度る能はざれば、無量と云ひしのみにて、實は、彌陀は入滅するが故に應身佛にして有量なりとなすなり。是の主張に對して道綽、善導の諸師は勉めて諸師の謬解を破斥し給ひ、佛威を唐土に布き給へり、詳しくは後日に譲る。

成就引意

〔本文〕 願成就文言佛告阿難無量壽佛威神光明最尊第一諸佛光明所不能

及乃至悉共推竿計其壽命長遠之數不能窮盡知其限極抄出。

〔校異〕 (一)大經正依第十二願成就文(上三三三)。(イ)願成就文言の左、『本願寺本』は「光明無量願成就文士」の九字を細書す。(ロ)善心生焉の焉、『本願寺本』『報恩寺本』は右に「エン」の音、左に「コ、ニ」の訓を附す。(ハ)三塗勤苦の勤、經文は勤に作る。(ニ)聲聞緣覺の覺、『明曆』寛文二本は學に作るもの形誤。

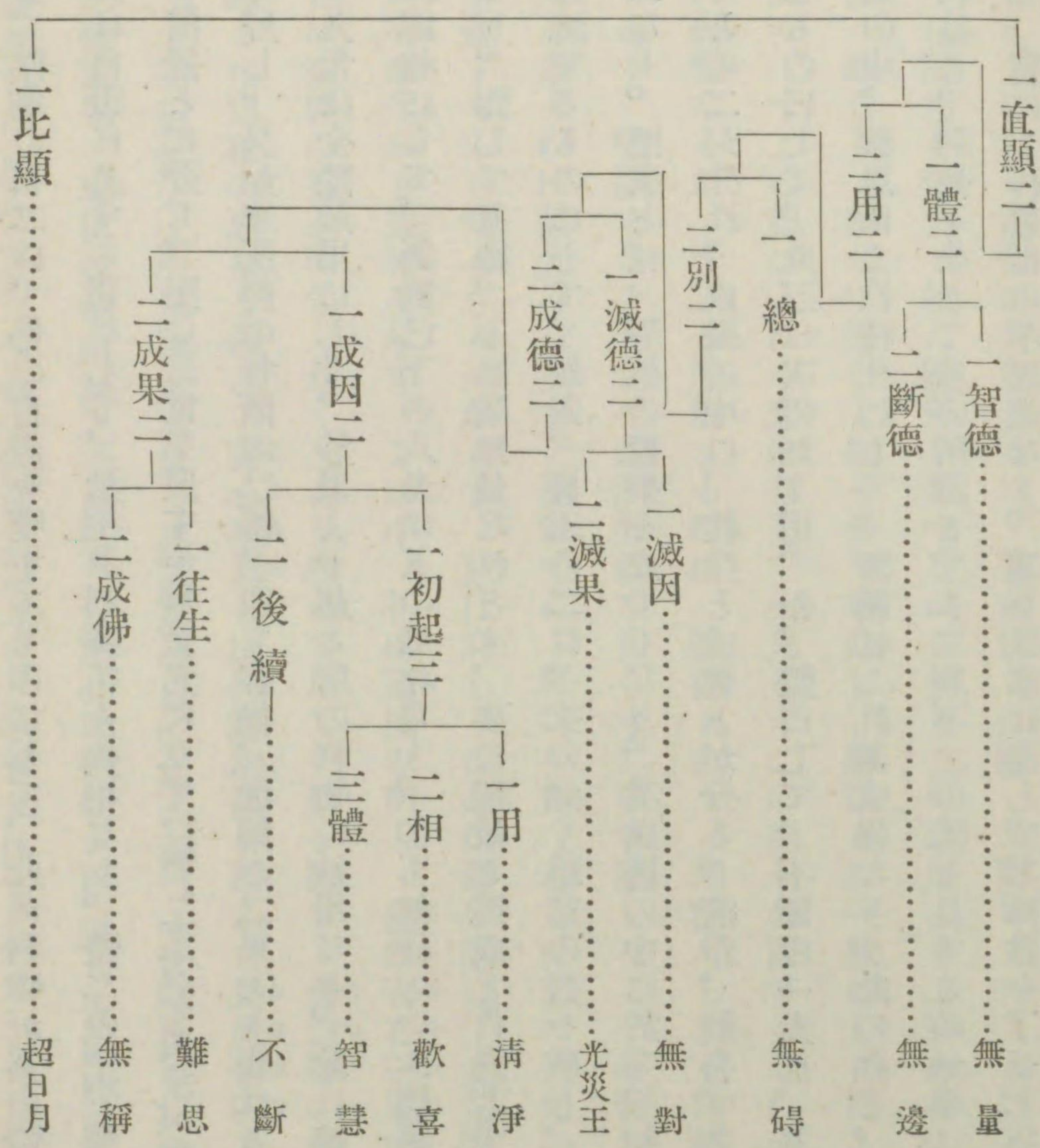
(二)大經正依第十三願成就文(上三三四)。(イ)竭其智力の智、『明曆』寛文二本は知に作るもの形誤。(ロ)推竿の竿、經文は算に作る。(ハ)長遠之數の之、『寛永』正保二本になし。

〔細釋〕 二に成就なり。此中二、初は光明無量の願成就文にして、後は壽命無量の願成就文なり。光明の中四段有り、一は釋迦の讚嘆にして、二に無量壽佛の下は諸聖の讚嘆、三に若有衆生の下は衆生の聞益、四に佛言我說の下は釋迦の結嘆なり。初の釋迦讚嘆の中二、一は對顯にして、二に是故の下は直明なり。對顯の中、最尊第一とは攝取不捨を今の別徳となす。次下の直明即ちこれ其義なり。直明の中二、初に直に名を擧げて嘆じ、後に其有衆生の下は其の益相を示す。十二光の義は『彌陀如來名號徳』(中外本)『顯名鈔』(上)『正信偈大意』(六)等に詳細せり、今『顯名鈔』の文を擧ぐれば左の如し。「第一ニ無量光佛トイフハ利益ノ長遠ナルコトヲアラハス。過現未來ニワタ

リテソノ限量ナシ。カストシテサラニヒトシキカスナキカユヘナリ。第二ニ無邊光佛トイフハ照用ノ廣大ナル徳ヲアラハス十方世界ヲツクシテサラニ邊際ナシ縁トシテラサストイフコトナキカユヘナリ。第三ニ無碍光佛トイフハ神光ノ障得ナキ相ヲアラハス。人法トシテヨクサフルコトナキカユヘナリ。碍ニヲイテ内外ノ二障アリ。外障トイフハ山河大地雲霧烟霞等ナリ。内障トイフハ貪瞋癡慢等ナリ。光雲無碍如虛空ノ徳アレハヨロツノ外障ニサヘラレス諸邪業繫無碍者ノチカラアレハモロ／＼ノ内障ニサヘラレス、カルカユヘニ天親菩薩ハ盡十方無碍光如來ト讚シタマヘリ。第四ニ無對光佛トイフハヒカリトシテコレニ相對スヘキモノナシ。モロ／＼ノ菩薩ノヲヨフトコロニアラサルカユヘナリ。第五ニ炎王光佛トイフハマタハ光炎王佛ト號ス、光明自在ニシテ無上ナルカユヘナリ。大經ニ猶如火王燒滅一切煩惱薪故トトケルハ、コノヒカリノ徳ヲ歎スルナリ。火ヲモテタキ、ヲヤクニツクサストイフコトナキカユヘニ光明ノ智火ヲモテ煩惱ノタキ、ヲヤクニサラニ滅セストイフコトナシ。三途黑闇ノ衆生モ光照ヲカウフリテ解脫ヲウルハコノヒカリノ益ナリ。第六ニ清淨光佛トイフハ無貪ノ善根ヨリ生ス、カルカユヘニコノヒカリヲモテ衆生ノ貪欲ヲ治スルナリ。第七ニ歡喜光佛トイフハ無瞋ノ善根ヨリ生ス、カルカユヘニコノヒカリヲモテ、衆生ノ瞋恚ヲ滅スルナリ。第八ニ智慧光佛トイフハ無癡ノ善根ヨリ生スルカユヘニコノヒカリヲモテ衆生ノ無明ノ闇ヲ破スルナリ。第九ニ不斷光佛トイフハ一切ノトキニトキトシ

テテラサストイフコトナシ。三世常恒ニシテ照益ヲナスカユヘナリ。第十二難思光佛トイフハ佛ヲノソキテヨリホカハコノ光明ノ徳ヲハカルヘカラサルカユヘナリ。第十一ニ無稱光佛トイフハ神光、相ヲハナレテナツクヘキトコロナシ、ハルカニ言語ノ境界ニコエタルカユヘナリ。コ、ロヲモテハカルヘカラサレハ難思光佛トイヒ、コトハヲモテトクヘカラサレハ無稱光佛ト號ス。無量壽如來會ニハ難思光佛ヲハ不可思議光トナツケ無稱光佛ヲハ不可稱量光トイヘリ。第十二ニ超日月光佛トイフハ、日月ハタ、四天下ヲテラシテカミ上天ニオヨハスシモ地獄ニイタラス。佛光ハアマネク八方上下ヲテラシテ障得スルトコロナシ、カルカユヘニ日月ニコエタリ。マタ日輪ハ火珠ノ所成トシテ能熱能照ノ徳アリ。月輪ハ水珠ノ所成トシテ能冷能照ノ用アリ。シカルニ彌陀ノ光明ハ清涼ノ光明ヲハナチテ焦熱、大焦熱ノホノホヲテラスコト月輪ノス、シキ徳ニコエ、溫和ノ光明ヲハナチテ紅蓮大紅蓮ノコホリヲトクコト日輪ノアタ、カナルヒカリニスケタリ。マタ日光ハ觀音ノ應化、月光ハ勢至ノ權化ナレハコレ彌陀如來ノ悲智ノ二門ナリ。因位果位ソノクラキ各別ナルカユヘニ彌陀ノ功德ニハヲヨフヘカラスカルカユヘニ超日月光佛トイフナリ。コノ十ニ光佛ハ一一ノ徳ニツキテソノ名ヲアケタリ別體ナルニアラス」と。

今謂く、十二光の釋、他門の諸師より今家の先哲に及んで幾多の解釋有り。今諸説を參照して聊か卑見を述べん。先づ初に圖示せば左の如し。



十二光の中に於て、無量より無稱に至る十一光は直に光徳を説き、超日月の一光は、近き世

物に比況して示すものにして、即ち前の十一光徳を近事に例示するが後の一光なり。直顯の中、無量、無邊の初二は、佛の自證を嘆ずるものにして、此は利物が爲の體なり。無碍より已下の後の九は自證に具する用にして、衆生を利益するの相なり。體二の中、無量、無邊、次での如く豎徹と横遍とに分ち、豎に三世を照すが無量光にして、横に十方を照すが無邊光なりと云ふ説有り、此も好し。又如來所得の智斷の二徳、即ち菩提、涅槃の二果とも窺はるゝなり。無碍より無稱に至る九光は全體起用にして、妙果より起る所の利物の妙用なり。此に總別有りて、無碍の一光はこれ總相にして、無對已下の八光は其の別相なり。即ち無碍といふ徳義を一分づつ説きしが無對等なり。而して其徳、不思議無量なれども、要は照彼と照成とに過ぎず。照破とは、界内の因果を破滅するものにして、無對、炎王の二は、次の如く惑業の因を破し、生死の果を滅することを云ふなり。照成とは、界外の因果を成するなり。其成因の中に於て、初起に約すると、後續に約するとの二が分れ、成果の中に、往生と成佛とが分る。清淨、歡喜、智慧の三は、これ初起に約せしものにして、此三は次の如く用、相、體にして、不斷の一光は、其相續を云ひしものなり。成果の中、難思はこれ往生にして、無稱はこれ成佛なり。此の如く、佛の自證を全じて、衆生を利益し、利他を全じて自の所證とする二利不二の徳を具するの如來は、十方三世に絶えて倫匹なし。實にこれ超世の不思議なり。其を近事に況して其殊妙を了せしむるが超日月光なり。

若し夫れ之を壽命に望むときは、壽命はこれ體、光明はすべてこれ其用なり。然に今は専ら光明中に體用を分つ、故に體用を分つといへども、勿論光に十二筋あるに非ざれば、十二はこれ皆同體一味なり。例せば海に十相を分つが如し。海はこれ一味にして而も十相を分説す。今も亦其と同一く、十二の徳はこれ一光に存し、一光に十二の徳を分説す、これ十二光なり。それ然り、本これ同體なるが、十二と分説する時は、體徳もあり、用徳もあり、破徳もあり、成徳もあり、因果もあり、驗顯もありと云ふ義利分れて自ら十二の各體となる。各體なれども元これ一體、故に一光を擧ぐれば諸光みな具す。聖教中に、單に一光、若くは二、三光の名を擧ぐるものは亦十二光を盡すものと知らざるべからず。猶ほ詳しくは是山勸學著『淨土和讃講義』(二九)を往見せよ。其有衆生。の下益相を示す。この中、初は通機を明し、後に若在三途の下は別縁を擧ぐ。三垢消滅とは滅罪の益を明す、且く三毒を擧げて以て一切を攝す。身意等の句は生善の益を明し。歡喜踊躍とは信後の慶喜を謂ふ。善心生焉とは作諸功德を謂ふ。見此光明とは『六要』五(五)に云く「問。人天善猶不能見佛之境界三途衆生爭見光乎。答。雖顯不見冥蒙光照故云見歟。或又現見是機感也。或依娑婆追福之力離其苦惱。心地觀經云以其男女追勝福有大金光照地獄光中演說深妙法開悟父母令發意已依追善力見彼佛光依見佛光其光施利佛光功能莫敢疑慮」と。即ち『六要』には三塗見光に三由を擧ぐ。冥照に由るが故に(一)。機感に由るが故に(二)。追福に由る

が故に(三)の三二これなり。第三義は『和語灯』七(七)に「又當時日ゴトノ御念佛ヲモカツ〜回向シマイラセラレ候ベシ。亡人ノ爲ニ、念佛ヲ回向シマイラセ候へバ、阿彌陀ホトケ光ヲ放テ地獄餓鬼畜生ヲ照シ玉ヒ候へバ、此三惡道ニ沈ミテ苦ヲ受ル者、其苦ミヤスマリテ壽終リテ後解脱スベキニテ候」とあるに依る。蓋しこれ黒谷隨他意の言のみ。今謂く第二義を正と爲す。

問。機感不同は如何なる因縁ありや。答。一例を擧ぐれば彼の天台『四教儀集註』上(廿)に乘戒の緩急に就て四句分別を設け、中に於て乘急戒緩なるものは三塗に在りて光明を見ることを得といふが如し。四句とは、

第一句 戒 緩 乘 急

第二句 戒 急 乘 緩

第三句 戒 乘 俱 急

第四句 戒 乘 俱 緩

なり。凡そ戒乘緩急とは、戒は戒律、乘は智慧のことにして、戒律と智慧との緩急を意味するが原意なるも、東陽師は之を戒律と佛乘とを求むるの緩急に隨義轉用して次の如く四句分別せり。第一句は戒緩乘急、之は戒律を求むること緩にして、佛乘を求むること急なる輩なり。此等の者は後世に畜生道に生るれども、法を求むるに急なりし故、三塗に見光をうるなり。第二句は戒急

乘緩、之は戒律を求むるに急にして、佛乘を求むるに緩なる輩なり。斯等の者は戒力にて人間に生ずれども、佛法心なき故、法を求むるの心なきなり。第三句は戒乘俱急、之は戒律も嚴重に守れば佛乘も熱心に求むる輩にして、斯かる人は人界に生じて、聞法を得るなり。第四句は戒乘俱緩、之は戒律、佛乘共に緩慢なる輩にして、之等の人は將來畜生に生じて、而も聞法を得ざるなり。

以上の四句分別の中に於て、第一句は正しく、別縁の機に當る、知るべし。

皆蒙解脱とは淨土の果を云ふ。上に三垢消滅と云ふ、これ此の因なり。今と互顯なり。

無量壽佛光明等とは諸聖の讚嘆を明す。中に二初は先づ光徳の遍至を明す、是は諸聖所讚の體なるが故に、光を聞といふは名體是れ不二の故なり。不但等の下は正しく諸聖の讚嘆を明す。亦復如是とは自の讚嘆に例す、即ちこれ第十七願力の然らしむる所なり。若有衆生等とは衆生の聞益を明す。威神功德とは攝取不捨をいふ。これ諸佛の絶えてなき所なり。次文には之を巍々殊妙と云ふ、亦同意なり。日夜稱説とは『六要』五(五)に云く「言稱説者問稱揚義歟、稱名意歟。答。

此合三意如淨土論讚嘆門中所言稱彼如來名上句有其稱揚稱名義耳」と見るべし。隨意等とは其の得益を示す。聞光これ因にして、得生は則ち果なり。而して廣門に據るが故に至其然等といふ。爲十方諸佛等とは即ち略門の體、故に佛道といふ。廣略これ不二の故なり。然に因人の稱

讚は往生に於てし、果人の稱讚は成佛に於てす。此はこれ彼此互顯なり。往生即成佛の故に、鸞師は難思、無稱の徳と爲したまふ。蓋し由有り、佛言我説等とは釋迦の結嘆なり。近く次上を承くれば則ちこれ難思無稱の義を嘆じたまふなり。

佛語阿難等とは二に壽命無量の願の成就なり。『述聞』に云く「如來眞常の壽命は無始無終にして不生不滅なり。何以の故に。始覺は本覺に冥じ、本覺は始覺を混するが故に。故に十劫成道の時、前後際を盡し、不生不滅を證得し、虚空壽の如し、文に不可稱計と云ふ、實に此意を證す。既に是れ其始終生滅を混す、長久長遠にして限極を知らず。抑、近言のみ」と。蓋し二乘に就て、其の不知を示すは近言のみ、知るべし。禪思とは專思の義なり。

異譯引意

〔本文〕 無量壽如來會言阿難以是義故無量壽佛復有異名乃至至心不斷絶
在心所願往生阿彌陀佛國已上。

〔校異〕 (一) 如來會第十二願成就文 (大正十一⁹⁵) 『本願寺本』は以下の引文の初に成就土の三字を左傍に細書す。(ロ) 無著光の三字、『寛永本』に之を脱す。(ハ) 不可思議光の可、經本になし。(ニ) 無等

不可稱量光の等の下經に光の字あり。(ホ) 暎蔽日光の暎、經文は映に作る。次の暎亦然り、(ヘ) 皆得歡喜の歡、『寛永本』に欣に作る。

(二) 平等覺經文 (大正十二²⁵⁸) (イ) 帛延譯の細註、『本願寺本』『報恩寺本』は格上に在り。『高田本』はなし。(ロ) 速疾等は六言四句の偈頌なり。

(三) 大阿彌陀經第十二願成就文 (大正十二³⁰²) (イ) 三那三佛の那、『寛永』『正保』二本は那に作る。(ロ) 人道經の經、『寛永本』に之を脱す。(ハ) 支謙譯の細註、『本願寺本』『報恩寺本』は友に作り「ウ」の假名を附す。(ニ) 求道爲菩薩照の照、經は時に作る。(ホ) 其快無比の其、經に甚に作る。(ヘ) 殊好勝於の殊、經文は殊に作る。(ト) 百千億萬倍の千、『寛永』『正保』二本になし。(チ) 獮狩、經文は禽獸に作る。(リ) 辟荔の辟、經文は薛に作る。(ヌ) 考掠の考、經の宋元明三本は拷に作る。(ル) 不得復活死の得、經文になし。(オ) 稱譽其光好の光の下經に明の字あり。

〔細釋〕 異譯に三有り、唐譯と漢譯と吳譯なり。この異譯三經の中、初唐譯は不可思議光の名を出し、次の漢譯は無量光明土の名を出す。蓋しこれ本經中に義有りて文無き所なり。故に今引て以て助成するなり。又吳譯は諸佛に超過するの義を説くこと明著なり、故に引て助成するなり。今は初めなり、この中二、一に徳名を擧げ、二に彼之等とは力用を明す。徳名を擧ぐる中、十四、別して無等を以て一と爲して別名とすれば(經の一本に無等の下に光の字あるが故に) 十五を成

す。この十五と本經の十二光とを對映して同異出沒を定むるにつきては諸家異說す。今暫く『對問記』の說によりて圖示すれば左の如し。

(1) 無量光	同	(十 五)
(2) 無邊光	同	(十 二)
(3) 無着光	清淨光	
(4) 無碍光	同	
(5) 光照王	炎王光	
(6) 端嚴光	無	
(7)(8) 愛光喜光	歡喜光	
(9) 可觀光	無	
(10) 不可思議光	難思光	
(11) 無等光	無對光	
(12) 不可稱量光	無稱光	
(13)(14)(15) 蔽日光蔽月光掩奪日月光	超日月光	

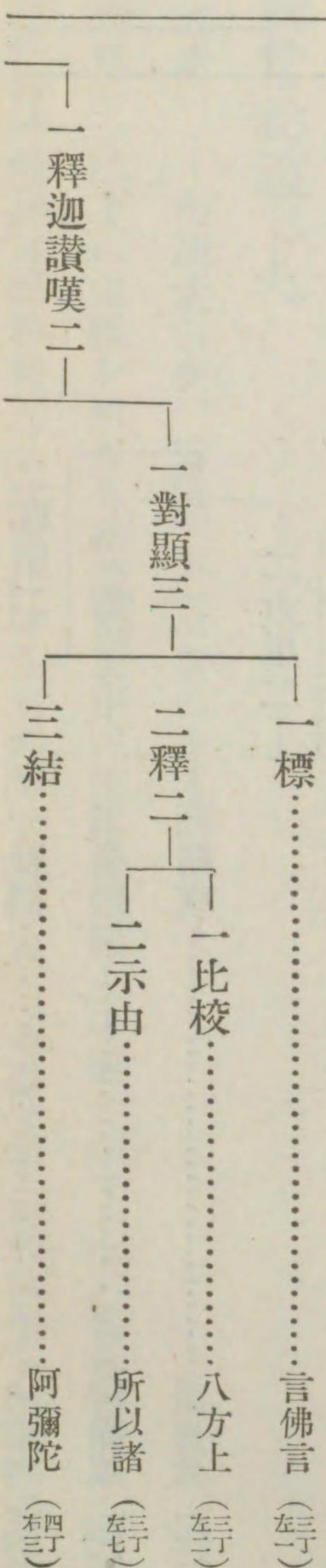
無	無	智惠光
無	不斷光	

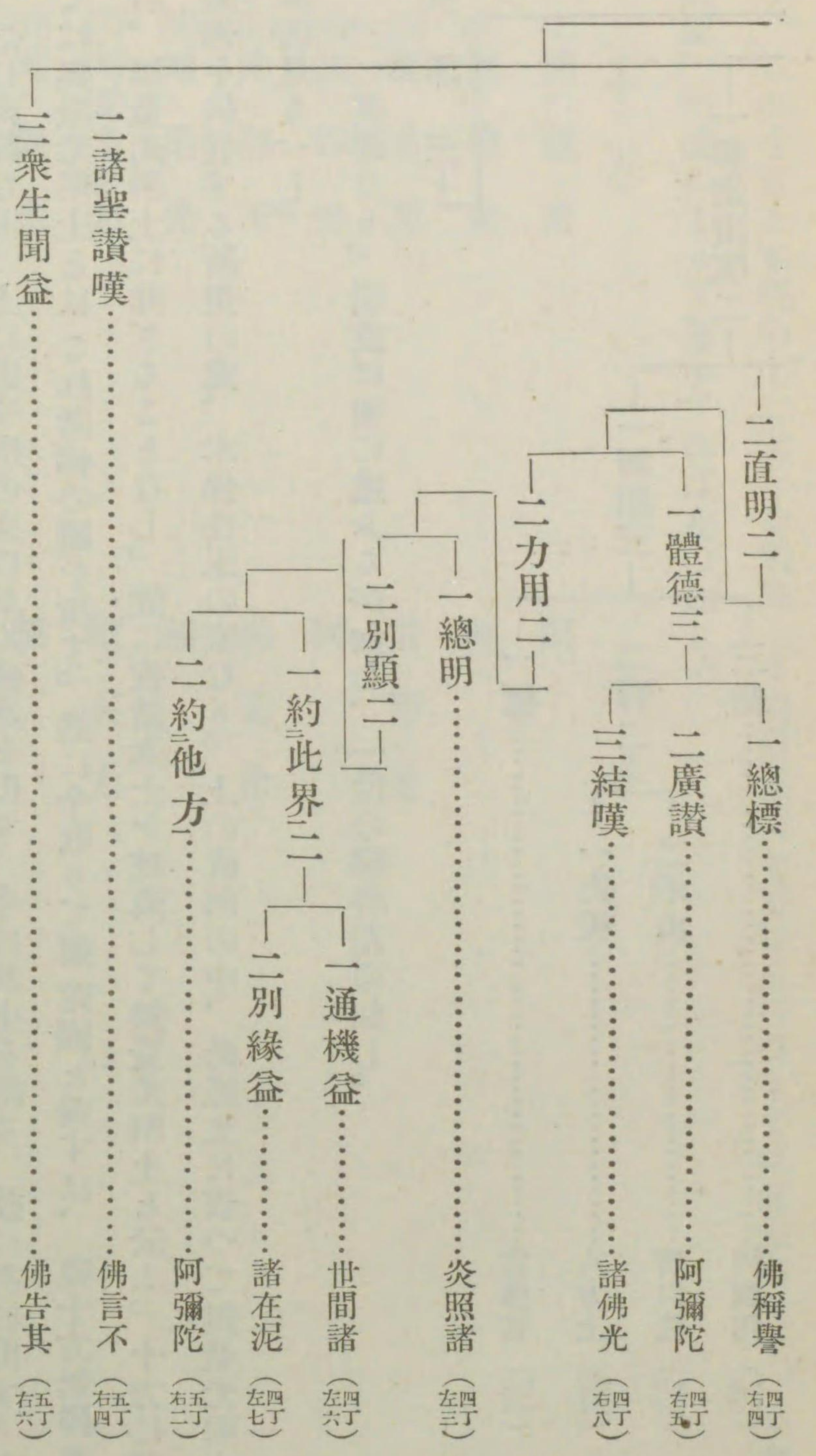
之を要するに十五と云ひ、十二と云ひ、無量名中の隨緣異說なり。増減を以て優劣を定むべからず。

二に漢譯なり。上に出す所の文は正しく佛身を出す。今は其土を語る、故に次に出す。本經に於ては無量光明土とはこれ諸佛の國を指す。然に今取りて彌陀國と爲すは、盡十方無碍光の至る所、無量光明土に非ざることなし。故に彼諸佛土を統攝して無量光明土と云ふ。十方に遊歴して諸佛を供養する所至の處、本佛法王の家なり。上の直明の中、此經文に依つて無量光明土といふ其義見るべし。

三に吳譯なり。引意は前に述ぶるが如し、一段の細科左の如し。

吳譯 三





一段の文意知り易し。中に於て別縁の益を明す中、泥。梨等とは『摘解』に云く「泥梨とは『名義集』に云く「文句云、地獄此方名、梵稱泥梨、秦言無有、無有喜樂、無氣味無歡無利、故云無有。」等と。擒とは字彙に云く「擒抽知切音癡、贊獸」と、狩とは字彙に云く「舒救切音獸」と。蓋し同音假借なり。薛荔とは『名義集』に云く「應法師云、正言閉麗多、此云祖父鬼、或言餓鬼」と。

拷とは字彙に云く「音考、打也」と。知るべし。

他方に約する中、光明名とは名體不二の名を謂ふ。上來は見光に就て益を明し、今は聞名に就て益を明す、これ不二を顯すに由る。佛告其有等の下衆生の聞益を明す。上は見光現在の益を擧げ今は往生を出す。究竟の益を以て光徳を結するなり。蓋し光號不二の旨文に在りて分明なり。

末 經

〔大意〕 引文の中二、一に經說、二に師釋あり。經說の中二、一に本經、二に末經あり、初は上に竟りて今は末經なり。この中二有り、一に『眞言經』にして、二に『涅槃經』なり。

眞言引意

〔本文〕 不空絹索神變眞言經言汝當生處是阿彌陀佛清淨報土乃至不復退轉我常祐護已上。

〔校異〕 (イ)内絹索の索、『明曆本』は素に作る。

〔細釋〕 已下に末經を引きて助顯する中、此經は、報土の義を顯す、『六要鈔』卷五(註)に云く「不空絹索神變眞言經卷數三十卷菩提流支三藏譯。清淨報土其說分明。是故引之證眞佛土」と。知る

べし。此經は三十卷七十八品あり、今引く所は其の第二十一卷解脫檀三昧耶像品(大正二〇³⁴²)に出づ。蓮華化生等とは今家、廣門の義に合す。『述聞』に、今經の引意を辨じて云く「暹、遠は同じく云ふ、報佛土を證すと、鎔云く、次上に往生阿彌陀佛國と云ふを釋すと。今云く、今の第五卷の大體に於て暹、遠を親しと爲すと、私に謂く、此上の唐譯已來の三文は、共に以て光明無量を助顯し、今此一文は以て其壽命無量を助顯す。然に上に佛の壽命を説き、此は則ち往生人を説く、彼此相藉りて以て主伴不二を成す。斯れ則ち證中より眞土を開く義に順す。助顯の旨深し、然に本經の意を以て之を望むれば、彼當分は猶是れ化身土の相なり。持呪を廻して生ずるは、即ち第十九願の雙樹林下往生なるが故に、正しく觀經九品の顯相に同じきのみ、集主の擇法眼は觀音深密の正意を徹見す、是を以て開顯して、之を眞實教に同ず、乃ち此の引用あるなり」と。佳し。

涅槃引意

〔本文〕 涅槃經言又解脫者名曰虛無。虛無卽是解脫。解脫卽是如來。如來卽是虛無。乃至。當知是則爲如來也。是名聞見畧出。

〔校異〕 此下に十三文を出す。即ち左の如し。

- (一) 北本第五如來性品(大正十二³⁹²)南本第五四相品(大正十二⁶³²)
- (二) 北本第六如來性品(大正十二⁴⁰²)南本第六四依品(大正十二⁶⁴²)
- (三) 北本第十四聖行品(大正十二⁴⁴⁵)南本第十三同品(大正十二⁶⁸⁷)
- (四) 北本第十七梵行品(大正十二⁴⁶⁵)南本第十五同品(大正十二⁷⁰⁸)
- (五) 北本第廿三德王品(大正十二⁵⁰³)南本第廿一(大正十二⁷⁴⁷)
- (六) 北本第廿三德王品(大正十二⁵⁰³)南本第廿一(大正十二⁷⁴⁷)
- (七) 北本第廿五德王品(大正十二⁵¹⁴)南本廿三同品(大正十二⁷⁵⁸)
- (八) 北本第卅三迦葉品(大正十二⁵⁶²)南本第卅一(大正十二⁸⁰⁹)
- (九) 北本第卅三迦葉品(大正十二⁵⁶²)南本第卅一(大正十二⁸⁰⁹)
- (十) 北本第十七梵行品(大正十二⁴⁶⁵)南本第十五(大正十二⁷⁰⁸)
- (十一) 北本第卅四迦葉品(大正十二⁵⁶⁷)南本第卅一(大正十二⁸¹³)
- (十二) 北本第卅五迦葉品(大正十二⁵⁷³)南本第卅二(大正十二⁸²⁰)
- (十三) 北本第廿七師子吼品(大正十二⁵²⁷)南本第廿五(大正十二⁷⁷²)

本文の校異煩雜なれば、從來と體裁を變更して、讀者の便に供せり。一段の校異中井氏の『本典附録』に負ふ所多し。

りて、是名善男子善女人の八字と共に一句をなし、以つて上來の文を總結するなり。

阿僧祇土の土、『寛文本』は劫に作るもの形誤。

是名菩薩の薩の下、本經に「修大涅槃微妙經典具足成就第七功德」の十六字あり。今之を略すること前の如し。

者一の者の下、『寛永』、『正保』二本は「一闍提輩無善法者」の八字重複せり。如其生の如、『寛文本』、若に作る。

而得見佛性、經の南麗本及び北本は得見佛性に作り、南三本は而得佛性の四字に作る。

或爲衆生の爲の上に、經には我の字あり。

一闍提輩の輩の下、經に、「有善法者是義不然。何以故一闍提輩」の十五字有り、今之を脱す。

求業の業の下、經文には施業の二字あり、『本願寺』、『報恩寺本』は後業に作る。

善解の解、經文は能に作る。

能知是人轉上作中の八字、『寛永』、『正保』二本に之を脱す。

- 同七行目
- 十二丁右一行目
- 同四行目
- 同五行目
- 十二丁左一行目
- 同二行目
- 十二丁右四行目
- 十二丁右五行目
- 十二丁左一行目
- 同二行目

十三丁右二行目

同三行目

同八行目

十三 左五行目

同七行目

十四丁右一行目

同二行目

十四丁左四行目

同六行目

同七行目

十五丁右三行目

同五行目

同七行目

十五丁左四行目

從弟、經文は一連に熟字するの意か。

出家修道我の五字、『寛永』、『正保』二本に之を脱す。

能受持戒の能、『寛文』本になし。

乃至、四百十六字を乃至す。

白佛の白、『寛文本』は自に作るもの形誤。

乃至、次上の利鈍差別と下の或有説者の問三百二十六字を乃至す。隨人等はこ

この文に非ず。

乃至、百四十九字を乃至す。

靜亦の靜、經文は諍に作る。

乃至、五十九字を乃至す。

阿羅呵の呵、經の北本は訶に作る、『本願寺』、『報恩寺』本は可に作る。

大象王の大、『寛永本』になし。

得解脱の解、經文になし。

大智海の智の下、經に慧の字あり。

名爲衆生の爲、經文になし。

同 七 行 目 佛佛の佛、南麗及び北本になし。
 十六丁右三行目 略出、「寛文本」は略抄に作り、「高田本」は抄出に作る。
 同 又言の又、「寛永」・「正保」二本は亦に作る。
 同 四 行 目 我以の以、經に於に作る。
 十六丁左一行目 法身、「明曆本」に之を脱す。
 同 三 行 目 世常の常の下、經に住の字あり。
 同 五 行 目 無爲法の爲の下、「寛永」・「正保」二本は有無の二字あるもの過剰なり。
 同 法又の又、「寛永」・「正保」二本は亦に作る。
 同 乃至、七百五十字を乃至す。
 同 七 行 目 何以の以、本經になし。
 同 八 行 目 聲聞 經文は了了に作る。
 十七丁右二行目 男子我の我、「本願寺」・「報恩寺本」になし。
 同 四 行 目 是名隨自意の自、「寛文本」目に作るもの形誤なり。自の下、「寛文本」他の字あるもの過剰。
 同 七 行 目 阿摩勒菓の菓、本經は果に作る。
 十七丁左五行目

十八丁右三行目 乃至、三十一字を乃至す。
 同 四 行 目 一切衆生より善男子に至る廿三字、「寛永本」之を脱す。
 同 七 行 目 二者の者、「寛永」・「正保」二本に無し。

〔細釋〕 引意に就きて「六要」卷五(終)に云く「問此經聖道爲之說非今所依隨而所引經文之中無一句而說淨土文何引之乎。答雖爲聖道所依之經如來教法元無二故二門雖異和會無違。集主御意深達此義。明了彌陀名義功德全爲涅槃無上極理以此義故明眞佛土極談已證故被引用涅槃妙文」と、「摘解」に云く「今謂く、引用の意は該して之を言は、下の御釋に云々し給ふが如く、安養淨刹の眞報土は即ち涅槃界なることを顯し、以て往生者は悉く性を見ることを示すのみ」と。「仰信錄」に云く「初は涅槃の果徳を明して、主伴不二、光壽無量の覺體を顯し、後に衆生の所見を明して、必至滅度の果體、即ち本佛の自證に冥することを顯す」と。今謂く、後の結成の文より還つて、今意を窺ふに、引意は誠に「摘解」の如し。「仰信」に文を分ちて更に明瞭を加ふ、須く參照すべし、計して十三文あり。出據及び異同は校異を見よ。
 又解脱者乃至亦復如是略。其一四相品の文なり。之に自ら兩段あり。初は眞解脱の徳を明し、後は三寶一體の徳を明す、初の中、經の前文に云く「大般涅槃者名解脱處」と。次に廣く解脱の義を説きて一百餘句を擧ぐ。此中略して四義を出す。云く虚無と、不生不滅と、無上々と、無愛無

疑となり、以て眞解脱の徳を示す。如來即是涅槃等(等)とは三寶一體の徳を明す。『對問』に云く「經の前文に三歸を説き、結して如來即是等と云ふ。是れ一體三歸に約す。是を以て迦葉菩薩其所由を問うて、世尊若涅槃等と云ふ」と。『會疏』に云く「初問三歸者、既言解脱如來涅槃唯是一法。唯應一體三歸而已。云何言三、即舉三難一」と見るべし。佛告等、とは一體即三なることを顯す、『會疏』は分つて四段と爲す。一に體妙なるが故に、應に三なるべし。二に名義を料簡するが故に、應に三なるべし。三に引證するが故に、應に三なるべし、四に自在不定なる故、應に三なるべし、今此中は初二段の文を引くなり。一切衆生等とは初に體妙の故に即三の義を明す、『會疏』に云く「若解脱涅槃、定是一體不得三者、非妙非寶、不可歸依。即三而一、即一而三、乃是妙寶、即可歸依」と。文に「怖畏生死故求三歸、以三歸故、則知涅槃」(取意)とは、其義なり。

有法名一等とは、二に名義料簡するが故に應に三なるべきの義を明す。『會疏』に云く、「解脱、如來及以涅槃同皆是常、所以名同其義則異、從同故一從異故三、名一義異尙得爲三、名義俱異何得不三」と。『述聞』に云く「無碍光佛、一體三寶、廣略相入、名一義異なり。異を攝して一に歸し、以て略説の一法句と爲す、名義俱に異れば、略を開いて廣となし、廣は則ち三寶宛然たり。主伴別有り、略は則ち一盡十方無碍光佛、三寶一體、主伴不二、一に即するの三、則ち三を混ぜ

ず、而して一たび佛に歸せば三に即するの一、則ち一を破せずして、三常に存す」と。佳し。
又言光明乃至爲智慧。其二、四依品の文なり、『述聞』に云く「文は下の無碍光如來に應ず。不羸劣とは勢力ありて、他の助を假らざるを謂ふ、此即ち無碍光義なり、此の勢力有りて、阿彌陀と名く、故に云ひて如來と曰ふ、又光等とは二門偈に無碍光明大慈悲と云ふが如し、斯光明即ち諸佛智なり」と、蓋し佳し。

又言善男子乃至不可稱計妙。其三、聖行品の文なり。前半は、三寶同一、無爲常住の徳を擧げ、主伴同くこれ無爲法身を顯し、善男子譬如等(等)の後半は醍醐最上味は今佛の徳と爲す、若し天台に依つて之を會せば、法華一乘を今の本師の徳に歸するなり。

又言善男子道乃至而有妙。其四、梵行品の文なり。涅槃四徳の中、常と無常とを分別して、菩提、涅槃、常住不滅の徳を顯す。今文は佛、迦葉の問に答ふるもの、其の問意に謂く、世尊よ、第一義諦は亦名けて道となし、亦菩提と名け、亦涅槃と名く。若し菩薩あつて道を得ることありと言は、菩提涅槃は則ち是れ無常なり。何を以ての故に、法若し常とならば、得べからずと云云。今佛之に答ふるに、先づ汎く道に二種ありて、常の道は得と雖も、而も無常に非ざることを明す、道與菩提等とは、『會疏』に云く「二正答、今云道定圓常本來有之、爲惑所覆、斷惑復本義言其得、得而是常」と。見るべし。

又言善男子有大乃至故名大涅槃。其五、徳王品の文なり。四徳を明す中、これ其樂徳なり、樂に四義有り。一に無苦無樂、二に大寂滅、三に一切智、四に身不壞なり。

又言不可稱量乃至善女人抄。其六、徳王品の文なり。四徳を明す中、これ其の淨徳なり。淨に亦四義有り、云く一に二十五有の不淨を斷するが故に、二に業清淨なるが故に、三に身清淨なるが故に、四に心清淨なるが故に。是名等の下は總結なり。本經に云く「善男子、是名善男子善女人、修行如是大涅槃經、具足成就初分功德」と。此品の初に言く、「菩薩修行大涅槃經得十事功德」と。今は其初分を出して、是の如く證知するを善男子、善女人初分功德を得と名くと云ふなり、然に今修行已下を省略するは如何と云ふに、『對問記』に云く、「自然の略のみ」と。『摘解』に云く「次下の引文の是名菩薩の下に、本經には「修大涅槃微妙經典、具足成就第七功德」の句あり。文を截り去ること今と同例なり、豈に祖意なしと云ひて可ならんや。謹んで按ずるに、佛の大清淨を稱して善男女と爲すは、此大涅槃は衆生の因果を成するが故なり。次の文に云く、「是名菩薩者、大果具因徳、常作菩薩事、故名菩薩」と。今も亦然り、此大涅槃は衆生の因果の徳を具して、因となり、衆生の果となる。故に善男女と名くるなり。此結文は文の初の不可稱量、不可思議と相映す、註に不可思議の義に明すに、皆自利の處に、利他の徳を具することを辨す、十七種莊嚴悉く利他の徳を具すれば、衆生自力の五念五徳は何の用ふる所ありて之を修せんや、

たゞこれ一心の具徳を顯すの施設なり。而して善男善女と云ふは、亦具徳に由つて、此稱を得るなり、此の如くなれば、善男女の稱は全く此涅槃の利他の徳名のみ、或は云ふべし、此結文は本經の意に依れば、能く從來の所説を證知する人の徳を顯すものなるが故に、今も亦獲信行者は大涅槃を證知するの徳あることを顯し、以て信心佛性の義を示すなるか、信卷の至心釋、及び信樂釋に、『涅槃』の佛性の文を引くの意之に同じ」と。考ふべし。

又言善男子諸佛乃至是名菩薩。其七、徳王品の文なり。引意につき『對問記』に云く「此經の前の文に、我、樂、淨の三徳を説き、上に我徳を略して換ふるに、今文を以てするは、智慧無碍を以て我徳を示して、無碍自在の徳に合するなり」と。『述聞』に云く、「此文は上の第二文と同じく下の盡十方無碍に應ず。無明即明なれば、集として斷すべきなし、故に不起と云ふ。不起は不二法門を證するを明す。生死涅槃彼此あることなし、故に無碍と云ふ。周遍法界此覺に非ざるなし、故に遍滿と云ふ。既に横に無碍なれば、亦是れ豎に三時を越へて、罣碍あることなし、故に無變と云ふ、名菩薩とは、因果無碍の義を示して利他自在を顯す」と。二説の中、『對問』の説佳し。又言迦葉菩薩乃至亦復如是。『摘解』に云く「已下衆生の佛性を明すは、亦涅槃の果徳を顯すに在り。佛性の顯現は彼士徳なるが故なり」と。佳し。『仰信錄』に云く「本典の中に涅槃經を引きて、佛性義を明すこと、凡そ三處在り、一に行卷の一乘海釋、二に信卷の信樂釋、三に今文な

り」と。須く就て見よ。今引用の意を窺ふに、大科二と爲す。初四文は佛性は未來所得を明し、後の二文は因人見性する能はざることを明す。結成と照應して其旨を領すべし。

此れ其八迦葉品の文なり。佛性は未來所得を明す中、通じて一切に就て明す。文に「一切衆生乃至未來具足莊嚴清淨之身而得見佛性」と云ふ。知るべし、此中亦二あり、一に問、二に答なり。問の中に二事あり、『會疏』に云く「佛性既以三世不攝、云何云未來、次問若云闍提金無善法、何以得有憐愛等心、若有此心卽是有善」と、^上。佛言善哉等は、二に答の中に亦二あり、一に佛性は未來なりやの間に答へ、二は闍提は無善なりやの間に答ふ。初の中に亦二あり、初に正しく佛性は未來なりと答へ、二に悉有佛性の義を明す、『會疏』に云く「性非三世約未來得故云未來、故下學例說因爲果、說果爲因、佛性亦爾、云未來者因中說果」と、^上。世尊如佛等とは、二に悉有佛性の義を明す、初は迦葉の問にして、後は如來の答なり、『會疏』に云く「因前生果性、既非三世、云何言衆生有佛性。答、性非内外猶如虛空、而諸衆生定有此性、文悉皆有之」と。^上。不名爲一爲常亦不得言一切處有とは、謂く、虛空は一切處に周徧すと雖も、色法の相の上には平等常住にして、是れ虛空なりと言ふべからざるなり、此を以て佛性周徧して、一切衆生に在りと雖も、衆生は顯現すること能はざるを顯す、之を引いて、次上の當得にして現在に之を得べからざることを詳かにすと。見るべし。如汝所言等とは、二に闍提は無善なりやと

の間に答ふ、此は迦葉の間に答へて、自ら下を起す、下に極惡斷善も亦皆佛性あることを明す。今は其張本と爲るなり。

又言善男子乃至爲第一義諦略。其九、迦葉品の文なり。上は闍提無善を示し、今は闍提有佛性を明して、彌陀の大涅槃は、闍提の機を攝することを示す。中に於て、初は根性不定を明し、後に或有說の下は闍提有佛性を明す、初の中二有り、一に正く根性不同を明し、二に迦葉菩薩の下は善星に就て其相を示す。又言等とは『頂戴錄』に云く「此文は上と一連なるが故に、已上又言の四字は恐くは是れ衍文ならん」と、『述聞』に云く「必しも衍文ならじ、別に顯す所ありて上と異なるが故に」と。善し。隨人隨意等の十四字は、經文には後に在りて、前を結す。故に之を引くこと宜しく或有說等の文の後に在るべし、今之を此に挿入せるは次上の文に連接して、上來に諸根不定なるが故に、佛説も亦不定なるを明せる文の結句と爲すが故なり。或有佛説等とは、闍提到佛性あることを明す。根性不定の故に先づ善根を斷じ、斷じ已つて復た生ず、善星比丘已に善根を斷じ、後に還善根を生じて、菩提を得るが如し。如來世尊等とは、國土等の五爲あるを以ての故に隨宜說法することを明す。爲國等とは、初に五爲の爲に二種説を作すことを明す。『會疏』に云く「國土者、如多寒國、用毛褥、著皮鞞時節者、饑饉時、乞唯得肉食、爲他語者、如九住言不見、十住言可見、爲人者隨人根性」と。二種説とは、此文に、佛如來畢竟して涅槃に入

ると説き、或は畢竟して涅槃に入らずと説く等の、二十一事の二種説あることを明す、故に今五爲を以て其所由を辨するなり。

於。一。等。と。は。更。に。自。在。説。に。種。々。あ。る。こ。と。を。明。す、中。に。於。て。自。ら。三。あ。り。一。に。名。義。に。約。し。て。明。し、二。に。廣。略。に。約。し。て。明。し、三。に。眞。俗。に。約。し。て。明。す。初。に。名。義。に。約。す。る。中。に。二。あ。り、一。に。列。章。な。り、疏。に。云。く「若。欲。對。明、應。有。六。句、對。一。名。説。無。量。名、應。云。於。無。量。名。説。無。量。義」と。今。文。は。略。し。名、應。云。於。無。量。義。説。無。量。名、對。無。量。義。説。無。量。名、應。云。於。無。量。名。説。無。量。義」と。今。文。は。略。し。て。一。邊。を。舉。ぐ。二。に。云。何。一。名。の。下。は。解。釋。な。り。初。の。章。を。釋。す。る。文。に。涅。槃。を。以。て。す。る。は。法。に。寄。す、法。に。因。果。あ。り、此。は。是。れ。果。法。な。り、下。文。の。所。説。の。陰。は。是。れ。因。法。な。り、次。の。章。を。釋。す。る。中。に。如。帝。釋。と。は、次。上。の。涅。槃。は。法。に。寄。せ、此。は。人。に。寄。す。る。が。故。な。り、而。し。て。此。文。略。し。て。具。出。せ。ざる。は、今。は。用。に。非。ざる。が。故。な。り。次。に。云。何。於。無。碍。と。は。第。三。章。を。釋。す、『疏』に。云。く「就。如。來。萬。德。具。足。釋。之、即。是。無。量。義、一。義。一。名。即。是。無。量。名」と。

復。有。一。義。の。下。は『疏』に。云。く「二。重。釋。第。二。文、前。帝。釋。止。就。善。義、有。無。量。名、名。不。通。惡、爲。顯。此。意、重。約。五。陰、此。是。有。漏、復。名。顛。倒、陰。是。苦。諦。境、爲。念。處。所。觀、觀。色。不。淨、受。苦。想、行。無。我、識。無。常、復。名。四。念。所、但。除。識。陰。餘。四。陰、即。是。四。識。住。處、陰。通。內。外、故。名。四。食、能。通。名。道、因。於。實。法、有。假。名。時、故。云。時、體。即。無。相、名。第。一。義、煩。惱。者。正。在。行。蘊、解。脫。者。有。爲。解。脫、十

二。因。緣。者、即。以。五。陰。爲。因。緣。體。三。乘。者。成。三。乘。之。身」と。廣。中。等。と。は。二、に。廣。略。に。約。し。て。明。す、經。に。云。く「云。何。名。爲。廣。中。説。略、如。告。比。丘、我。今。宣。説。十。二。因。緣、何。名。爲。十。二。因。緣、謂。因。果、云。何。名。爲。略。中。説。廣、如。告。比。丘、我。今。宣。説。苦。集。滅。道。苦。者。所。謂。無。量。諸。苦、集。者。所。謂。無。量。煩。惱、滅。者。所。謂。無。量。解。脫、道。者。所。謂。無。量。方。便」と。第。一。等。と。は。三。に。眞。俗。に。約。し。て。明。す、經。に。言。く「云。何。名。爲。第。一。義。諦。説。爲。世。諦、如。告。比。丘、吾。今。此。身。有。老。病。死、云。何。名。爲。世。諦。説。爲。第。一。義。諦、如。告。憍。陳。如、汝。得。法。故、名。阿。若。憍。陳。如」と。『會。疏』に。云。く「世。諦。爲。第。一。義。諦。者、阿。之。言。無、若。之。言。智、謂。其。得。無。生。智、此。即。約。世。諦、説。第。一。義。諦」と。此。經。の。引。意。に。つ。き。て『述。聞』に。云。く「此。文。は。總。じ。て。豫。め。下。の。二。乘。門。を。顯。す、彼。に。大。品。經。を。引。く。中。に。新。發。意。菩。薩。の。爲。の。説。あ。り、今。文。に。眞。俗。廣。略。定。説。す。べ。から。ざる。を。明。し、諸。法。性。空。如。化。不。可。得。を。示。す。故。な。り」と。『對。問。記』に。云。く「一。名。等。の。三。説。は、第。一。は。涅。槃。の。一。名。に。衆。名。を。含。む。こ。と。を。明。し、第。二。は。如。來。の。萬。德。具。足。に。約。し、第。三。は。善。惡。融。即。不。二。に。約。す、こ。れ。自。在。の。説。を。明。す。に。就。いて、念。佛。の。光。壽。の。體。德。を。顯。さん。が。爲。の。故。に、此。三。を。舉。げ。て、經。の。第。二。釋。を。略。す。る。猶。如。帝。釋。等。な。り」と。蓋。し。考。ふ。べ。し。

又。言。迦。葉。復。言。乃。至。亦。名。涅。槃、其。十。梵。行。品。の。文。な。り、『摘。解』に。云。く「今。の。引。意。を。按。ず。る。に、次。上。は。俗。諦。に。約。す、多。名。を。出。す。が。故。な。り、迷。悟。無。別。に。し。て。所。得。な。き。が。如。きは、是。れ。不。二。に。約。す。る。が。故。な。り、是。を。以。て。此。文。を。引。き。て、而。二。に。約。し、別。に。眞。報。佛。土。の。在。る。こ。と。を。示。す。な。り」と。佳。し。

又言善男子乃至是無爲法。其第十一、迦葉品の文なり。經文は、佛縁に趣きて、異説し、衆生は解せずして諍論を成ずるを致すことを明す、凡そ廿一條とは、一に是れ涅槃不涅槃、乃至二十一に有十方佛無十方佛なり、今文の第五は佛身の有爲、無爲を争ふの説なり。今經の引意につきて『頂戴録』に云く、此は眞實の報身を證す、即ちこれ法身常住涅槃常樂なり」と。『述聞』に云く「生身、法身とは即ち入不入の義なり、菩薩は則ち雙べて之を忘す、假名の者の若きは互に執じて互に争ふ、即ちこれ所謂新發意なる者なり、有爲無爲並びにこれ性空如化に非ざるはなし、故に入不入皆不可得なり、斯を如來眞常の壽命と爲す」と。『摘解』にこの二説を批評して、前説を是となす、即ち云く「私に謂く、經文の當義に依れば、後の説佳なり、此文は佛は縁の爲に異説し、衆生は解せずして諍論を致すこと廿一條ある中、第五の佛身有爲無爲を争ふの説を擧げて、各々佛意を解せざるを顯すの言なるが故に。然に今の引意は次上の引文に准すれば、前説は祖意を得たるが如し」と。

又言如我乃至說無量法抄。其第十二、迦葉品の文なり。此と次の十三師子吼品の文とは、佛性は因人の所見に非ざることを明し、以て安樂佛國に到つて、本佛の自證に冥するが故に、佛性を顯すを得ることを知らしむ。中に於て此文は三説に就て明す、後文は二見に就て簡ぶ。初標、後の善男子の下は釋なり、釋の中自ら三、隨自、隨他隨自他につき、『摘解』に云く、「隨他説とは、

他の十地菩薩の所見に隨つて説くを謂ふ、隨自説とは、佛實智の所見に隨つて説くを謂ふ、隨自他説とは、佛の權實の所見及び佛弟子、悉有佛性の説を聞いて之を信じ、自ら煩惱に覆はるゝを知るに隨うて説くを謂ふ。三説異なりと雖も、其佛性は唯佛知見にして因人可見の法に非ざることを顯すは一なり。故に今之を引きて西方涅槃界に入らざれば見ること能はざるを示すのみ」と。今謂く、佛性本と、自他隔別なし、然に十住菩薩、唯、自得を知つて一切皆得を知らず、即ちこれ見不了なり、故に少分見といふ、少と雖も、見るを得るが故に、彼に隨つて見と云ふ、之を隨他意説と爲す、餘は摘解の如し、善男子如來等とは總結なり、謂く三説異なりと雖も、悉有佛性を明すと爲すが故なり。

又言一切乃至是名聞見略。其十三、師子吼品の文なり。文に兩段有り。前段は宗祖の意は因人は佛性を見ること能はざるを證し、以て此土難見にして、彼土顯性を顯す、中に於て亦二、初は見生了否を明し、後に善男子見有の下は二見を分別す。後文の中、兩重分別あり、初は十住を聞見と約し佛地を眼見と爲す、次に九地以還を聞見と爲し、佛及び十住を眼見と爲す。疏に云く、「此中應作四句、第十住亦聞見亦眼見、九地已下但有聞見、佛地住有眼見、文中自出此之三句、若衆生、聞而不信者非聞見、非眼見」と。『仰信録』に云く「私に案するに、善男子復有眼見諸佛如來已下は、現本の點聲恐らくは祖意にあらじ、諸佛如來十住菩薩を眼見と爲し、九地已

下を聞見と爲し、復有聞見の四字を下に屬す、何となれば、上の文は了見を眼見と爲し、不了見を聞見と爲し、了不了相反するが故に、眼見なれば聞見に非ず、聞見なれば眼見に非ざるなり、此中に自ら四句あり、初は佛地を眼見と爲し、次の十住菩薩は亦是眼見亦是聞見、(自佛性に約すれば、これ眼見にして、他佛性に約すればこれ聞見なり。)次の九地已下の一切衆生を聞見と爲し、次の不信の菩薩を不聞見と爲す」と。今謂く仰信を是と爲す、然に現流の助聲は亦同義と爲す、必しも改易を要せず。師子吼等とはこれ其の後段なり。文に三重有り、一に身口二業、二に形聲兩勝、三に身心二通なり。引意は『摘解』に『述聞』の意を敷演して云く「今謂く、次上の文に衆生は唯聞見に堪ふることを明せば、行者の未だ眼見の地に至らず、心に怯弱を生ずるを恐る。是を以て今文を引いて、聞見、眼見は其徳是れ一にして同じく佛の心相を知ることを顯し、聞名は能く佛心を知るが故に、未來に必ず佛性を顯すことを示すなり、佛心とは唯これ攝取の大悲なり、此を利養の爲にせずして、衆生の爲にすと云ふ。故に攝取の義を領知すれば、如來の佛心を見るなり、是に於て、信心佛性の義自ら成す」と。蓋し佳し。

師 釋

〔大意〕 引文の中二、一に經說、二に師釋なり。經說は上に竟りて、今は師釋なり。この中二有

り。一に宗師を引ききて正證し、二に他師を引ききて助顯す。正證の中三、一に北天、二に雁門、三に終南なり。

北 天 引 意

〔本文〕 淨土論曰乃至廣大無邊際已上。

〔校異〕 『淨土論』(卷)の文なり。(イ)安樂國の國の下四句を越隔す。

〔細釋〕 一論偈首成上起下の文を略し、其前後の二偈を出す。略する所以は所聞なきが故に、二偈を出すものは、謂く前は眞佛を證し、後は眞土を證するが故に、下(三)の私釋の如し。眞佛を證する中、一心樂とは是れ能歸なり、盡十方等とはこれ其の所歸なり、而して所歸の外能歸あるなし。能歸の舉體、これ所歸の徳なり、此土に在るや、無碍光佛、衆生に廻入して、其の一心と爲る。斯の一心を得て、彼土に生ず。生ずれば、即ち衆生無碍光佛に冥す、斯を一心所得の妙果と爲す、衆生の所得を即ち自證と爲す、是を眞佛と爲す。上に不可思議光佛と云ふは、彼は別相に據り、此は其の總相なり、衆生をして、往生成佛せしむるはこれ無碍光力の故なり。次に眞土を證する中、別して清淨及び量二徳を引くものは、高僧和讃に「安養淨土ノ莊嚴ハ」等とあるもの亦今と同じ。二徳を以て十七種を總する所以は如何と云ふに、『述聞』に云く「謂く清淨を以てす

るは、靈山及び華藏等の諸佛の國土と異り、三界を過ぐるが故なり。次に量徳を以てするは、諸佛土を全じて一佛土に歸して、無量光明土を成ず、邊際なきが故なり。邊際なきが故に、一切皆中、平等無差、一涅槃界、無差別差、入るに難易有り、一土と諸と、こゝに於て分有り、差別より入つて、無差別に歸す、これを之名けて遍法界覺と爲す。即ち佛廻向の大滅度なり」と。大に佳し。

雁門引意

〔本文〕 註論曰莊嚴清淨功德成就者乃至十方無量佛咸各至心頭面禮已上抄出

〔校異〕 七文あり。

- (一) 論註下(註)の文 (イ)勝過、『寛文本』は過勝に作るもの倒置。
- (二) 註上(註)の文 (イ)積習所成の成、『寛永本』感に作るもの形誤。(ロ)是聖種性の是、『寛永本』になし。(ハ)悟無生忍の忍の上、註文法の字あり、(ニ)言性者の者、註文になし。(ホ)成就故正道大慈悲の正道の下、『本願寺本』・『報恩寺本』大道の二字あり。『明曆本』傍に校異をなす。(ヘ)即是出世善の是、『論註』の文になし。
- (三) 論註上(註)の文 (イ)本願力の力、註文になし。(ロ)計不應の計、『寛文本』討に作るもの形誤。

(ハ)牛觸之の牛、『寛永本』角に作る。

(四) 論註下(註)の文 (イ)諸經說の説、註文は統に作る。

(五) 論註下(註)の文 (イ)能神者の神、『寛文本』之の字あり。

(六) 論註下(註)の文 (イ)力願相府の府、本文は符に作る。(ロ)不差の差、『寛文本』卷に作るもの形誤。(ハ)曇鸞和尚造、『本願寺本』は一行に書す、『報恩寺本』は前後一行半を缺ぐ。(ニ)釋名等の註、『寛永本』は無點なり、傍の字、『寛永本』佛に作るもの形誤。讚諸本に贊に作るもの形略なり。(ホ)慈光遐被の遐、明曆、寛文二本は遙に作る。(ヘ)佛光能破の光、『寛永本』之を脱す。(ト)莫能惻故の惻、註文は測に作る。(チ)理類の類、本文は類に作る、此字註、『本願寺本』・『高田本』・『寛永本』になし、『報恩寺本』は格上に此註を横書す、但し徒回反の三字なし、註の中、波の字、『報恩寺本』は破に作る。『正保』・『明曆』・『寛文』三本今の如く波に作るもの形誤なり。纏の字、『澁谷本』に壞に作る。(リ)轍の字註轍の字『寛永』・『正保』二本に徹に作るもの形誤なり。此字註、『本願寺本』・『高田本』等に無きこと前の如し。『報恩寺本』は格上に横書す、車也の也、『澁谷本』之に作る。(ヌ)循三界の循、『明曆』・『寛文』二本は脩に作るもの形誤なり。

〔細釋〕 この中七文を引く、初六は『論註』に出で、後一は讚偈に出づ。大分して二と爲す、初五は以て眞土を證し、後二は其眞佛を證す、土を證する中二、一に正しく眞土を明す初の文是れな

り、二に佛力を結示す、後二文これなり。

註論曰。乃至焉。可思議、第一清淨功德の釋文なり。この文は眞土を證する中、涅槃界の義を立つ。此上及び下の文に、云ふ所の、安樂、究竟、廣大、虛空、正道、無爲、不可思議等は、皆これ涅槃界の異名なり、今清淨と云ふ、これ衆名を統ぶ。既に涅槃界なれば、煩惱成就の凡夫をして、此に冥會せしむ、斯を今土不共の徳と爲すなり。

又云正道乃至善根生、其二性功德の釋文なり、これ、彼の國土の體性を示す、謂く能く凡夫人をして、煩惱を斷せずして、涅槃を得せしむるものは安樂國土の自爾の性なるが故なることを示す、文の中二有り。初は名を釋し、後は文を釋す。釋名に四義あり、次での如くこれ理、行、位、果に約す。『述聞』にこの四義を釋して云く「初一は性徳、後二は修徳なり。修の中、初二は行を攝して位に入るれば總じてこれ願、此を以て果に對す。果はこれ其力、是の如く願力、性を全じて以て起る、性を全じて起るが故に、修にしても常に性なり。即性即修、乃ち不顛倒、亦不虛偽なり。四義を一合して、今の性の義と爲す、往生者をして、畢竟淨に入らしむ、良に其れ宜べなり」と、好し。之を釋する意の謂く、平等性に達して大悲を起す、此の清淨業を淨土の根となす、因性既に是の如し、是故に果土を成じ、能く清淨性を成ず。即ち衆生生ずる者、皆平等法身を得るなり。文中、聖種性、無生忍等の字義を釋することは山勸學著『往生論註講義』卷上(眞叢49)に

詳かなり、往見せよ。

又云問曰。乃至不可思議之至也、其三大義門功德の釋文なり、聲聞實際を證し、大乘の種を絶つ故に根敗と云ふ、然に、佛願の威神力は能く淨土に生せしめて、無上道心を發さしむ。眞に不可思議の至りなり、國徳の妙、焉ぞ思議すべけんや。

又云不可思議力乃至住持力所攝。其四觀察體相中、成就不可思議力の釋文なり。已下の二文は佛力を結示す、國徳殊勝の本は佛力に在り、故に今土徳を結して佛力を示すなり。中に於て二有り。初は二力成就にして後は二利圓滿なり。初文は彼の佛國土は不可思議力を成就せるの義を顯す、謂く彼の淨土はこれ佛の因果二力の所成、所持の故に、一一の莊嚴は不可思議力を成就す。國徳の不思議即ち佛二力の然らしむる所の故なり。

又云示現乃至能神者神之耳。其五示現自利々他の釋文なり、後に二利圓滿の妙莊嚴を顯す。『對問』に云く「佛の自利行は化他の徳を成ず、化他の諸徳は全くこれ自利、得生者の受用する所は、即ちこれ佛の自果報の故に」と。佳し。

又云何者乃至畢竟不差故曰成就。其六、不虛作住持の釋文なり、これ佛徳を顯す。『對問』に云く、「不虛作住持とは、今佛不共の別徳にして、第十八願に酬報せる攝取不捨の大益なり。今佛の諸佛に超へ、諸佛の今佛を讚するは、唯だ此徳有るを以てなり、故に因果二力に約して以て成就

不差を顯し、別願酬報の義を示す」と。知るべし。

讚阿彌陀乃至頭面禮抄出已上。其七、讚偈の文なり。この文、光壽の徳を嘆じ、次上の文に望むれば則ち、別して神力を顯す、南無等とは『六要』五(廿九)に云く、「問、題後文前安、六字名、有何意耶。答、題目雖云讚阿彌陀佛偈未顯讚嘆名號功德、只是讚嘆、是故爲示所言讚嘆在名號徳如是題歟」と。

今謂く、讚偈の意は所讚の體を擧ぐ、下に三種莊嚴を讚述す、三種莊嚴是れ一の南無阿彌陀佛なり、故に論註(左丁)に「說無量壽佛、莊嚴功德、卽以佛名號爲經體也」と云ふが如し、子註十又之字は『對問』の釋の如し、若し、底本のまゝの點とすれば、宗祖、偈讚を尊崇したてまつること經の如しと示し給へる意か、考ふべし。成佛已來等、二十行半大分して二と爲す。初は正く佛徳を顯し、後に本師龍樹の下は人に寄せて勝を嘆す。初の中亦二、初一偈は、總讚、後十二偈は別嘆、總讚は壽體に據つて光用を辨す、法身光とは下諸光を總じて意、無碍光を指す、和讚に「無明ノ大夜ヲアハレミテ」等と云ふが如し、智慧光の下は別嘆なり、十二光義は前述の如し。本師等とは、此下の本偈、初は祖承を明し、後は製意を示す。今の引意は宗祖の願生に就て身土の勝を示す。中に於て自ら二、初は始祖の願生を明し、後、我從の下は鸞師の自歸を示す。『述聞』に云く「南天論主、上は佛識に應じ、下は群根に範す、諸家の祖尊するところ、後を稟學して、蹤を

履み歸向す。誰か然らずと謂はん、北天論主、踵を繼ぎて差はず、蓋し順承を示し、庶類に先んずるものなり」と。知るべし。鸞師の自歸を示す中亦二、初は其の自行化他を明し、後は南無の下は偏歸卽ち普達なるを明す。『摘解』に云く「還つて三世の本師、十方の本國なることを示して、身土の殊勝を結す。此文の中に自ら本佛の號を擧げて、上の佛者則是等の釋を證す、亦一土卽一切國なるを以て、無量光明土の義を成じて、高祖の標定の私ならざるを示すなり」と。佳し。

終 南 引 意

〔本文〕 光明寺和尚云問曰乃至號曰無上涅槃已上抄出。

〔校異〕 之に六文あり。

(一)玄義分(弁秘)の文 (イ)和尚云の云、『寬文本』は曰に作る。(ロ)三大僧祇の僧、『明曆本』は像に作るもの形誤。(ハ)斯乃過現の乃、『明曆本』は及に作るもの形誤。(ニ)辨立三身の辨、『本願寺本』・『報恩寺本』は辯に作る。(ホ)受想行識の想、『寬文本』は相に作るもの形誤なり。(ヘ)四正勤の勤、『明曆』・『寬文』二本、勸に作るもの形誤なり。(ト)不生不滅者不如化耶の耶、所據の『大品般若經』にはこの字なし、チ有智者の者、『明曆本』になし。

(二)序分義(三研七)の文 (イ)悲化、『寬永』・『正保』二本非に作るもの形誤。(ロ)彌多の彌、『正保』・

『明曆』・『寛文』三本、弘に作るもの形誤。『寛永本』は彌に作りて「ヒロク」の訓を附す。

(三) 定善義(蘇)の文 (イ) 又云の云、『寛永』・『正保』二本は曰に作る。(ロ) 大悲薰心の薰、本文は熏に作る。(ハ) 愁嘆、『本願寺本』は生死に作り、『報恩寺本』は、格上に「或本生死也」の五字を書す。

(四) 法事讚下(升)の文。校異なし。

(五) 法事讚下(降)の文。校異なし。

(六) 法事讚下(昇)の文。校異なし。

〔細釋〕 終南を引く中、六文有り。初二は報身土を證し、後四は其の眞義を證す。初二文の中、初は是れ正明、後は其の助顯なり。

光明寺和尚云。乃至五乘齊入。其第一玄義分の文なり。文の中是報非化とは略して分齊を立つ。論及び註の中報身、報土、義有りて文なし、今之を正證す、然に彌陀の身土諸家異論す。前に大略述ぶるが如し。要するに、之を高くすれば、凡夫の往生を許さず、若し往生を許せば、土を判すること太だ卑し。良に此宗の常途に超ゆるを知らず、玄義分の中、九品の機を判じて常没の凡夫となし、其所入の身土を斷じて報にして化に非すと云ふ。古今を楷定し、宗義斯に立つ、稱して眞宗の高祖と稱する所以なり。『述聞』に『古徳傳』及び『口傳鈔』、『改邪鈔』等を引くが如し。然に終南の意は諸師に對するが故に別を以て通に入る。然に通に就て別を顯すものは、同性經に依

つて、報身土を立つ。これ其の通論なり、大經に依つて、酬因の身土を論ず、これ其の別意なり、若は通、若は別、是の報義を立つるに在り、既に立てば、則ち別意隨つて成するが故なり。

文の中二有り、初は正く報身土を顯し、後は問曰彼佛の下は、凡夫の入報を明す、初中亦二、一に立義、二に問曰既言の下は會違なり、立義の中初は問、後は答、答の中三有り、一に非化を標定し、二に云何の下は引文證明、三に今彼の下は是報を結成す。引證の中二、一に正引、二に然報の下は結成なり、正引の三文、『述聞』に云く「同性は名を顯し、大經は義を示し、觀經は大經の義を映顯す、然に報應等の下は意は觀經の爲に、異解を辨付す。然に三文を引きて、初後は中間の爲にす。正意則ち大經に在り。下の文に、由選擇本願之正因、成就眞佛土と云ふが如し。此は是れ佛祖嫡傳の微意、終南に至つて方に著る」と。今云く、簡にして要を得たりと云ふべし。問曰既言等の下會違、この中、問は授記經を以てし、答は大品經を以て釋す。『述聞』に云く「涅槃二義あり、曰く化と非化と。非化に由るが故に入滅の時有り、以て新發意の者に應ず。新發意とは即ち方便の人、邪不定の機なり。如化を以ての故に、常住不滅なり、授記經に云く、諸菩薩有り、念佛三昧を得て常に阿彌陀佛を見る。念佛三昧を得る者即ち弘願の人、正定聚の機なり。上に涅槃、梵行、迦葉の衆文を引きて云々す。當に知るべし、滅と不滅と、衆生の感を以てすれば、優劣ありと雖も、佛より之を言はば、則ち均く是れ其の自徳にして、報佛如來の義に非ざる

なし。正定聚の機、彼の自徳に冥じて、並に入不を知る。而して常と云ふものは増勝に約するが故に偏に之を言ふのみ。西河は則ち曰く、此は是れ報身、隱没の相を示現して、滅度に非ざるなりと、次に寶性論五の報身五相を引く。五相の中に於て、不休、不入、隱没、即入と乃ち此中と大探爽はず。思ふべし」と、佳し。

問曰。彼佛等とは凡夫の入報を明す。報佛報土其義既に決じ、而して凡夫往生有り。諸師の謬解は此より起る。下機を以て、高妙の身土に望め能入所入理として相應せざるが故に問起する所以なり。答ふに自力入るに非ずして、願力能くせしむるを以てし、願力不共の義に據るを會せしむ。即ち凡夫入報を決して、報身土の義を結成するなり。『述聞』に云く「仰で惟るに、上は本願を擧げ、妙に如來自利々他を明す、自利とは云ふ所の正覺、利他とは是れ其の往生、此二、一體にして、義、亦、互に成ず。正覺にして往生に非ざるものなく、又往生にして、正覺に非ざるものなし、身土分齊は正覺を以て定む。凡夫入るを得るは、往生を以て言ふ。往生は正覺を成ずるが故に、正覺の擧體即ち往生と爲す、垢障の凡夫入る所以なり」と、見るべし。五乘齊入につき六要五(持)に釋して云く「就言齊入有總別意。總者齊乘佛願之意、不論機根不簡善惡唯依佛願得生義也。別者有二。所謂齊上齊下義也。言齊下者謂淨土教本被凡夫、仍以凡夫爲其正機是故、三乘皆同凡夫入彼報土。言齊上者所謂報土所入之機本是十地菩薩等也、凡夫雖非所入之

限、由佛力故同其上機齊得生也」と、知るべし。

又云。從我乃至別選也。其二欣淨緣第七科、別選所求を釋するの文なり。上に明す所の報身土に凡夫をして入るを得しむることを助顯す。使字、此に至りて、別途の身土を顯して復た餘蘊なし。以て上の文に望むれば、即ち第二引證を起し、後番の問答を結歸す。知るべし。

又云。西方乃至入彼涅槃城。其二『定善義』水觀讚の文なり。已下の引文、眞報眞土を證成す。謂く涅槃法性は皆其の畢竟安樂大清淨處を顯す。乃ち無誑相にして眞報身土の義の故なり。中に於て前三は正明、後一は結歸、前三中今文は直に土徳を明す。中に於て初は正明、後は勸歸なり。正明の文、證卷の中は、果徳を引證す。生ずるもの、所得、これ國徳の自然の故なり。今は彼の土の自然の徳を證するなり。

又云。極樂無爲乃至專復專。其四『法事讚』の小經第九段の讚文なり。此れ生因に就きて明す。中に於て、初一句は所入の境を明し後の三句は能入の因を明す。乃ち雜善は不生にして、專念得生を以て、彼の涅槃妙境界を顯すなり。不共の別徳、亦自ら顯るゝなり。

又云。從佛乃至法性身。其五法事讚小經第六段の讚文なり。此れ果徳に就きて明す。乃ち能入の果徳に就きて所入の國徳を顯すが故なり。

又云。彌陀妙果號天上涅槃妙出。其六法事讚の文なり、上來廣く報身報土の義を明し、今此文を

引きて總じて本佛の果徳に結歸するなり。

憬興引意

〔本文〕 憬興師云無量光佛乃至身心柔輒之所致也已上抄要

〔校異〕 『述文贊』中(大正三七¹⁵⁵)の文なり。(イ)菩薩之所及の所、『寛永』『正保』二本は可に作る。(ロ)光炎王佛、『寛永』『正保』二本は炎王光佛に作る。(ハ)無貪濁等の九字は述文贊になし、集主の加へたまふ所なり。(ニ)盛心の盛、現流の『述文贊』は感に作る。(ホ)所惻度の惻、贊文は測に作る。(ヘ)日應等の句、贊文は「日夜恒照不同娑婆二耀之光故」に作る。(ト)蒙光觸身の身、贊文は體に作る。(チ)柔輒の輒、贊文は輒に作る。(リ)願之所致也の也、『寛永』『正保』二本になし。

〔細釋〕 之は述文贊中に出づ、皆是等とは十二光の名を釋するに非ず。『六要』卷五(三¹⁵)に云く、「皆是等者次釋自言其衆生至言皆蒙解脫文中之結文也」と。見るべし。引用の意は、鎔師云く「上に『讚偈』を引き今之を引くは、鸞師の十二光を説けるは文義深遠にして、得て窺ひ難きが故なり。又復た三毒消滅の義顯然なるが故なり」と。「頂戴録」に云く「上に論文及び玄簡等を引きは正しく是れ大經、終南を引くは正しく是れ觀經、小經なり。又涅槃經の密意は弘願一佛乘に在り、當に知るべし。釋迦一代の正意は、唯斯法に在り、故に他師も亦一分を知る、今此義を顯さ

んが爲に之を引くか」と。『述聞』にこの二義を評して云く「遠の釋は、疎遠なり。此に在つて切ならず、鎔の解は是に近し。今助釋して云く、興は淺近と雖も、亦是れ一途、仍ち以て初心の階梯と爲るに足る。之を贊偈後に出さざるは其の旁正を分たんが爲めなり」と、蓋し考ふべし。

結 成

〔本文〕 余者如來眞說宗師釋義明知顯安養淨刹眞報土(正結所明)。惑染衆生於此不能見性。所覆煩惱故。經言我說十住菩薩少分見佛性故知到安樂佛國即必顯佛性由本願力廻向故。亦經言衆生未來具足莊嚴清淨之身而得見佛性(對辨顯徳)。起信論曰乃至從說入無說從念入於無念(抄略)引(引)文勸進。

〔校異〕 私釋に校異なし。引文の中イ能說可說の可說の下に、本文雖念の字あり。(ロ)十地の地、『寛永本』は任に作る。(ハ)入無說の説、『寛文本』は記に作るもの形誤なり。

〔大意〕 正釋の中三有り。一に直明、二に引文、三に結成なり。一、二は前に竟りて、今は結成なり。

〔細釋〕 從來所明の義を結成す。所引の文、或は正覺門に約して、佛の果徳を顯し、或は往生門に約して、所入の土を顯す。或は所歸に約し、又所期に約す。所明一定せずと雖も、要は眞佛土を顯すに在り。故に結して「明知顯安養淨刹眞報土」といふ、此中三有り。一に正く所明を結し、二に感染の下は對辨して徳を顯し、三に起信論曰の下は引文勸進なり。初中、如來眞說とは、正しく大經を指す、眞言、涅槃はこれ其の助顯にして、此中に攝す。宗師釋とは、上三祖を引きて義餘を包む、憬興亦是れ隨屬なり、宗祖は、經說、師釋に據りて、眞報土を了知したまふが故に明知等といふ。眞報土とは此に二義有り、云く持業と依主と。持業釋とは、佛土自體に約して、正覺の覺體を顯し、依主の義は化身土に簡で生入の土を顯す。

問。上來並に身土を明し、今何ぞ但だ報土に約して結成するや。答。既に言く、彼れより出づると、彼に入るとの二義有りと。其往生門はこれ彼に入るの義なり。此中往生門を主とするが故に所入の土に就きて、之を言ふ、亦佛を遮するに非ざるなり、感染等とは對辨顯徳なり。即ち、聖淨二門、淨穢二土の見性を相對して、二力の難易を分別す、中に於て、初は聖道の難證を明し、後は淨土の易得を示す、上來の所明、正覺、往生の二門の義ありと雖も、其往生門を今典の要となすが故に、今一部の大旨に就きて之を示す。『四法大意』證を明す下に於て、此旨を述ぶ。思はざるべけんや、感染とは、惑は謂く迷倒、染は即ち染汚、龜細の諸惑、眞心を汚すが故なり。於

此とは此の穢土をさす、見性とは所謂眼見なり。所覆等とは不見の由を示す。『玄義分』(二)に「但以垢障覆深淨體無由顯照」と云ふ、見るべし。

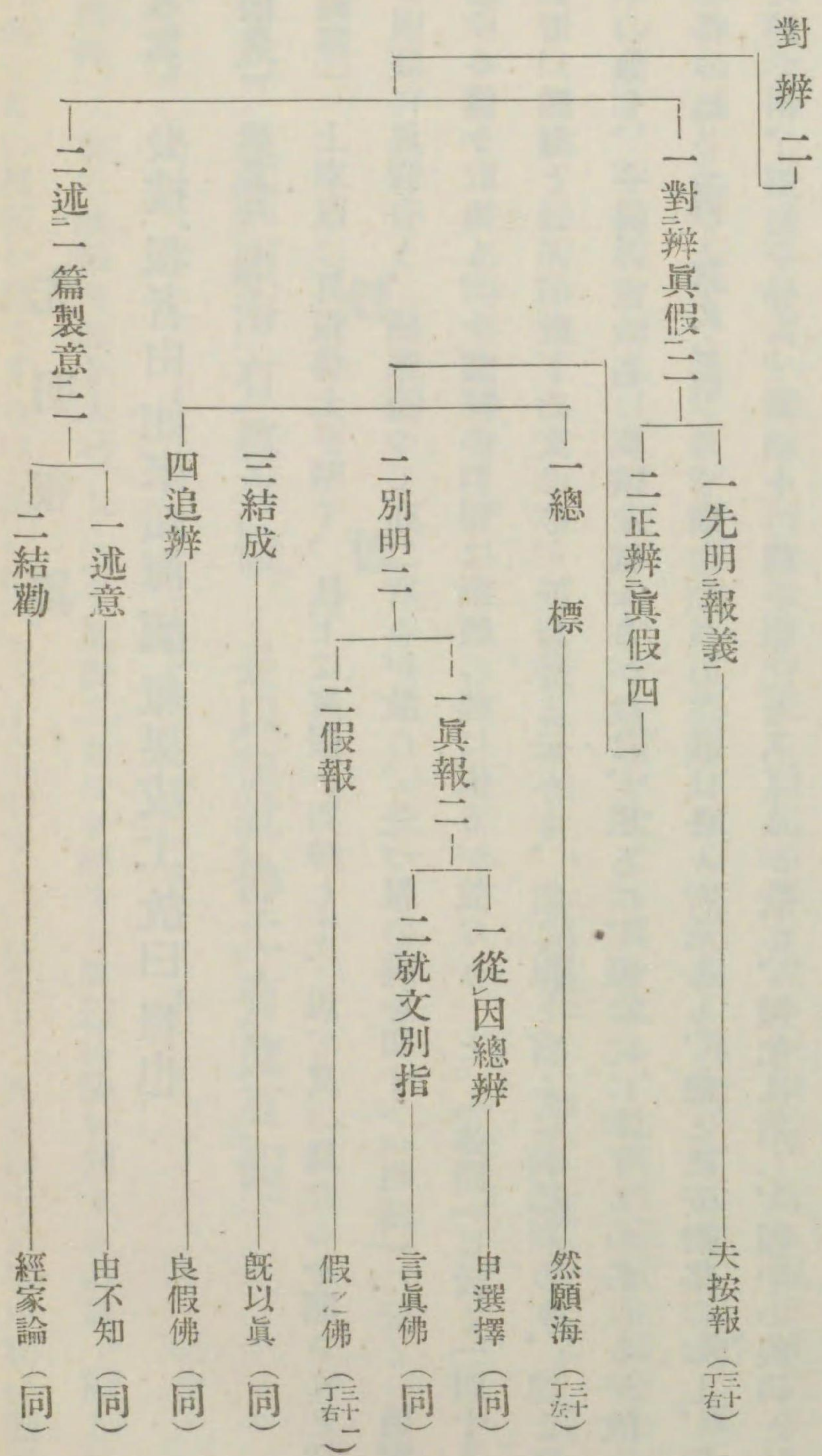
經言等とは、上の迦葉品の文を牒し、即ち不見佛性の義を證す、而して亦彼土見性の義を起す、謂く、十地の菩薩、少分佛性を見ると雖も、未だ全見する能はず。況や感染の凡夫何ぞ見性を得るを得んや。『述聞』に云く「十地人、猶ほ少分見といふ、況や其餘をや。或六卷に云く、此界の中に於て入聖得果するを聖道門と名け、難行道といふ」等と、謂く、上涅槃を引く中、彼の梵行、徳王等の文を擧げ説いて云く、常樂純淨無碍を大涅槃と爲し、亦佛性と名く。然に此娑婆は虚偽顛倒にして全く常樂我淨に非ず、常樂我淨は即ち無常等と爲り了る、常途の證果は無常等の處に就きて、其常等を見せしむ、豈に多劫修治を假らざるを得ん、難行と爲す所以なり。故知等とは、彼土の易得を明す。苟も彼國に到れば、必ず佛性を顯す。煩惱を斷せずして涅槃を得るが故なり。中に於て先づ立、上に眞報土と云ふを承くるが故に故知と云ふ。安樂佛國はこれ極聖所居の處なり、而して凡夫をして、其中に入住せしむ、入れば即ち冥會す、九品痕なく、一人として聖を極めざるはなし。『述聞』に二門偈を引きて云々す。顯とは謂く證顯、即ち佛性を眼見するなり。佛性とは何ぞや。『述聞』に云々す、披くべし。由本願等とは顯性の由を示す。佛の願力を徴して、自の廻向は終に顯性に由なきことを明すが故なり、亦經等とは亦前の所引の文を牒し

以て今義を證す。佛は佛性未來と説く、吾人凡夫より見れば、安養の所證のみ。一切凡聖の見性は必ず皆願力に由るが故に引證する所以なり。

起信論等の下は引文勸進なり。此これは『念佛三昧寶王論』下(大正四七)に據りて之を引用す。此中初より名爲得入に至るまでは、本論の文にして、得入者の下は飛錫の言なり、論に眞如三昧を明して、隨順を方便となし、得入を正觀と爲す、具さには義記中本の如し。謂く、眞如の妙理は能説の説くべきものなく、能念の念すべきものなしと知つて、而も、猶ほ念を離るゝこと能はざるを名けて隨順と爲し、其念を絶離するを得入と名くるなり。眞如三昧とは、眞如現前を云ふ。無念之位等とは、『起信論』(義記中本)に云く「如菩薩地盡滿足方便、一念相應覺心初起、心無初相、以遠離微細念故得見心性、心則常住名究竟覺」と。非菩薩等とは因人の所知を遮す。即ち上の少分の見性に應ず。今之人等とは、時人を勸進す、即ち上の惑染の不能見性に應ず、不依馬鳴とは、『起信論』の中に西方の往生を明すことを指すなり。從説等とは、『寶王論』の次の文に、『首楞嚴經』の勢至圓通を引く中に、念より無念に達するの義を明す。今連引して、指方立相の宗教に合し、以て未來見性の義意を證す。若し彼國に生ずれば、見性の火自ら滅して無生智を成じ、説より無説に入り、念より無念に入るなり。以て聖道の邪執を斥けて願生安樂を勸む。其意見るべし。『述聞』に宗祖、時人を誡めたまふ文を擧ぐ、披見すべし。

對 辨

〔大意〕 本文の中二有り、一に正釋、二に對辨なり。正釋は上に竟り、今は對辨なり、一段の細科次の如し。



先明報義

〔本文〕 夫按報者由如來願海酬報果成土故曰報也。

〔校異〕 校異なし。

〔細釋〕 上來直に眞報佛土を明す、已下は眞假を對辨して、以て眞の眞たるを顯さんと欲す。然に因願に眞假有り、酬報隨つて亦二有るが故に、先づ報の義を明す。『略讚』に云く「通報は行に酬ゆる邊を取るも、今彌陀の別報は酬願の義に依るが故なり」と。『述聞』に云く「四十八願を總じて、願海と云ふ、此下の文に亦、既以等と云へり、然に報と言ふは義總別あり、總とは即ち此中の如し、一箇の報の名に眞假を統ぶるが故に、別とは、報は化に對するの名なるが故に、上下の釋の如し(廣く諸文を引く)、斯の如きの二義は各々所承あり、總とは安樂集の如し、彼は報中に於て相、無相を分ち、其相土の佛を報化と名くるが故に、報化は猶し、報中の假佛と云はんが如し、之に准じて之を言は、無相土の佛を宜しく報眞と云ふべし、別とは『往生要集』の往生階位の中の如し。然に總と別義とは則ち二と雖も、體は則ちこれ一なり。謂く、願海に就て之を言は、第十八を以て願中の王と爲す。二乘門に『大經』を引くが如し。是れ其法爾なり、適として差ふなし。願海既に然り、酬報する所のものは二義ありと雖も、第十八願所成に非ざることなし。

し。其惟一事にして義總別を分つは、總は以て佛德を顯示す。謂く、第十八の本願所成の報身如來は、眞假の眞土を具足し圓成して普く一切を攝し、衆生を成就す、本願所成にして並びに眞假ある所以のものは、本願廣大にして諸の眷屬を有し、主伴具足して、孤獨に非ざるが故なり。下に云く、如來廣大恩德と、其れ然らざらんや。其別義とは、廢立の意に就き、此中の眞を承け、弘願の果を擧げて行者を勸むるが故なり、經に胎化の事を説くが如し。然に假に著するものは、眞あることを知らず、既に眞を知らざれば亦假を知らず、善く眞を了する者は、翹に眞を知るのみに非ず、亦其假を知る、眞假並びに知つて假を捨て、眞を取る、此眞の所感を報身土と名く。此報は仍ほこれ所謂總するものなり、所以はいかん、眞假並びに知つて佛德に會するが故なり」と。今謂く、辨じ得て精明なり。

總標

〔本文〕 然就願海有眞有假。是以復就佛土有眞有假。

〔校異〕 なし。

〔細釋〕 前の酬報願海を承けて、以て眞假二あるを標す。眞假は法を判するの目、而して今身土に名くるに眞假を以てするは、法に従へて、土を判するが故なり。凡そ四十八願中類に隨つて分別

すれば、真假一に非ず。要に就いて之を統ぬれば、三願に過ぎず。三は即ち十八、十九、二十なり。十八はこれ真、二願を假と爲す。二乘門の如きは十八、諸を攝む、本末に據るが故なり。今真假と言ふは且く各立に約す。然に三願に就きて、真假を判するもの蓋し終南の微意を承く。『御鈔』上五丁に『法事讚』の三往生を引くが如し。『三經往生文類』の所顯亦然り。而して、今此處に在りて、真假を云ふものは、意、前後を鈎鎖するに在り。謂く、第六卷を收めて此假の言に在り、前來五卷は此の眞の言に入る、乃ち五願を收めて第十八の一本願に歸す、以て餘の非本願に對す。

別明

〔本文〕 由選擇本願之正因成就眞佛土（從因總辨）。言眞佛者大經言無邊光佛无碍光佛。又言諸佛中之王也。光明中之極尊也上。論曰歸命盡十方無碍光如來也。言眞土者大經言無量光明土或言諸智土上。論曰究竟如虛空廣大無邊際也。言往生者大經言皆受自然虛無之身無極之體上。論曰如來淨華衆正覺華化生。又云同一念佛無別道故上。又云難思議往生是也。（就文別指）假之佛土者在下應知（假報）。

〔校異〕 ①佛の下、『寛永』・『正保』二本、土の字あるもの過剩。②華、『寛永』・『正保』・『明曆』・『寛文』の四本は花に作る。

〔細釋〕 別明の中二、一に眞報、二に假報なり。初中二、一に因に從へて總じて辨じ、二に文に就きて別して指す、今は初めなり、由選擇乃至眞佛土。選擇本願とは、謂く第十八願、信文類の初の如し、前には謂く、十二、十三の兩願の所成と。即ちこれ總中の別に就くなり。今は其の總に約す、以て知る、今の報身土は諸佛に異り、亦隨他を揀ぶ。化身土は乃ちこれ三願三生の己證義なり。『末燈鈔』(七)に自力、他力を分別する中に云く「第十八ノ本願成就ノユヘニ阿彌陀如來トナラセタマヒテ、不可思議ノ利益キハマリマシマヌ御カタチヲ、天親菩薩ハ盡十方無碍光如來トアラハレタマヘリ」と。今と同意なり。然に選擇本願正因につき諸家異説す。『述聞』に評するが如し。

言眞佛等とは文に就きて別して指す中、言眞佛乃至光如來とは、初に佛を指す。大經等とは二光中、但た二光を出す。抑々十二光中、後一は是れ對顯にして、其前はこれ直顯なり。直顯の中、初二は體に約し、後九を用と爲す。體中、無邊に無量を攝す。用中の無碍に後八を攝し、以て下の盡十方無碍光に應するなり。又言等とは異譯の二句なり、初句は人に約して本師の徳を明し、後句は徳に約して、光中の尊を明す。論曰等とは末燈鈔の文、前に已に引くが如し、歸命の

二字は機を全するの法を顯す、十字これ佛の徳名の故に。勸章に「南無阿彌陀佛ト云フ本願ヲタテマシクテ、乃至、ワレ正覺トラジト誓ヒタマヒテ南無阿彌陀佛トナリマシマス」と云ふが如きこれなり。

言眞土乃至無邊際也。後に土を指す中、大經等とは漢譯の所説、上に已に解するが如し、或言等とは唐譯に就きて指す。彼具文に言く「如來勝智徧虛空。所説義言唯佛悟。是故博聞諸智士。應信我教如實言」と。今は即ち諸智士に作り、御鈔(上)亦同じ、略讚に云く「無量無數身を現じ、十方微塵世界に於て、無碍の智惠光を放つが故に、所遍の土を諸智士と名くるなり」と。『述聞』に云く「諸智士とは猶し諸佛土と云はんが如し、智とは果人を謂ふ。如實の照見、諸法を覺するが故に、以て土に名くるものは、彼國はたゞこれ知境界の故なり、和讚に云々す。又是れ諸佛の出處する所の故に。大經及楞伽等の説の如し」と。『對問記』に云く「諸智とは謂く佛の五智等」と。今謂く、『述聞』の前説従ふべし、其の後説は略讚の説に同じ。以て次上の盡十方等に應ず、即ち身即土、これ不二の故に。『對問』の所説は今文を解するに於て是非知り難し、論曰等とは、量功德の文なり、大小廣狹、自國他國、等一切の事不二ならざるは莫し。即ち絶對の境、亦これ無量光明土なり。

言往生者乃至往生是也とは、更に往生の義を釋す。上來、佛土の意を明すは、往生を顯はすに在り、今本意に従ふが故に之を牒釋す、先に云はずや、今卷は證卷に従うて開くと。則ち往生者といふは、證卷所明を提出して往生即成佛の義を顯す。以て方便の生に揀ぶなり。信卷別序に云く「沉自性唯心貶淨土眞證」と。今卷次下の文に云く「由不知眞假迷失如來廣大恩徳」と。彼此對照して須く旨を領せよ、大經等とは、生者の徳を明す。自然虛無、無極、皆これ涅槃の異稱なり、論曰等とは皆受等の義を顯す。又云等とは、次上論文の眷屬功德の註釋なり、念佛とは義當に行信に當る、和讚に云く、「安樂佛國ニイタルニハ」等と。今これ果中説因なり。以て次の業因千差等に對す、又云難思等とは正しく、證卷の所明を示す、滅度はこれ報土所證の故に、又化身土の二往生に揀ぶが故なり。然に難思議往生の目は法事讚に出づ。『仰信錄』に云く「又云とは、名は終南に出で、義は『論註』に在るが故に。註に云く「本則三々之品、今無一二之殊、亦如溜瀝一味、焉思議」と。例へば念佛往生の願目を善導の立名と爲すが如し。亦はいふべし、論に化生と云ふは、これ化土に簡ぶ、難思議往生はこれ三往生の一にして、義化生に同じきが故に」と。考ふべし。

假之佛土等とは二に假報を明す、假の佛土は下に在りて知るべし。

結 成

〔本文〕 既以眞假皆是酬報大悲願海故知報佛土也。

〔校異〕 校異なし。

〔細釋〕 三に結成なり。眞假を結成して同くこれ報の義を明す。『略讚』に云く「此れ乃ち報と雖も、通報に非ず、化と云ふと雖も、諸師所談の應化に非ざることを顯す。願海酬報の中に於て、眞假を分つのみ」と。佳し。

追 辨

〔本文〕 良假佛土業因千差土復應千差是名方便化身化土。

〔校異〕 なし。

〔細釋〕 四に追辨なり、假報を追辨して、其の分齊を示す、謂く眞假同くこれ報と雖も、報義大に別なり。本佛の自果報を眞報佛土と爲し、隨機應現を假報身土となす、これ業因千差なる故に土亦萬別なり、是故に尅論すれば假報を化と爲す。自徳を隠くすが故に此の差別あるなり。『述聞』に云々す、見るべし。

述 一篇製意

〔本文〕 由不知眞假迷失如來廣大恩徳。因茲今顯眞佛眞土斯乃眞宗之正意也(述意)。經家論家之正説、淨土宗師之解義仰可敬信特可奉持也。可知。(結勸)。

〔校異〕 ①特、『明曆本』持に作るもの形誤なり。

〔大意〕 對辨の中二、一に眞假を對辨し、二に一篇の製意を述ぶ。初は上に竟りて今は其の二なり、中に二有り。一に述意にして、經家等の下は結勸なり。

〔細釋〕 由不知乃至正意也。初に述意の中廣大等とは『末燈鈔』(廿)に云く「佛恩ノフカキコトハ懈慢邊地ニ往生シ、疑城胎宮ニ往生スルタニモ、彌陀ノ御チカヒノナカニ第十九、第二十ノ願ノ御アハレミニテコソ不可思議ノタノシミニアフコトニテサフラへ、佛恩ノフカキコトソノキハモナシ、イカニイハンヤ眞實ノ報土ヘ往生シテ大涅槃ノサトリヲヒラカント佛恩ヨク々御案ドモサフラフベシ」と。知るべし。今化土を揀んで、眞報の果を歎す、故に廣大といふ。眞假を知らず、廢立を知らず。廢立を知らざるが故に、選擇本願の意に達せず。謂ひて迷失となす。之を外にすれば聖道の諸願生者なり、之を内にすれば、西鎮の諸念佛の人なり。惣じてこれ疑惑佛智の徒なり、故に大利を失ふ。因茲等とは、眞宗の正意は廢立にあり、故に毫も自力各別の因果を容

れざるなり。

經家等とは二に結勸なり、製作の功敢て自ら居らず、之を佛祖に推る。上來を結んで勸歸す、上文に即ち云く、「如來眞說」等と。亦『傳繪』に「愚禿ス、ムル所更ニ私ナシ」と、云ふ。今と全同なり。仰がざるべけんや。

尾 題

〔本文〕 顯淨土眞佛土文類五。

〔校異〕 なし。

化 卷 (本)

化 卷 大 科

〔大科〕 大科四有り。一に標舉、二に題號、三に本文、四に尾題なり。

標 舉

〔本文〕 至心發願之願 邪定聚機 雙樹林下往生 無量壽佛觀經之意也

至心廻向之願 不定聚機 難思往生 阿彌陀經之意也

〔校異〕 『高田本』は表紙の裏に在りて、二個の願名、共に之の字なく、無量壽佛觀經之意也の九字及び阿彌陀經之意也の七字、各々願名の右傍に在り、而して願名の下、挾註を二行とす。『報恩寺本』また之に同じ、但し無量壽佛觀經之意也の字なく、八字を朱書す、『本願寺本』この文なきは表紙の散逸せる爲か。底本たる『大正本』には、この標舉題後文前にあれども、今は『本願

寺』の體裁に従ふこと既述の如し。

〔細釋〕 標舉を釋する前に、本卷の興由を窺ふに明教院は五義を擧げ、淨信院は更に一義を加へ快樂院は三義を出し、勞謙院は總じて一義となし、別しては五義となす。總由とは、違順を詳にして、捨歸せしめんが爲なりと云ひ、別由とは、一に方便の願意を開示せんが爲の故に、二に釋尊の誘引を開示せんが爲の故に、三に相承の師釋を分別せんが爲の故に、四に修入の得失を辨明せんが爲の故に、五に俗諦の開遮を料簡せんが爲の故にとの五由を擧ぐ。善通院云く「眞實五章は是を上を竟る、然に假の假たることを辨せずば、何ぞ眞の眞たることを知らん、眞佛土卷(三)に云く「由不知眞假迷失如來廣大恩德」と、今は其の非なるものを簡びて、以て是なるものを詳にす」と、今謂く、多義有りと雖も、要は修行の得失を辨明するに歸す、余は此中に在り。行文類偈前(五)眞佛土文類太尾の文見るべし。夫れ俗諦の開遮の義を分別するといふは、此れ本卷の餘意、題號に於て、其義見るべし。

次に標舉の意と辨せん。初に西山、鎮西等の三願觀を略述すべし。『述聞』に云く「此中の兩願を釋すること一に非ず、西鎮は同く言く、初は來迎にして念佛の益を示し、後は果遂にして、結縁の機を攝す。此二は唯だ念佛に於てす、諸行に非ず、諸行は本願に非ざるが故にと、而して二家の意亦た不同有り、若し西山義なれば則ち終に諸行の入るを許さず、入る者は已に念佛の所收

と爲す、諸行に非ざるが故に。鎮西則ち云ふ、本願に非ずと雖も、諸行亦た入る。諸行は體これ眞善妙有なり、衆生の所有は佛の其の國土を修成するものと一にして異なきが故にと。九品寺の淨明云く、第二十願は諸行往生、第十九願聖衆來迎にして其の云ふ所の修諸功德は前後の念佛と諸行を合説して來迎の由と爲す。當に知る、諸行は亦たこれ本願なり、止た念佛のみにあらず、然らざれば成佛は機を忘するの過有りと。又一説に云く、一は但念佛、二は但諸行、三は合説、次の如く十八、二十、十九、と。又一説に云く、十八は念佛、十九は諸行、二十は順後と。」と。

今謂く、鎮西は、十八、十九、二十の三願に於て眞假を分別せず、三願を次での如く、念佛生因、臨終來迎、三生果遂の願なりとす。而して、第十八願は生因を誓ふが故に、念佛は本願の行なり。第十九願の諸行は來迎の由にして願意に非ざるが故に、諸行は非本願なりとす。而して第十九願は來迎を願じて諸行を願じたるに非ざるに就きて『鎌倉宗要』(淨全土⁴⁴)に四由を擧ぐ。即ち云く「一に諸行を本願と言はゞ願成就に違するが故に、謂く、若し諸行が生因願ならば何故に成就文^三に一向專念と云ひて諸行を廢せんや。二に一願中に二事を交願すべからざるが故に、謂く一願中に生因と來迎との二事を交願せば即ち四十九願と成りて、『觀經』『智論』に四十八願と云ふに違すればなり。三に念佛諸行俱に來迎に預るが故に、謂く修諸功德は念佛に通するや、餘善に局るや、若し通すと言はゞ、兩願の行はこれ別體なるべし、何ぞ兩處同じく念佛を誓はんや、還り

て第十八願は未成就と成る、若し局ると言はゞ念佛の行は迎接に預らざるべし、諸行本願を立んとして念佛來迎の義を失するなり。四に異譯に順せざるが故に、謂く『莊嚴經』には修諸功德の語無し若し諸行を願するとならば何ぞ之を擧げざらんや」と。

又第二十願は、果遂を誓ひて、諸行を生因として願じたるに非すと云ふに六由を示す。其意に云く「一に異譯兩經(大阿彌陀經と平等覺經)に並に三生と説くが故に、植諸徳本は順次の爲の生因に非ず。二に御廟順後業の釋、助證と爲るが故に。三に植諸徳本の言は多生に約するが故に、謂く、植は種るなり、本は木の下なり、佛道の修證は一生に非ず、漸々進入して多生を積累す、猶し、下種して後漸々芽莖華菓を成するが如し、此意を顯す植本の字なるが故に、順次の生因を示す語に非ず、大經の前後の文に積植と云ひ、廣植と云へるに皆時節長遠なり、本願中の一字のみ何ぞ別義ならんや。四に不果遂者の言は順後生を顯すが故に、謂く果は草木の實なり、遂は叶なり、稱なり、果遂は植を貫く遠生なること必然なり、生と遂と若し同ならば何ぞ改易して用ひんや、生の字は順次往生に順じ、果の字は遠生往生を顯すなり。『寶積經』に若不生者とあるは、彼經は順次と遠生とを分別せずして、得生の邊に約して若不生者と云ふ、其の分別なきものは、譯語の不正なり。五に『觀念門』に違するが故に、謂く、植諸徳本は本願行なりと云はゞ、『觀念門』に何ぞ此一句を略せんや。六に結縁の人を捨つべからざるが故に、謂く十九に未來當機の順次往生を願じ、二十に直生果遂を願じて、結縁の機として流轉を促めて、三生等に必ず往益を與ふ、これ二十の願力なり、故に諸行を願せしに非ざるなり」と。

以上の如き理由を以て、第十八を念佛生因、第十九を臨終來迎、第二十を三生果遂の願と見るなり。而してこゝに注意すべきは、第十九の來迎に就てなり、即ち來迎引接を蒙る所由は願文にある修諸功德これなり、この修諸功德とは、念佛と諸行に通じ、而も念佛を主となす、故に、この來迎引接は正しくは、念佛の益なれども、傍ら諸行の機にも及ぶと解せり。之に就きて、義山師の『大經隨聞講錄』(淨全十四³²⁷)に、左の如き喩を以て説明せり、即ち云く「喩へて之を言はゞ、先づ來迎の乗り物を一挺拵へ置て此れは我が親父を乗する乗物と定め置けども、時により老人の客など有れば、馳走の爲に之に乗せて送り歸へす。或は外へ借し乗らしむる事あり。今亦然り、法然の願意は念佛の者に乗する乗物なれども兼て餘行の者をも乗するなり」と云へり。

次に西山の三願觀を略述すべし、この派に於ては四十八願中に於て、三願は去行を願せしものとす。而して、凡夫往生の體なるを以て特に、十方衆生にいふ。其中、第十八は念佛往生の願、第十九は聖衆來迎の願、第二十は果遂の願とす、然て第十九の聖衆來迎といふは、第十八の念佛即ち三心の安心にて證得せる即便往生の來迎が、臨終に顯現せる當得往生の來迎なり。此の即と當との來迎は、本より一體なれば、十八、十九、共に此の二意を含む。即ち能機の安心より云へば、

十八、十九、共に平生の安心なり、所歸の行體の顯現より云へば、十八、十九共に臨終來迎にして、平生安心に證得せる來迎が、臨終來迎と顯現せるものなり、故に、十八、十九は、即便と當得、又は能歸と所歸との關係となる。次に十九願の中、「發菩提心修諸功德」等とあるは、修諸功德とは機の本所修の功德にして、機類の差別を示すものなり、菩提心とは、或は行福中の一にして、機類の差別とし、或は即便往生即ち平生の安心のこととし、或は當得往生に向ふ安心のことす。此の如く、文の解釋は相違すれ共、大義は別なし、即ち修諸功德の衆機が、念佛に依りて來迎を感ずと云ふなり、其來迎が念佛の佛にして、それが衆生の因行となる。『觀經』華座觀の中に來迎出づるは、來迎が因行となるが故なり。

次に二十願は上の第十七已下の三願が果遂し、成就することを一處に願せるものとす。即ち、願文の聞我名號は第十七、係念我國は第十八、植諸徳本、至心回向欲生は第十九に當る、其の意は、諸佛咨嗟の名號を聞いて、安心證得せるものは、衆機悉く、來迎に依つて、往生することを必ず果遂せしめんと願せるものなり。而してこの三願果遂は、同時に、四十八願の果遂となり、三部經の果遂となり、又一切經の果遂となる、何となれば、三願に顯はれたる念佛往生已外に四十八願もなく、三部經もなく、一切經も無ければなりと云へり、以上は派祖の『四十八願要釋鈔』(西全二²⁹⁸)『觀念法門觀門義』(西全四⁴⁵)等の記述に依る。猶西鎮の三願觀の詳細を研究せんとす

るの士は宜く杉紫朗勸學著の『西鎮教義概論』を披くべし。

斯の如く、西山、鎮西の三願觀に於て、相違ありと雖も、願海に眞假を分別せざるは揆を一にす。然に今家は願海に眞假を分ち、第十八を以て眞とし、第十九、二十を以て假とす、即ちこれ三願等しく生因を誓へる願なりと決するが故なり、既に三願各生を立すれば必然的に、眞假を辨せざるべからず。『述聞』にこの間の消息を詳にして云く「十八の下三、心行各別なり、心は曰く信樂と發願と廻向と、行とは初に十念と云ひ、次に修諸功德と云ひ、後に植諸徳本と云ふ、心と行、既に別なれば、各願生因に非ずして何ぞや。之を判するに、來迎、果遂等を以てすべからず。斷乎として唯だ念佛を以て往生の本願と爲す等と云ふと雖も、豈に深意無きを得ん。是を以て集主三往生の微意に浜りて、以て願海の眞假を定む。即ち復た此を以て『觀念法門』攝生緣中の所引の三文に應ず。生因三と雖も、眞假同じからず。眞を以て假に映すれば則二自ら混じり、唯一の本願念佛往生なり、餘の二は本願に非ず、故に謂ひて假と爲す、隨他設の故なり、本願に非ずと雖も、亦是れ生因なり、彼に至るを得て、胎生の報を感ず、同く胎生を感ずと雖も、其の心行を本願に望むるに、龜細同じからず、兩願を分つ所になり。黒谷の道こゝに於て大に定る。諸家の意は皆黒谷の意に非ざるなり」と。蓋し大に好し。『對問記』には三願を對照して三異を出す。云く信行前後、信樂有無、行相難易と。今謂く、得益勝劣、と抑止有無の二異を加へて五異とすれば

宜しかるべし。今標舉するに心を以てせるに就きて『對問記』に云く「方便二願は俱に心と行と及び益の三種あり、發願回向とは心なり、功德、徳本とは行なり。來迎果遂とは益なり。故に願名亦然り。而して、今は上の十八願に對して心に就きて標するなり」と。好し。

至心發願之願、至心廻向之願、とは觀小兩經に依りて、要眞二門に通ず。即ち『觀經』に廻向發願心と云ひ、『小經』に三發願を云ふが如し、然に各々其一を擧ぐるものは蓋し其所主に從ふ、理實は互通なり。問、云何が所主に從ふや。答、十九願の機は本とこれ諸行の機なり、故に下文に「乃出九十五種邪道雖入半滿權實之法門等」と云ふ。是を以て歸入の初は必ず發願を須ひ、廻向は自ら從ふ、故に回向を略して發願を説くなり。『和讃』に云く「諸善萬行コトク至心發願セルユヘニ、往生淨土ノ方便ノ、善トナラヌハナカリケリ」と。蓋し此の意なり。又二十願は既にこれ係念我國の人なり、而して自力の稱名を廻向して生せんと願す、故に廻向を主として發願を略するなり。『敬信記』に攝受と折伏とを以て釋す。見るべし。

此の願名の中、信を擧げて行を攝す。二生はこれ證、二經はこれ教、此の四法以て上の眞實四法に對するなり。

邪定聚機、不定聚機、邪定、不定の通途の解釋は『隨聞記』に出づ、宜く披見すべし、今家の意を云へば『六要鈔』(六行)に云く「邪定聚機者問今所言者淨土正機往生極樂之行人也。何云邪聚。

答疑端所來誠以爲難。但試會之觀經九品衆機之中其下三品是正實機。而彼三品或說應墮地獄或說應墮惡道、斯乃爲顯定業能轉奇特之益。且約遇善以前之機云邪定歟。是故下云觀經意也」と。蓋しこれ邪定聚を受法已前に約して釋す。然に今の三定聚は受法に就きて名くるものなれば此の『六要』の義は先輩の齊しく取らざる所なり、猶ほ三定聚の解釋は、曩の信卷の標願細註の下に出で、彼に就きて見るべし。

雙樹林下往生 難思往生 三往生の義に關して西山、鎮西に於て異説有り、これに就きて『法事證甄解』に評有り、甚だ面白ければこゝに其文を紹介せん。即ち云く「初に鎮西義を辨せば、『記』に三解あり。其一に云く「雙樹林下者、擧釋尊入滅處、令厭穢土無常、謂釋尊猶交梅檀煙、況於凡夫哉」と。辨じて云く、所解の如くならば、初の難思議と後の難思とは、何の相を擧げて何の心を生せしめんとする、將た淨土の相と爲さんや、亦穢土の相と爲んや、以て厭はしむるならば、其れ何等の相を難思議と爲すや。又何等の相を難思と爲すや、若し初と後とは淨相を嘆ずと言はゞ、中間の一種は何故に淨に非ざる。故に知ぬ、此解は道理に應せざるを。其二に云く「淨土果報、次於無爲泥洹之道、可歸大般涅槃常樂、且寄釋尊入滅、顯彼四徳、此乃已得往生之後、未歸常樂之前、有淨土無量快樂故云難思議、後次於無爲泥洹之道、故云雙樹林下永住圓寂之理、故讚難思也」と。辨じて云く、所解の如くならば、初は淺、中は深、後は極深と爲る、

此れ理に應せず、何となれば、凡そ諸の讚歎の法は、語を用ふるに輕重有つて、以て其の淺深を顯す。言語道斷心行處滅の故に難思議と云ふ、これ嘆の極なり、何故に淺を讚じては重語を用ひ深を嘆するに還つて輕を以てせんや。又『玄義』の序に云く「捨此穢身、即證彼法性之常樂」と。初生の時に未だ四徳を得ずと云ふが如きは、乃ち即證の文に違す、若し即證の者と、未即證の者と有りと言はゞ、土に眞假あり、往生に殊あるや明けし、然らば即ち今家の所判に同じ、若し然らずば、即證の文を云何が通せんや。又所引の『淨土論』に據れば、初後俱に應に難思議と言ふべし、初の生受樂二十九種は後の圓寂一法句門と同じく不思議なるが故なり、何を以て後の深の處に却つて議の字を略するや、故に知ぬ理に應せざると。其三に云く「難思議與難思彼此同也。但爲聲明重置此句、如五念讚云南無阿彌陀佛阿彌陀佛」等と、辨じて云く、設使是れ聲明なり、とも應に詮表する所あるべし、此れ何の法をか詮顯する、又雙樹林下も亦何等の法をか詮する、若し其所詮は上の二義の如しと言はゞ、上の義の成せざるとは向の所辨の如し、故に記の三解は並びに據り難し。

又西山家に凡そ四解あり、一（鴉木の行觀の解）に云く「初難思議者、言語道斷心行處滅故、後難思者重絶分別故、雙樹下者、在中顯凡夫往生不思議、謂、雙樹者即是佛入滅處、以表凡夫往生、故云往生樂」と。辨じて云く、佛の入滅の處は凡夫往生を表すとは、是れ云何が表する、若

し其入滅の相を取つて捨此生彼の義を表するとならば、其捨此生彼は何ぞ唯凡夫のみに局らん、普賢文殊等の聖人の願生の如きも亦皆願我命終等と言へり、又佛の入滅を以て凡の捨身を表すとならば、迷悟天隔せり、謂つべき類に非すと、又難思議と難思とは初は龜にして後は細ならば、初と後と位を易へて方に乃ち可ならんや、難思は猶ほこれ龜にして難思議は乃ち深細なるべきが故なり、上に准じて知るべし。二（智圓の解）に云く「雙樹八本、四枯四榮、即表非滅現滅、且以四榮、屬彌陀非滅故、以四枯屬釋迦現滅故、今歸彌陀得往生故、約四榮邊云雙樹林下往生樂」と。辨じて云く、若し所解の如く但四榮を取つて雙樹と爲さば雙の義を成せず、又若し彌陀の四徳を顯さんが爲ならば、宜しく安養中の事に就きて其徳を顯すべし、何ぞ煩しく雙樹の一邊を藉るを須ひん、故に此解は據るべからず。三（實信の要義）に云く「難思議者、口業不及、雙樹林下一代化極、身業不及、難思一種意業不及」と。辨じて云く、以て口業の不及と爲すならば、但だこれ難議にして難思議に非ず、中間の一種は正に依の處を指す。何ぞ身業に配せん。四（有人の解）に云く「釋尊已於雙樹中間、頭北面西右脇而臥、入般涅槃、今取於彼面西而願西方、以彼入滅以比往生、故云雙樹下往生樂」と。辨じて云く、若し西方往生を明すと爲さば、宜しく直ちに西方等と言ふべし、何ぞ勞はしく彼雙樹を取ることを須ひんや、迂遠も亦甚し、豈に其れ然らんや」と。蓋し評し得て巧みなり。

次に今家の義を述べん、雙樹林下往生とは『六要』六(下)に云く「雙樹林下往生者問其意如何。答。雙樹林者狗戸那城跋提河邊大聖釋尊入滅砌也、是則化身入滅處故於明化土舉此處歟」と。これは釋尊入滅の處を擧げて化土往生を明すと意なり、然に『述聞』には、この説を評して『小經』往生も化土なれば、この義濫有りと云ひ、次の如く自説を立てたり。即ち云く「雙樹林下とは經の説處を擧げて以て諸行を詮す。謂く、釋迦文一代の説、謂く諸行と爲す。然に雙樹の説最後にして前を該ぬ、義一代を收む。既に一代を收む。謂ふ所の諸行は蘊在して餘すなし、故に雙樹を擧げて即ち諸行を指す。是故に此名は諸行に由つて以て往生を得ることを顯す」と。以上二義ある中、前説を好しとす。後説の如く、雙樹を以て諸行を詮すと爲すは、附會に墮せざるか考ふべし。難思往生とは之を難思議往生に對するに、因に約すれば、行は是にして心は非なることを顯す。『三經往生文類』(行)に云く「シカレドモ如來ノ尊號ヲ稱念スル故ニ、胎宮ニトママル、德號ニヨルガ故ニ難思議往生ト申スナリ。不可思議ノ誓願疑惑スル罪ニヨリテ難思議往生トハ申サズト知ルベキナリ」と。蓋し此意なり。又果に約すれば、議の一字を缺きて往生即成佛の義なきを示す。即ち難思議は往生に當り、難思議は成佛の義に當ることは讚偈讚に就きて其意見るべし。之を要するに、雙樹林下往生は果に約して唯これ抑貶、難思議は要門に望むれば褒揚の義あれども、弘願に望むれば猶これ抑貶なり。然にたゞ弘願難思議往生のみ、因果、機法俱に是にして不可思議なることを顯すなり。

已上、二機二生を明す。二機とは云く發願と廻向の信、即ちこれ因法なり。二生とは即ち其の果なり。因に二機を論じ、果に往生を論ず、此の二因果これ兩願の所誓なり、此の兩願の所誓の因果を詮するの教を觀小二經と爲す。

無量壽佛觀經之意也、阿彌陀經之意也、二經の義當に下に至りて辨せん。

問。三機の別は何によりて成するや。答。之に就きて凡そ三義あり、一義の意は、十八、二十の弘願と眞門の機は、同じく第十七の名號の義れを聞くと雖も、十八は如實に之を信じ、眞門の機は、之を聞損せるものなりと云ふ、而して要門の機は第十七の説法を聞くに非ずとなすなり、又一義の意は、三機は共に第十七の我名の義れを聞くと雖も、第十八の機は之を如實に聞き、第二十願の機は之を聞損して、自力の稱名と聞き、第十九の機は同聽異聞して、名號の體德たる萬善萬行に着眼して、諸行往生と聞くなりと云ふ。

又一義の意は三機共に第十八願の説法を聞くと雖も、二十の機は乃至十念を自力の稱名と聞損し、十九の機は唯除等の文字を誤解して、善人ならでは往生を得ずとし、こゝに諸行を勵修するに至ると云ふなり。斯の如く三義ありて、是非容易に決し難し、詳しくは更に考ふべし。

題 號

〔本文〕 顯淨土方便化身土文類六本^①

愚禿釋親鸞集^②

〔校異〕 ①本、題目の中本の字、『本願寺本』『報恩寺本』『高田本』等に之の字なく、『寛永』『正保』二本は小書す。②撰號は『報恩寺本』は題號の直下に在り。

〔細釋〕 題號の中二有り、一に題目、二に撰號なり。題目の中、方便とは、『大經淨影疏』上(大正三七⁹⁸)に云く「方便之義汎論有四。一進趣方便如見道前七方便等進趣向果故名方便。二施造方便、如十波羅蜜中方便波羅蜜巧修諸行故曰方便、三權巧方便如二智中方便智等權巧攝物故名方便。四集成方便諸法同體巧相集成故曰方便」と。今謂く方便とは暫用還廢の義にして、若し暫用の義に据すれば權用門の扱ひとなり。還廢の義に據れば簡非門となる。暫用とは弘願に至るの方便階梯と成るの意なり。即ち衆生の機猶生にして、直に本願の實渚に至ること能はず、大悲捨てずして俯して之に就く、漸にして以て攝す。是に於て二蘇息所を化作したまへるなり、然に佛の本意は廢立に在れば、暫用は終に還廢となり、本願獨り立して、十九、二十は所廢に墮す。

斯くの如く方便に暫用と還廢の二義ありと雖も、化卷の當面は所廢に在ることは前に述ぶるが如し。前五卷の眞實に對して第六卷の簡非なることを言を俟たざる所なり。化身とは正しく淨化又は別化を指す。蓋し化身に種々の異説あり。一は法、報、應の三身門中の應身のことを化身といふ。善導大師の是報非化の化とは蓋しこれに當る。一は法、報、應、化の四身門の化にしてこのときは或天或龍或鬼の身をいふ。この外或は圓光化佛、或は來迎の化身佛等有り、故に一概すべからず。然に今こゝに云ふ化身とは上來とは、性質を異にして、報化佛を云ふなり。報化佛とは報即化の義にして、眞報身を機の感見によつて、化身と見るなり、今少しくこの義を詳述すれば、十九、二十の行者が化土に往生して、佛身を見るに當り、數即無數量の眞報身を見て、數の一邊に着して、未だ無數量の側に體達せず、如來亦此の機の爲に自徳を隠して數量的の佛身を變現したまへるを化身といふなり。故にこの化身は通途の化と異なるが故に別化と云ひ、淨土中の化身なるが故に淨化とも云ふ、之に對して他を通化とも、穢化とも稱するなり。

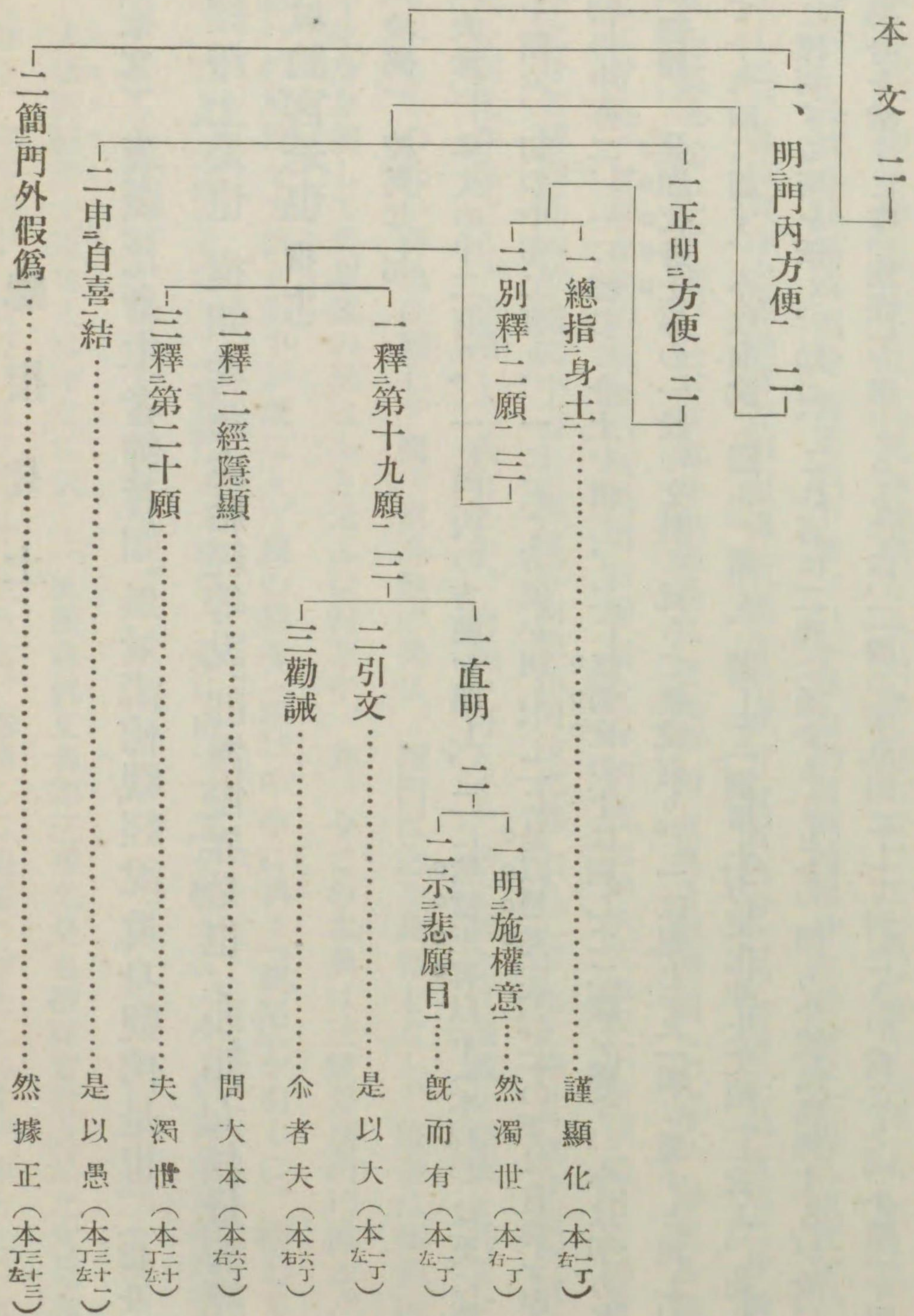
身とは古來より三義を以て説明さる。即『佛地經論』第七(大正廿六³²⁵)に云く「體義依義衆德聚義總名爲身」と。又『成唯識論』第十(大正三二⁵⁷)に云く「體依聚義總說名身故」と。知るべし。

問。眞佛土卷に假の佛土と云ひ、今は方便化身土と云ふ、假と化と義相如何。答。『對問記』に云く「眞の言は假に對す、化の言は報に對す、前はこれ眞報、今は是れ假化、彼此互具なり、然

に眞は報の義を兼ね、報は或は假に通ず、故に上に眞を以て之を言ふ。假の言化の義を具せず、化還つて假の意を存す。故に化を以て之を言ふ。又真假皆是れ因願酬報の故に、通途の化に簡びて以て假報と爲す。これ與の義なり、亦是れ報と雖も、假報眞に非ず、故に還つて假に屬す、眞報を報と名け、假報を化と名く、これ奪の義なり。報化の判、此に於て立つ」と。好し。

問。方便亦教行信證あり、何が故に言はずして身土を以て題するや。答。『述開に』云く、「上の眞佛土の如きは證中より開く、此中の身土は亦これ即ち證なり。故に證を以て題す、其の過を著して、行者をして、厭うて、此心を捨てしむるが故なり。廢の爲の意見るべきなり」と。『一滯録』に稻稗の喩を以て説明せり、即ち云く「譬へば苗の時に稻と稗とは分たねども、秋實のときに至ればその相自らあらはなるが如し。今も此土の修因については、眞實方便分れがたし、彼上に至つて眞實は眞佛土に往生し、方便は化土に至つて不見三寶の殃苦を受く、彼秋實に至つて、稻と稗との分るが如し、その相顯著なり、このいはれあるがゆゑに、方便の四法をば化身土の土にて論じ給ふ」と。蓋し兩説共に好し。

本文分科



總指身土

〔本文〕 謹顯化身土者佛者如無量壽佛觀經說眞身觀佛是也。(指身)土者觀經淨土是也。復如菩薩處胎經等說卽解慢界是也。亦如大無量壽經說卽疑城胎宮是也(指土)。

〔校異〕 校異なし。

〔大意〕 本文の中二有り、一に門内の方便を明し、二に然據正眞以下(本三三)は更に門外の假偽を簡ぶ、初の中亦二有り、一に正く方便を明し、二に是以愚禿(本三三)の下は自喜を申べて結す。初の中亦二、一に總じて身土を指し、二に然濁世の下は別して二願を釋す、今は初めなり。

〔細釋〕 謹顯化身土等の一段の文科に就きて異說有り。一は總じて二願に通すと爲し、一は別して十九願に屬す、今は前說に隨ふ。謂く、題して「顯淨土方便化身土文類」と云ふ。此は教卷の前に標列する所を承く。知ぬ、これ言は二願に通することを。即ち今彼は牒釋するが故なり。然に佛身を指すに唯「觀經」を擧ぐるものは、二機の所見同にして別なきが爲なり。「小經」を出さざるものは所說これ眞佛の故なり。化身土とは報中の化、眞佛に異なるが故に亦假とも云ふ。前卷(二二)

に「假之佛土者在下應知」と云ふは今釋を謂ふなり。佛者如等とは上は牒にして、此は指なり。中に於て初は佛、後は土なり。眞身觀佛とは「六要」第六(三)に二義を擧げん釋す、文に云く「解有二義。一云眞身觀佛爲報身義置而不論。但今釋意別願酬因報身土者身是念佛三昧教主、土又乘願入土也。而彼眞身之佛體者先約觀佛所說身故雖有眞實色身之名若望念佛所見之身猶帶方便。依此義邊爲化身歟。二云言眞身觀佛是也者此非指彼眞身報佛謂之化身。指眞身觀眞身所共之化身也。眞身本佛約其觀門所見邊時雖屬化身約彼念佛衆生攝取不捨益時其實體者是報身也今化身者所謂經云於圓光中有百萬億那由他恒河沙化佛已上。指此化佛言眞身觀所說化佛非其眞身則化身也。」と。今謂く二義有る中、前義を可とす。然に鈔主は後義を穩便と爲すべしとのたまへるもの此の釋思ひ難し。問。眞身觀の佛は、雁門は之を眞報となし、終南は酬報の身と云ふ今化身を指して眞身觀の佛なりと云ふは何ぞや。答。今この本典は三經差別門に據る。即ち「觀經」の所詮を方便と爲すが故なり、前の信卷(未七)の中に偶々「觀經」を引くに、標して又言と云ひ、之を「大經」と爲して「觀經」と云はず、是に由つて之を觀るに、今、如無量壽佛觀經說と云ふは、即ちこれ眞實に簡別するの意なり。

土者觀經淨土是也とは下文に云く「此願成就文者卽三輩文是也觀經定散九品之文是也」と。乃ち知る、定善門中の所說、及び九品往生の文、總稱して觀經の淨土となす。即ち上の化身所居の

土なり。佛身既に二機の所見に隨ふ、土も亦彼に准ず。長樂寺隆寛、渡邊成覺等同じく九品を判じて以て化土と爲す、而して今と別なり。西山、鎮西は九品俱に報土と爲す、固り宗祖の所説に異る。『述聞』に異流の義を略述して云く「長樂の寛云く、大小二經及び論の所説同く是れ報土、本願所成の土の故に、蓮華藏世界の故なり。『觀經』所説の九品の行相は彼と同じからず、總じてこれ邊地化土の相なり。渡邊の覺の意亦化土と爲す。第九觀佛以て報身と爲し『大經』に屬し、第八觀佛其の化身と爲し、主を以て『觀經』に屬す。西山九品、鎮西同く云く唯これ報土と。西山釋して云く、三心正因は即ち是れ念佛、九品諸行は其の爲に任持せらる、是故に一種の念佛往生なり、既にこれ一機なれば所感二なく、唯一の報土なり」と。鎮西釋して云く、諸行は本願に非ずと雖も、善體妙の故に、總願に依るが故に、所入別なく唯一の報土なり」と。而して一一に就きて批評を加ふ。好學の士は宜く『述聞』に就きて見るべし。

今、更に西山、鎮西の佛土觀を紹介すれば左の如し。先づ鎮西の意は淨土は報土にして、これに三輩九品の差別有りと爲す。何故に九品の差別有りやといふに、畢竟これ其因に九品の別あるが故なり、而して、其因に差等ある所以は如何といふに『東宗要』(淨全十一¹⁰⁴)にこれに(一)數邊の多少、(二)安心の淺深、(三)行業の強弱、(四)菩提心の具不具、(五)解了の大小、(六)宿善の厚薄、(七)機根の善惡、(八)行體の勝劣の八の理由有りとし、更に委しく之を説明して、九品に

横豎を立て、各々一行づつ夫々九品に配するを豎の義とし、一一の行に九品ありとするを横の義と爲せり。

次に胎生と邊地、三輩九品と胎生邊地、懈怠界と胎生との同異に就きて考察せん。

(一)胎生と邊地と同異如何と云ふに『東宗要』(淨全十一⁶⁸)『同見聞』(淨全十一¹⁸⁶)の意に依るに、同異の二説有り。同の義とは、因より云へば邊地も胎生と共に疑惑心のものゝ生ずる處にして、果より云へば共に五百歳不見三寶の厄有り。因果共に説相同じければ、邊地と胎生とは同なりと云ふべし。『略論淨土義』に「不了佛智疑惑不信猶信罪福生安樂國。於五百歳不見不聞謂之邊地亦曰胎生。不見三寶義同邊地。或在真邊名爲邊地亦如初生人法未成名爲胎生」と云へるは此義を述ぶるものとせり、異の義とは、經に既に前後二箇所に説かる、若し同一ならば繁重の失を招かん。而も經の説相を注視するに、邊地の因は疑惑中悔とあり、これ一法に於て、或は修し、或は悔ひて修せざるものなり。胎生は佛の五智を疑ひ乍ら、餘善を修せしものなり。斯の如く因相同一に非ざれば、果相亦別なりと云はざるべからずと爲す。以上の兩義は共に過失なしとして、取舍を加へざるも、後義を取るの意ならんか。

(二)三輩九品と胎生邊地の同異如何と云ふに、『東宗要』(淨全十一⁶⁹)『決疑鈔』(淨全七²⁵²)『同裏書』(淨全七²⁶⁸)の意に依れば、これに亦同異の二義有り。『略論』に「又有一種往生安樂不入三輩

中謂以「疑惑心修諸功德」と云ふは、胎生は三輩九品に入らざるものとするの意にして、異の義なり。又義寂、憬興は同として中品下品に配當せり。この同異の二説は共に理由有り。即ち異とするものは、三輩九品は信者にして、胎生邊地は疑者なり。信者は佛前に生ずるも、疑者は然からずして邊界に止まる、此點より見れば、異と云はざるべからず。さればこれ正依の『大經』には三輩より別處に胎生邊地を説きしなり。然に異譯の『平等覺經』と『大阿彌陀經』とに中下二輩の中に之を説きし如きは異譯の不正にして依用すべからずと云へり。次に同とするものは假令、信と疑と其機は別なるも、衆生根性の品位を論ずるときは、三輩の外はない。中品の者にして、疑惑する者もあらん、故に信疑を以て分てば、別とならんも、品位より云へば、三輩九品の外はない。正依『大經』は前者に依りて異とし、『平等覺經』『大阿彌陀經』は後者に依つて同とせるなり。若し同に非ざれば、『觀經』とは、九品の外に胎生邊地を説かざれば攝生未盡の失を招き、『大經』の三輩も下機を攝すること未盡となる、斯の如く考ふれば、同と云ふべきなり。『略論』に異とするは疑惑上の善は三輩信心の因縁中に入らぬと云ふ迄にして、全然三輩中に無しと云ふには非すと辨せり。已上同異の二説は派祖が元祖より傳へられたるものにして、是非を加へ難く、又之を善導の釋に照すも判すべき説なし。併し、九品の中に華内の三障有る邊より見れば恐く同の義を存するに非ざるかと云へり。

以上の各土に就きては同異の説あれども、何れも報土と爲すは一定せり。

(二) 解慢界と胎生の同異如何と云ふに『東宗要』(淨全十一)、『決疑鈔』(淨全七²²⁹)の意に依るに、全く異と爲す、而して其の理由に次の如き四由を擧ぐ。(一) 極樂は至心の者生ず、懈慢は不至心の者生ず、(二) 經の上六品は來迎あり、懈慢は來迎無し、(三) 遠近を異にして、極樂は十萬億土を過ぎ、懈慢は十二億那由他を過ぐ、(四) 二土の得名既に別あり、此の四異あるを以て何ぞ一處と云はんと示し、更に道理を以て左の如く云へり、「凡そ道理を案するに、若し懈慢を化土と名けて極樂内に攝すと爲さば若し爾らば、唯報の義便ち破壊すべし、若し懈慢を報土と名けて極樂内に攝すと爲さば、若し爾らば還て難行即ち報土に生ずることを成ず、進退難あり、義何ぞ成ずるを得ん」と。

已上鎮西派の淨土義を講述せしが、之を要するに、淨土は三輩九品の土にして正しく信者の生ずる處なるも、其中に疑惑行者の生ずる胎生邊地も攝せらる、而して上來の土はすべてこれを報土と爲す。之に對して其の報土に至る中途に懈慢界なる土ありと主張するものなり。

次に西山流の淨土義を述べん、先づ深草流の『淨土宗要集』下(註)に依れば、淨土を以て報土となし、邊地胎生に就きては同じく報土内なりと雖も、彌陀の悲願普く群機を攝するが故に、帶疑惑の者として此事を見せしむるなりと爲し、邊地胎生の三輩九品の所攝なりや否やに關して二

説を擧げて云く「邊地胎生は三輩九品の所攝なりや否や。『大經』は三輩の所攝と爲さず、異譯『覺經』には中下輩の攝を説く。『略論』に云く「復有二類不入三輩」と。又云く「識其本罪深自悔責求離彼處還同三輩」云々。此れ乃ち初は攝せずして後は還て攝するなり。三輩既に爾れば九品も例するに然るなり、九品の華合は別に所由あり、上六品は善行の強弱に由り、下三品は惡行の輕重に由る、而も、皆三心具足の人なるが故に惑疑を帶して生ずる者に非ざるなり、或は云ふべし下品三生は邊地に非すと雖も亦胎生と名く、上中輩の中の華合之に例す」と云へり。

次に極樂世界の九品の有無を説きて、安心門の正因感果は無品と云ふべく、起行門の正行感報は有品と云ふべし、有品即無品、無品即有品なること『論註』の如しと云へり、此れ即ち果は無差別にして、報は差別ありと爲すものなり。

又邊地と懈慢界との區別に就きては、全く別なりと爲し、懈慢は未だ極樂に至らざるが故に極樂の外なりと云ひ、邊地は雜疑の者の生處にして、懈慢は雜修の人の生處なりと爲せり。

後に西谷流の義は行觀の『私記』の意に依るに、淨土は通途三身門の行酬因に非ずして別願酬報の報土なりとし、若し三心念佛の正因平等の邊より云へば、一切善惡の凡夫直に往生することを得て而も、生即無生にして別無しと爲す。然に正行差別に應ずるときは九品の別有りて、相の龜妙華開の遲速等の差ありと云ふ。これ本所修の行相を顯すものにして、畢竟此土の機相を顯すな

り、淨土には此の如く正因に應ずる平等と正行に應ずる差別とあるも、平等は差別に即し、差別は平等に即すれば永く九品の階位に執すべからずと云へり。

以上、西山、鎮西の淨土觀を記述せり。即ち、西、鎮共に報土に九品の階降を認め、邊地胎生と亦報土中に屬し、懈慢界のみを極樂外の化土と爲す、蓋しこれ文理に準せざるの説相と謂つべし。既に『大經』には一乘妙果平等一相の義を説き、『論註』には「本則三々品、今無一二之殊亦如繩一味」と云ふ。これ報土果相の無差別平等なることを顯示するものに非ずして何ぞや。又元祖の『西方指南鈔』下本(中外本)の『和語燈錄』四(三)には「極樂に九品の差別候事は阿彌陀佛のかまへさせたまへる事にて候やらん答、極樂の九品は彌陀の本願に非ず、四十八願の中にもなし、是は釋尊の巧言なり、善人惡人一所に生ると云はゞ、惡業の者ども慢心を起すべきが故に、九品の差別をあらせて、善人は上品にすゝみ、惡人は下品に下ると説給へる也。いそぎ參りて見候べし」とあり、これ九品は釋尊の巧言なると同等に、一面には自力諸善の少功德者の往生に屬するの義あることを反顯し得べし、然る時は九品の別あるは眞實報土の果相に非ずして、機感に應ずる垂化の淨土と爲すべきに非ずや。

又懈慢界を邊地胎生に比較するに『平等覺經』三輩の中下並に『大阿彌陀經』疑城胎生分の文に「其人壽命終盡則生無量清淨佛國、不得前至無量清淨佛所、便道見無量清淨佛國界邊自然七寶

城、心中便大歡喜、道止其城中、則於七寶水池蓮華中「化生云々」とあれば邊地胎生と懈慢界とは必しも異土とは云ひ得ざるべし。又懈慢界は十二億那由多なれば極樂に比するに娑婆に近しと雖も、數量は機宜の説必しも拘泥すべからず。故に懈慢を化土とすれば邊地胎生亦之と等しく化土と云はざるべからず。既に因に念佛と諸行の別を認むる已上は土に於て、報土と化土とを區別することは理の當然たる所なり。然に西山、鎮西は淨土を以て報土となし、諸行の入報を許すもの誤謬の大なるものと云はざるべからず。和語燈五(註)に云く「本願ノ念佛ニハ獨立ヲサセテ助ケサ、ヌ也。助サス程ノ人ハ極樂ノ邊地ニ生ル」と。助を借る念佛は當に邊地に生ず、況や但諸行にて報土に生ずるの理あらんや。

西、鎮義上に竟りて以下今家の義を述べん。『六要』第六(註)に云く「集主意以觀經土判爲化土九品之土是爲其攝。凡眞報土唯是一種不可思議眞妙土也。但就言九品是化聊有通局。言總意別、所以然者於九品中上品上生之一品者是眞土也。是則名名號所入之土三心具足得生土也。眞化諸土皆悉攝在九品中故總云九品下之八品假立土也。故帶九品名言邊者是屬化土離其名目只是一種。退謂所標之一種者當彼上品上生土也。可分別之」と。『對問記』にこの義を評して云く「是れ九品に就て眞化を分別するなり、上々品土を取つて判じて眞土と爲す、上品土の如き若し其相を取らば眞と異なし、但し體徳の融不を眞假の差と約すのみ。凡そ彼土の諸相の中、義に

依つて分別せば、唯眞なるものあり、唯化なるものあり、二に通ずるものあり。謂く彼の胎生含花の如きは局りて化土に屬す。又廣門諸相の中、事相有り、徳相有り、量性二徳及び心業不虛作住持或は菩薩四種等是れ其の徳相なり、而して局りて眞に屬して、化に通せず。又事相莊嚴の如き、廣相の一分、化に通ずるの義有り、眞身觀の佛身の如き、鸞師は取りて眞佛と爲す。今は判じて化身と爲す、講堂道樹等亦隨つて眞化に通ず、これ其の事相則ち差別の故なり。融不應に隨ひ、一相にして二見に應ず。眞土の人の如き光壽の眞證に契當し、相入の妙境に體達するが故に彼の廣門相に於て、妙に融即無碍を見る。又化土の人の如き常に妙境に居して其妙を知らず、相入の境に於て、差別の看を爲す、上品上生の機と雖も唯廣相の一分を見る。これを化身化土と爲す、是を以て觀經の淨土眞に同ずるの相ありと雖、機見に應ずる故に總じて化土と爲す。『六要』主の如きは、眞に同ずるの邊に約して、上品の一種を眞報土と爲すなり」と。蓋し従ふべし。懈慢界とは『述聞』に云く「懈は謂く懈怠、專修の反なり、慢は謂く驕慢、恭敬の反なり。專修に非ざれば則ち一行に非ず、恭敬に非ざれば則ち一心に非ず。一行一心と違ふ故に懈慢と云ふ。界とは他を別するの言、懈慢の人の生ずる所なり、因を以て果に名くるが故に、懈慢界といふ」と、『仰信錄』に云く、「懈慢界とは懈は謂く、懈怠にして、これ信法を缺ぐ、慢は謂く驕慢にして、これ信機を缺ぐ、二種深信を缺ぐの人を懈慢者といふ、其所生の處なるが故に懈慢界といふ」と。二

説ある中、『仰信録』の説好し。經等説の等とは、『摘解』に云く「等とは、蓋し他經に亦路城を説くことあるを指す、『平等覺經』『大阿彌陀經』の中下輩に亦路城の説あり」と。今謂く、等は向内にして向外に非ず、他經に懈慢の説なきが故に。亦如等とは、經文は下の如し、疑城とは疑とは謂く、佛智を猶豫す、城とは人を盛りて能く安んず。又非を妨ぎ、敵を禦ぐの義あり、疑惑行者の所止の處にして因よりして名を立つ、故に疑城といふなり。胎宮の胎は謂く胞胎、取りて別化を喻ふ。宮は謂く宮殿、所居の處をいふ、彼處の華宮、猶し胎に處するが如く事自在ならず故に胎宮といふ、此は化土の當相に就て稱を立つ。この目は現本に文なし、下(四)の文、及び『三經往生文類』(三)には「生彼胎宮」と云ふ。蓋し原本に異本あるか。

問。疑城胎宮と九品の化土と同異如何。答。『略讚』に云く「古來異論有り、或は同義と爲し、或は異義と立つ、鎮西宗要等廣く諸家の所論を擧ぐるが如し。今家の意、同義を存す。宗家下品三障の釋は、不見三寶の文に依る。又地觀疏に云く、含華未出或生邊土、或墮宮胎と。此れ乃ち九品、含華、邊地、胎宮を同一處と爲すが故なり。今按するに、既に化土の業因千差、土亦千差といふ、九品の差別は且く一端を擧げて其の不同を示す。理實は千差なり。或は疑惑の失に由つて、説きて疑城と爲し、或は懈慢不牢に由るが故に懈慢國土と名く。不同の故に義亦差別す、義別なるに隨つて立名亦た同じからず。名義同じからずと雖も、等しくこれ彌陀の化土なり、是故

に此中、『觀經』の淨土を擧げて化土の體を示す。經説不同に依るが故に名を異にす、亦但だ其經説に依つて一端を顯示するのみ。理實は千差萬別なり。たゞこれ同一の化のみ」と。好し。

問。今此れ總じて指し、何ぞ不定聚の機の所感の身土と言はざるや。答。述聞に云く「此中、胎宮の後釋、及び往生文類中、小經の土と爲す、次下の引文、則ち觀經に屬す、之に由つて之を言はゞ、皆二機に通ずるなり」と。今謂く、次下の要文の結文(三)に邊地胎宮懈慢界業因と云ひ眞門下(四)に則ち土者即疑城胎宮是也といふ。知ぬこれ總通することを。

問。土を指す列次何の意有るや。答。擧ぐる所の三經所説の土、體一名異なり、何ぞ列次に拘らん。然に既に『觀經』に據りて方便の身を定む、土を指す、亦當に『觀經』の説に據るべし。他經に卒先する所以なり、『處胎經』を『大經』の前にする所以は『對問記』に云く「『大經』は但だ所居の胎宮を説く、胎經は所生の國界に約す。化土を判するは國界を親と爲す、故に胎經を先にして、『大經』之に次ぐなり」と、列次の所由以て知るべし。『述聞』に小本を出さざる理由を述べて、彼は諸佛の所讚に従ふ、今置て言はざる所以なり。爾ば何ぞ『大經』に就て指すやと云ふに、其事顯露なり、就て指す所以なりと論せり。

明施權意

〔本文〕 然濁世群萌穢惡含識乃出九十五種之邪道雖入半滿權實之法門眞者甚以難實者甚以希僞者甚以多虛者甚以滋。是以釋迦牟尼佛顯說福德藏誘引群生海阿彌陀如來本發誓願普化諸有海。

〔校異〕 〇滋、『正保本』旁を慈に作るもの形誤。

〔大意〕 二に別して二願を釋す、中に三有り、一に第十九願を釋し、二に問大本(本經)の下は二經の隱顯を釋し、三に夫濁世(本經)の下は第二十願を釋す。初の中三有り、一に直明、二に是以大經(本經)の下は引文。三に余者夫(本經)の下は勸誠。初の中二有り、一に施權の意を明し、二に既而有(本經)の下は悲願の目を示す、今は初めなり。

〔細釋〕 要門教の起るは、聖道の機を誘引せんが爲めなり、故に善機を所對と爲す、『序分義』に云く「一切衆生機有二種。一者定二者散」と。定散善機本と聖道に在り、彼れ既に邪道を出で、正道に入る。然に眞實なる者希にして虚僞なるもの多し或は名利に走り、或は惡見に墮す。能く出離を得るものは幾どなし、これ其法難修にして其益微なるが所以なり。要門の説これが爲に起る。『和讚』に云く「臨終現前ノ願ニヨリ、釋迦ハ諸善ヲコトク、觀經一部ニアラハシテ定散諸機ヲス、メケリ」と、知るべし。濁世等とは時機を擧ぐ、乃出等とは外道を出で、佛道に入るなり。

半滿とは大小乘を謂ふ。『北本涅槃』第五如來性に、『南本』第四四相品に、長者の稚子に教ふるに先づ半字を以てし後に毘伽羅論を授くるの喩を説く。後魏の流支は據りて以て二教の判を作す。法門とは『述聞』に云く「探玄記」二に云く、法に三義有り、謂く、自性と軌則と及び對智となり。門に四義有り、一に標別の義なり、此門は彼に非ず等の如し、二に通智遊入の義、三に收入の義なり。一切一に入り、一を以て門と爲すが如し、四に通出の義なり、一門の中に於て能く一切を出して窮盡せざるが故なり」と。眞者實者とは謂く、聖道如說修行の人なり、僞者虚者とは乃ち不如實の人なり。『頂戴錄』『略讚』に云く「下(并)に涅槃經を引きて云く「善男子有四善事獲得惡果。何者爲四。一者爲勝他故讀誦經典、二者爲利養故、受持禁戒。三者爲他屬故而行布施。四者爲非想非々想處故繫念思惟」等と。初の三は今の虚なるものなり、修すと雖も勝他名利の爲にして如實ならざるを虚と爲すなり、第四は今の僞なるものなり、佛法に入るも内心は外道の邪見に走りて佛の正法を失するを僞と爲す」と。

『仰信錄』にこの説を評して云く、「此中に内は外道にして、外は佛教なるを以て僞と爲すは恐くは然らざるなり。既に邪を出すと云ふ。外道に非ざるや必せり。然に聖道門の中に入ると雖も、勝他名利の爲に之を修行するが故に眞實に非ざるを僞と云ひ、虚と云ふ、眞實に對するの言なり別論すべからず」と。蓋し從ふべし。是以等とは上は所被を明し、今は正しく施權を明す、顯說福

徳藏とは行文類結嘆の文(正)に云く「圓滿福智藏、開顯方便藏」と、福智藏とは、眞實五願の所明これなり、方便藏とは、今の方便一卷の所明これなり、此の方便藏は亦分つて二藏となす。云く福徳と、功徳となり。

福智藏とは名は行卷(正)所引の憬興疏に出づ。彼は法藏所修の六度を指して福智と爲す。然に六度はこれ通談なり、今は則ち蓋し別意あり、智とは佛に約して之を言はゞ不思議の佛智なり、行者に就て之を言へば信心の智慧なり、而して無量修福の徳を具す、此を福智と云ふなり。問。定善はこれ智なり、何ぞ福徳藏と云ふや。答。『頂戴』に云く、例へば天台の地前の六度を以て福徳と名け、地上の六度を名けて福智と爲すが如し、地前は未だ無漏の眞智を發せざるが故に概して福徳といふ。今も亦信心の智慧なきが故に定散を並びに福徳藏と云ふなり」と。知るべし。今謂く、福徳藏とは蓋し之を『小經』に「少善根福徳因縁」と言へるに取る、彼は總じて『觀經』所説の定散二善を貶斥して福徳と謂ふが故に。『涅槃經』に准釋するに、弘願教の中に於て、歡喜地、等正覺に至る者は、佛智の不思議に悟入して、彼土に入り、解脱を究竟して常住自在なり。故に名けて智慧莊嚴となす、定散の人は佛智を了せず、彼土に入ると雖も、化土に住して、有碍不自在なり、故に名けて福徳莊嚴と約すなり。後の文に功徳藏と云ふは、經に不可思議功徳と言ふに取る、教頓の邊に據るの目にして、智の言を省きて機漸の義を顯すなり。

問。福徳と功徳とたゞ所依の文の異なるのみにして、言詮の上に別義なきや。答。『摘解』に云く「福とは智に對するの言にして、當修三福と云ふが如く、福利を求むるの能修に名く。功とは智に對するの言に非ずして、具足功徳と云ふが如く、徳用あるに名く、以て諸善と名號とを分つべし。『六祖壇經』上(正)に言く「梁武心邪不知正法。造寺度僧布施、設齋名爲求福不可將福便爲功徳、功徳在法身中不在修福乃至功徳須自性内見不是布施供養之所求也。是以福徳與功徳別」と。此れ他家も亦優降を分つ、以て今の例と爲すべし」と。知るべし。藏とは『述聞』に『法苑義林』を引きて、能攝と攝持の義を以て釋す。見るべし。

顯説とは行卷に開顯方便藏と云ひ、下に開演功徳藏と云ふ。即ち知る、これ開顯演説にして、隱に對するの顯に非ざることを。誘引とは『述聞』に云く、誘引とは接誘引導を謂ふ。『法華』に「長者將欲誘引其子密遣一人形色憔悴無威徳者」等と云ふが如し。此は未だ示すに無上道を以てすべからず。俯して其情に就て以て漸進するが故に」と。好し。阿彌陀等とは、釋尊顯説の本を示す。顯説誘引は未化にして、第十九願を其本と爲すなり。和讃に云く「至心發願欲生ト、十方衆生ヲ方便シ、衆善ノ假門ヒラキテゾ、現其人前ト願ジケル、臨終現前ノ願ニヨリ、釋迦ハ諸善ヲトゴトク、觀經一部ニアラハシテ、定散諸機ヲス、メケリ」と。本末以て知るべし。然に前四卷には、直に「出於其願」と云ひて、釋迦の説教を擧げず、今此中は初に釋迦の開顯を明し、而

して其本に及ぼして、彌陀の發願を明すは、要門方便はこれ釋迦の主とする所なるが故なり、然に釋迦教は彌陀を以て本と爲すが故に本發誓願と云ふなり。

示 悲 願 目

〔本文〕 既而有悲願名修諸功德之願、復名臨終現前之願、復名現前導生之願、復名來迎引接之願、亦可名至心發願之願也。

〔校異〕 校異なし。

〔細釋〕 五名ある中、初後の二名は宗祖の所稱なり。中間の三名は他の所立に依る。第二は靜照第三は智光(行者命終現前導生)第四は眞源、惠心と合せとる(源は云く聖衆來迎心は云く臨終迎接)初の一は行に約し、後の一は信に約す。初を以て後を望むれば聖道にして淨土を成ずることを顯す、『和讃』に云く「諸善萬行コトクク、至心發願セルユヘニ、往生淨土ノ方便ノ、善トナラヌハナカリケリ」と、後より初を望むれば、淨土にして本色に非ざることを示す、中間の三名はこれ其行信の益なり、中に於て初の一は現前の時を示す、命終の時に臨んで方に初めて現前す、故に此は平生の攝取に簡ぶなり。次の一は現前の意は示す導生の爲に現前す、故にこれ既に往生を決定せるに簡ぶ。後の一は現前

の所を示す、聖衆より手を授けて引接し去る、故に此は昔隱今顯に簡ぶ、彼よりして來接するが故なり。

引 文

〔大意〕 第十九願を釋する中三有り。一に直明、二に引文、三に勸誡なり。直明は前に竟りて、今は第二に引文なり。引文の中二有り、一に直に諸行往生を顯して誘引の願意を示し、二に眞假の得失を對辨して廢立の佛意を示す。初の中二有り、一に能入の因、二に所入の土、初の中亦二有り、一に因願を出し、二に成就を指す、初の中亦二、一に本經、二に末經なり。

直 顯 諸 行 往 生

〔本文〕 是以大經願言設我得佛十方衆生發菩提心乃至八功德水湛然盈滿清淨香潔味如甘露。

〔校異〕 (一)正依大經第十九願文(上并經)(イ)大經願言の右、『本願寺本』に「十九修諸功德之願、至心發願之願、現前導生之願」の二十字あり。

(二) 悲華經の文(大正三¹⁸⁴) (イ) 悲華經の華、『寛永』『正保』『明暦』『寛文』の四本は花に作る。
 (ロ) 我當與大の我の下、本經時の字あり。(ハ) 障闕の闕、『明暦本』闕に作り、『寛文本』門に从ひ
 恣に从ふもの形誤。

(三) 十九願成就文。校異なし。

(四) 道場樹の文(大上^{二七七})

(イ) 威神力故の故、『正保本』放に作るもの形誤、(ロ) 十由旬の十の上、經に、或の字有り、
 (ハ) 各皆一等の一等、『正保』『明暦』の二本は下に屬して「一等ノ八功德水」と云ふもの穩かなら
 ず。

〔細釋〕 引文の中二、初に直に諸行往生を顯して、誘引の願意を示す。この中、初に能入の因を
 明し、二に道場樹の文は所入の土を明す、初の中亦二有り。一に因願を出し、二に此願成就文等
 は成就を指す。初の中二有り。一に本經、二に末經、今は初めなり。是以大經等とは第十九願文
 を擧ぐ、此中自ら三有り。云く、機を擧げ(是二)、因を明し(是二)、益を示す(是三)、の三これなり、
 十方衆生とは能修の機を擧げ、言は一切に通じ、意は善機に局る、下三品の如きは、文の當相に
 就かば三福無分の機にして、定散の機に非ず、故に「於哀定散與逆惡」と云ふ。然し念佛を散善に
 攝すれば、能修の機も亦廢惡修善の機と爲る、弘願は然らず、無有出離の機を其所被と爲す、故

に斯法を信するの機は廢惡を須ひざるなり。發菩提心等とは其修因を明す、中に於て二有り、初
 に所廻の行を明し、後に能廻の心を明す、發菩提心とは修諸功德の中に其隨一を出す、これ諸佛
 法中の所主の行なるが故なり。謂く大小世善の中に於て大乘を主と爲す、大乘の中には、發菩提
 心はこれ萬行の元首なるが故なり。こゝを以て三福中に於て、菩提心を以て之を行福に攝す。終
 南、吉水は釋して起行の菩提心と爲す。修諸功德とは總じて定散の諸善を攝す、其行一に非ざる
 が故に諸功德と云ふ。此中に稱名あるや否やに就きては、異說紛紜たり、今其二、三を述べん。
 『二滯録』に云く「修諸功德の中には念佛なし、この修諸功德の中に念佛有るといふはもと他流の
 義、當流にもやゝこれに類するものあり、『口傳鈔』に云く「修諸功德ノナカノ稱名ヲヨリドコロト
 シテ現ジツクベクバ、ソノ人ノ前ニ現ゼントナリ」と。然れ共これ理由の存する所なり。先づ他流
 にては、念佛諸行混同して往生の因とすれば、この功德の中に念佛ありと云ふべき筈なり。今家
 では修諸功德の中に念佛ありとは佛の密意をさぐりていふなり。然れ共、それは二十願に攝す。
 諸行の中に巻き入れぬ、念佛でさへあれば二十願に攝するなり、故に御聖教に修諸功德の中に念
 佛ありとのたまへども、他流の義とは異なる、古來念佛に三重有り、一に萬行隨一の念佛、これ十
 九願の修諸功德中の念佛、二に自力念佛、これ二十願なり、三に他力念佛、これ第十八願なりと
 この三重を明すは東門慧空の説なれども、萬行隨一の念佛と云ふはあるべからず、若し萬行隨一

の念佛ありといはゞ『小經』の少善根、少福德の中に念佛もあるべきや、爾らばまた念佛も所廢となるべし、一經の廢立一時に潰れ了る、決して是の處あることなし。しかれば定散自力の稱名は果遂の誓に歸すとのたまへば、悠悠歌曲の念佛までも二十願なり、たとへば、私領の中に天領あればとて、天領を私領へ巻き取られぬが如し、豈に其れ別に萬行隨一の名を立てんや」と。『頂戴』『敬信記』亦之と同じ、『略讚』に云く「萬行隨一の念佛なしとなさば則ち違する所多し、『散善義』に修行六念の念佛を釋して云く「言念佛者念阿彌陀佛三業功德、一切諸佛亦如是」と。これ即ち諸佛の定散念佛に同ず、豈に定散諸善中の所攝に非ざらんや」と。『對問記』はこの說に従ひ、更に辨じて云く「若し行相に約すれば修諸功德の中にも亦稱名あり、若し機情に従へば攝して諸行に屬す」と。『仰信錄』はこの義を大成して直に發願の當意に就けば則ち無し、釋迦開說の意を推すれば、則ち有りと爲す。要所なれば全文を引用せん。即ち文に云く「初に直ちに發願の當意に就かば、十八、十九、二十の三願は往生の因を誓ふ。中に於て、第十八願は念佛を諸佛法の中より選取して、以て本願と爲す。然に念佛を除きたる外の一切の諸行を廻して、以て願生する者を佛の悲心此機を捨てずして臨終の迎接を誓ふ、是を十九願と爲す。十八を根本となして、十九を枝末と爲す、即ちこれ從本垂末の次第なり。若し機漸く熟して、第十八の名號を聞き、而も猶ほ定散心を以て之を修習して、以て廻向する者を攝して往生せしむ、是を二十願と爲す。此は則ち

攝末歸本なり。當に知るべし、十八、十九は本末次第して往生の因を誓ふ。故に第十九願の中には、只諸行往生を誓ひて稱名の行あるべからざるなり。然に、其諸行往生を誓ふは、佛意、第十八願の念佛に歸せしむるに在り、故に願意は念佛を含みて諸行を誓ふ、諸行の底には必ず念佛あり、猶し水の地下に在るが如し、故に「按方便之願有假有眞」と云ふ、此念佛はこれ弘願の行にして、要門に非ざるなり、四十八願は唯これ一念佛往生の願なり。故に玄義に一々願言等と云ふ此意なり。此は則ち跨節に約して言ふ、當分は然らず、宜しく分別すべし。

次に釋迦の開說に従ひて推せば、三輩及び觀經はこれ第十九願の開說なり。定散二善之を修諸功德となし、散善の三福之を上六品に説き訖る。下三品の中に、念佛一行を三福無分の機に説き與ふるは、此れ乃ち十九願中、所含の眞なるものを開說するが故に、直に取つて定散位中の稱名と爲す。然に、序分に正宗所說の緒を擧げて、定善示觀と散善顯行との二縁を標す、是より順見すれば、一經の正宗は定散の外に念佛あることなし。此義に約すれば、下品の念佛も散善位中に隨屬す、『選擇集』付屬章に定散念佛の二行を對判して散善を分別する中に下品の念佛を判じて云く「若准上三福者第三福大乘意也、定善散善大概如此、文即云上來雖說定散兩門之益是也」と。下品の念佛を第三福に屬して之を上來所說の定散に攝し、結して「定善散善大概如是」と云ひ、更に弘願念佛を別立して、「次念佛者專稱彌陀佛名是也」と云ふ。これも『散善義』の釋意に據

る。彼中に正宗を釋し竟りて、前來の所明を總括して十三觀を定善と爲し、三福九品を散善と爲すの義を結成し、下品の念佛を散善の中に攝屬す、而して付屬の釋に至りて、前の定散を指して「上來雖說」と云ひ、復た念佛を別立して「望佛本願」と云ふ、要弘の廢立、分齊判然たり、付屬章は正しく此義を祖述して散善位中の念佛を辨明す。これ定散門中に念佛あるの證なり、此開說の經より願文を推せば、諸行の中にも亦念佛ありと云ふべし、而して機情に従つて諸行に屬するが故に、該して修諸功德と云ふなり。」と、以上諸說あれども今は『仰信錄』の義に従ふ。

至心發願欲生、これ能廻の心なり、三心を擧ぐと雖も、主は中間に在り、以て弘願に揀ぶ、此心に由るが故に定散諸行方に生因を成す。然に此願及び二十願若し當分に就かば、信樂無きに非や、故に『觀經』深心を説く、而して第十八願に對すれば、則ち信罪福の心にして、總じて疑惑不了佛智に屬す、故に信樂の名を許さず。今弘願に揀ぶが故に、信樂を缺ぐ。發願は必ず廻向を共に前に述ぶるが如し。欲生の言、眞假同く言ふは、外聖道に揀ぶが故なり。若し第十八の欲生に對すればこれ不定怖求の欲生なり。發願廻向を以て十八に別するは、内眞假を分つが故なり、而してこの三心は第十八の三信の如く、三即一に非ずして、自力各別の三心なること又言を俟たざる所なり、臨終壽時とは弘願平生の攝取に簡ぶ。假令とは『六要』第六(廿三)に云く「言假令者、有云不現非實故云假令」。今云不爾來迎假益故云假令。當卷下云佛心光明不照攝餘行者也。假令之

誓願良有由哉。假門之教忻慕之釋是彌明也」と。『略讚』に云く「假令を解して、假門の益と爲すは當に字義を能くせざるのみならず、亦願文に於ても穩當ならざるなり。下文に「假令之誓願」と言ふは、假益を假令と爲すの謂に非ず、たゞこれ其文句を取りて願名を呼ぶのみ、猶し關雖章と言ふがごときなり。今解して云く、假令の二字は若の字の緩なるなり、いふこゝろは、若し現前せずば正覺を取らざるなり。若の二字は誓の辭なり、必ず現するの義を成するなり」と『對問記』に云く「文相の當分に依れば餘願の若の字と同じ、又『六要』に依れば假益の義なり」と。『摘解』に云く「文の當分に就きて未熟の機に對すれば必ず現するの義を成す、佛意に就きて已熟の機に對すれば、自ら權假の義を含む。『口傳鈔』に「不定ノアヒダ、假令ノ二字ヲオカル、モシサモアリヌベクバトイヘルコ、ロナリ」と、云へるが如し」と。今謂く、『摘解』の説従ふべし。不與等の與とは二義あり。一に與とは爲なり、謂く、大衆の爲に、佛圍繞せらるゝなり、二に與とは共なり。謂く、佛大衆と共に行者を圍繞するなり、二義ある中、後義文に親し。

問。來迎は念佛の益なりや。諸行の益なりや。答。これ要所なり。今暫くこの義を述べん。凡そ今家の聖教の中、來迎を念佛の益とするものと、然らざるものとあり。先づ來迎を念佛の益となせるが如く見ゆる文を列擧すれば左の如し。

一、宋譯第十八願文(?)

- 二、易行品(廿)「若人願作佛、心念阿彌陀、應時方現身、是故我歸命、彼佛本願力。」
- 三、玄義分(三)「仰惟釋迦此方發遣、彌陀即彼國來迎、彼喚此遣豈容不去也。」
- 四、玄義分(廿九)「然報身兼化其來授手故爲與。」
- 五、定善義(廿八)「娑婆化主爲物故住想西方、安樂慈尊知情故則影臨東域。」
- 六、定善義(廿七)「衆生稱念即除多劫罪、命欲終時佛與聖衆自來迎接諸邪業繫無能碍者故名增上緣也。」
- 七、定善義(廿六)「從無量壽下至常來至此行人之所已來正明重舉能觀之人即蒙彌陀等三身護念之益。」
- 八、定善義(廿五)「二者如彌陀之意五眼圓照六通自在觀機可度者一念之中無前無後身心等赴三論開悟各益不同也。」
- 九、觀念法門(廿四)「第三十五願釋、彌陀接手菩薩扶身坐寶華上隨佛往生入佛大會證悟無生。」
- 十、和語燈には來迎を念佛の益とするの文枚舉に暇なし、一、二を示せば、一ノ五、二ノ四、二ノ十五等の如し。
- 十一、尊號眞像銘文(四)「マタマコトニ尋常ノトキヨリ、信ノナカラン人ハヒコロノ稱念ノ功ニヨリテ最後臨終ノトキハシメテ善知識ノス、メニアフテ信心ヲエントキ願力攝シテ往生ヲウ

ルモノモアルヘシトナリ、臨終ノ來迎ヲマツモノハカクノコトクナルヘシト(?)

十二、一念多念證文(三)「勝緣勝境トイフハ佛ヲモミタテマツリ、ヒカリヲモミ、異香ヲモカキ善知識ノス、メニモアハントオモヘトナリ。(?)」

十三、口傳鈔(廿)「假令ノ二字ヲハタトヒトヨムヘキナリ。タトヒトイフハアラマシナリ、非本願タル諸行ヲ修シテ往生ヲ怖求スル行人ヲモ佛大慈大悲御覽レハナタスシテ修諸功德ノナカノ稱名ヲヨトコロトシテ現シツクヘクハソノヒトノマヘニ現セントナリ」

十四、法華問答本(六)「坐禪三昧經ニイハク、極樂ノ教主彌陀尊、念佛ノモロノノ衆生ニ隨順シテ毎日千遍住處ニキタリタマフ、踊躍歡喜シタマフコトタトヘナシ」

十五、眞要鈔本(廿)「タ、一念ノ信心サダマルトキ、乃至シカルニ一期ノイノチスデニツキテイキタヘマナコトツルトキ、カネテ證得シツル往生ノコトハリコ、ニアラハレテ佛菩薩ノ相好ヲモ拜シ淨土ノ莊嚴ヲモミルナリ」

十六、曇鸞讚「六十有七トキイタリ、淨土ノ往生トゲタマフ、ソノトキ靈瑞不思議ニテ、一切道俗歸敬シキ」

十七、源空讚「本師源空ノヲハリニハ、光明紫雲ノゴトクナリ、音樂哀婉雅亮ニテ、異香ミギリニ映芳ス」

十八、蓮如上人遺徳記(註)「又諸佛菩薩ノ音樂ヲキ、奇麗妙華フリクタル事マノアタリ諸人コレヲ拜セリ。諸方ハ有情日域ノ門流來集シテ江河山谷ヲイハス群攀シテ不可思議ノ靈瑞ヲ見奉リ屈敬シ哽絶ス」

次に來迎を第十九願諸行の益なりとせるもの左の如し。

- 一、末燈鈔第一通「來迎ハ諸行往生ニアリ、自力ノ行者ナルガユヘニ臨終トイフコトハ諸行往生ノヒトニイフヘシ、イマタ眞實ノ信心ヲエサルカユヘナリ。」
- 二、執持鈔(七)「來迎ハ諸行往生ニアリ。自力ノ行者ナルカユヘニ臨終マツコト來迎タノムコトハ諸行往生ノヒトニイフヘシ眞實信心ノ行人ハ攝取不捨ノユヘニ正定聚ニ住ス、正定聚ニ住スルカユヘニカナラス滅度ニイタルカユヘニ臨終マツコトナシ、來迎タノムコトナシ」
- 三、口傳鈔(釋)「念佛往生ニハ臨終ノ善惡ヲ沙汰セス乃至諸行往生ノ機ハ臨終ヲ期シ來迎ヲマテスシテハ胎生邊地マテモムマルヘカラス」
- 四、本願鈔(註)「オホヨソ來迎ハ諸行往生ニアルヘシ彌陀ノ本願ニアラス。シカレハ來迎アルヘシト行者コレヲマツトモ不定ナルベシ」
- 五、眞要鈔(註)「來迎ハ諸行往生ニアリ、自力ノ行者ナルガ故ニ、臨終マツコト、來迎ヲタノムコトハ、諸行往生ノヒトニ云フベシ」

六、御文章一帖ノ二通「サレバコノ信ヲ獲タル位ヲ經ニハ即得往生住不退轉ト説キ釋ニハ一念發起入正定之聚トモ言ヘリ。コレ即チ來迎ノ談平生業成ノ義ナリ。」

七、御文章一帖ノ四通「抑モ親鸞聖人ノ一流ニ於テハ平生業成ノ儀ニシテ來迎ヲモ執セラレ候ハヌヨシ承リ及ビ候フハ如何ハンベルベキヤ」等。

上來の諸文を仔細に點檢するに必しも來迎の意義一定せず。『決擇編』には之を分類して次の如く四種とせり、「一に臨終始來、これ十九願の益なり、二に平生常來迎、これ常來至此行人之所の如し、三に彌陀の招喚に名く、これ玄義分の「彼國來迎」の如し。四に臨終顯現に名く、これ鸞空師等の祥瑞の如し、五に還來待迎、これ『唯信文意』(註)同(註)の釋の如し、此の如く五種ありと云へども、臨終始來を以て當位となす」と。蓋し然るべし、宜く上來の諸文一一に就きて其の何れに屬するやを檢すべし。

次に、來迎を念佛の益とするや、諸行の益とするやに就き、先哲の義を檢討すれば即ち左の如し。六要鈔第六に二義を以て釋す、即ち云く「一據顯現故、謂念佛人來迎已有、不能見至命終時方顯現耳(眞要鈔本註云々)。二方便說故、謂念佛人被報佛攝、夫來迎者實化佛事、報佛則不動無來迎義、而言來迎者、應一類期來迎迷情方便、是非實義(眞要鈔末註云々)」と。『樹心錄』に云く「これ十九、二十の益にして十八に通せず」と。惠雲師云く「三輩、小經の自力念佛

に猶ほ來迎あり、他力念佛云何ぞこれなからん。鸞空等の臨終の祥瑞の如き、見るべし。實を以て之を言へば、正く念佛の勝益にして、其諸行に之れあるは即ちこれ念佛の餘徳なり。然に『末燈鈔』等の中に、來迎は諸行に在りと云ふは蓋し二由あり。一に行者の期するに約するが故に、二に佛の始めて來るに約するが故に、念佛に言はざるにも亦二由あり、一に行者期せざるが故に二に唯これ顯現なるが故に」と。『述聞』は惠雲師の説を評して「有力にして精詳なり」と云々、更に自義を述べて云く「然に來迎義眞有り、假有り、三業を策修して臨終方に彼の迎接儀を感ず平生は則ち無し、此は是れ假なるものにして十九、二十兩願の所詮正に茲に在り、常來至等と云ふと雖も、彼は其の觀時を以て言ふ、弘願より望めば則ち實常に非ず、有つて無きが如し、弘願に在るものは眞の來迎と爲す。阿彌陀佛來迎の體と爲す。酬因の身、動を收めて靜と爲し、寂に即して常に照なり、斯を本願成就の報身如來と爲す、是故に正覺の舉體衆生界に向つて廻入して往生法とならざるは莫し、大悲招喚其の業用と爲す。序題門に云く彌陀即彼國來迎等と、攝取不捨を其の成益と約す、彼の三縁の如きは是れ其の別相、言は則ち會して増上縁中に出づるも、義を以て論すれば三縁總じてこれ來迎の徳用なり、これ攝取中の三縁の益の故に、『末燈鈔』等に諸行に對論して攝取不捨を其の因由と爲し、以て益を成ず、是故に體用と及び成益と唯一の來迎、即ちこれ他力と其名を異にするのみ。此の如く説くものは、十九、二十の兩願に似ず、斯を眞來

迎の義と爲す。眞假既に別なれば、眞を以て假を奪へば則ち假自ら泯じ、唯だ眞これ存す。十九願所説の來迎を念佛の益と爲すも亦會通するを得、宋譯の如きが故に、『末燈鈔』等來迎の名を以て且く諸行に屬し、念佛には無しと爲すに似たるものは、彼は執情に従つて、之を別つ、不得意の者、偏に終時、見聞する所あつて來迎と爲すが故に、蓋し夫れ終時見聞する所の事隱顯同じからず、並に眞假に通じ、皆これ佛の密意の致す所凡情を以て圖るべからず」と。『仰信錄』にも辨有り。見るべし。『扶擇篇』には法徳顯現の來迎は淺機を引くの巧説なりとす、即ち云く「攝取顯現を以て來迎と名くるものは引入淺機門の例にして、來迎を期する猶生の機に應じて來迎の名相を許すものなり、即ち、念佛は諸行と異なりて、平生には近縁の益あり、臨終には來迎引接し給ふと談するとき、諸行を捨て、念佛に入り、臨終を怖畏する意を除き、決信して安住して臨終を愛樂するに至る、恒願一切臨終時とはこの相なり、これ誘引淺機の施設なり。問。然らば三縁中の増上縁其他に來迎を談するものは淺機の自力念佛とするや。答。然らず、來迎を談するは始來外來と云ふにあらず、平生近縁等の現するをみるはやはり、弘願念佛なり、この念佛に顯現するの徳義を來迎と名くるものは淺機を引くの意なり。所勸の念佛を假と云ふにあらず、彼の三縁釋の如きは親近二縁を平生の益とし、増上縁を臨終の益とす。その實は三縁皆攝取不捨にして臨平に通するなり。然に臨平に三縁を分釋するものは照顯なること知るべし。故に増上縁既に平生の益

となれば、恒願一切臨終時の益も亦平生となる。故に「一多證文」にはこの文を引いて一念業成の證文とし給ふ。已に然らば三緣中の増上緣を以て來迎とするは猶生の機を引くの意味なり」と。
今謂く願文經説は但だ假門に就て來迎の益あり、弘願の益は常に攝取得生を以て定と爲す、知ぬ來迎はこれ要眞二門の益となす、宗祖局つて假益と爲す所以なり。若し夫れ終南吉水の念佛の益となすは攝取を以て來迎を奪ふのみ。知るべし。

悲華經等とは二に末經なり。文は彼の第五諸菩薩授記品に出づ。今大施品と云ふは蓋し暗記の失か。此文は來迎の所由を助顯す。謂く歡喜を生じ、障礙を離れ身を捨て、往生する等皆來迎に由る、以て弘願の平生業成に反顯す。『摘解』に云く「問。前五卷の中、『大經』の次に必ず漢、吳等の異譯を引く、今之を引かずして『悲華經』を引くは如何。答。漢、吳譯の中は一願の中に諸行念佛を並説するが故に、因願の中兼て成就を説くが故に」と。今謂く隨自意樂なり。會するを須ひず。

此願成就文等とは二に成就を指す。『三經往生文類』(六)に具に三輩の經文を引く、今引かざるものは奈何。『略讚』に云く「聖意測り難し、今試に解さば、三輩章中廣く捨家棄欲等の因行を説く、其の果相に至つては則ち但だ「七寶華中自然化生」等と説き、其の説相、眞土の相に濫す、當卷は化身土を明すを主と爲すが故に、顯著の文を引かんと欲す。化土の相をして分明ならしめん

が爲の故に、眞假混淆の文を引かず、但だ大途を指して成就文と言ふのみ」と。『摘解』に云く、「私に云く、『觀經』の文は長くして引くべからざるが故に、三輩の文も亦彼に共じて引かざるか」と。蓋し、祖意測り難し、更に考ふべし。三輩の説は佛意多含なり。雁門、吉水は心行の異ありと雖も、俱に第十八願の開説となす。今十九願成就と云ふは、『要集』の諸行往生門に「雙卷經三輩業亦不出此」とあるを承く。吉水の上亦此義なきに非ず、『選擇集』上(三行)に三輩九品開合の異なりと云ひ、大經釋の所明の如き、自ら第十九願成就と爲すの意なり。

問。『觀經』に准すれば三輩に亦隱顯有りや。答。『略讚』に二義を擧げて云く「古來二義有り。一義に云く、凡そ三經の中、觀小二經は方便が眞實を覆壓して説くが故に、隱顯釋を用ふ。下文の如し。『大經』の如きは顯露彰灼にして覆壓なし。立に眞實教と爲し、隱顯の釋を用ふ可からず。爾りと雖、三輩一章は三願相兼して多く方便に互る、隱顯釋を用ひざれば恐く消釋し難きこと有らん。況や三輩九品は開合の異に於ておや。『觀經』既に隱顯を用ふ、三輩豈に然らざらんや。其れ眞實教と言ふは黃卷朱軸の謂に非ず。今此の三輩は是れ『大經』中の『觀經』なり。隱顯を用ふるに至りて、何の妨か之れ有らん。(是)又一義に云く。『大經』は顯露彰灼にして、法として眞實を覆ふものなし。因願成就の説相、亦た眞實方便、分齊分明なり。信疑得失、優劣判然たり。何ぞ覆ふ所有りて隱顯を用ひると爲さんや。祖文中未だ曾つて、『大經』に於て、隱顯を用ふるものを

見ず。其れ三經の大綱隱顯有りと雖もと言ふは、三經合會の上に就て言を爲す。『大經』に隱顯有りと謂ふには非ず。是故に、今三輩に於て亦隱顯を用ふ可からざるなり。(二是)と。此の如く、二説ある中後義の隱顯なしと云ふを好しとす。今謂く、凡そ隱顯の目は、總じて一教の説相に就く。權實を覆ふが故に、實義顯れ難し、これを隱と爲す。實を覆ふの權、名けて顯説と爲す。偶々、實義を彰はさんと欲せば、『大經』を以て來照するを要す。これを隱顯と爲す。今は則ち然らず、三輩の文中、眞假を兼含すと雖も、一經の中、前後の所説を以て推檢すれば、是は假、是は眞、これは廢これ立と、知るを得るなり。この故に彼の隱顯の名を以て此眞假の義を判すべからず。善讓師更に問答を設けてこの義を詳にす。即ち云く、「問。下輩に若聞深法等と云ふはこれ『觀經』空中尊と同じ、何ぞ隱顯なしと云ふや。答。但だこれ從假入眞のみ。問。經に「應發」、「當發」と言ひて勸進するは此れ方便なるが故なり。何ぞ隱顯なしと云はんや。答。たゞ是れ願意を宣説するの言のみ、實に之を勸むるに非ず。猶し『擇集』に「當發自宗菩提心」と云ひ、下文に「應速入圓修至德眞門」等と云ふが如し。問。開の九品に既に隱顯あり、合の三輩に何ぞ之れなからんや。答。開合なりと雖も、説相同じからず、何ぞ必ず全く齊しからんや」と。見るべし。

又大經言等とは二に所入の土を明す。中に二有り一に道樹、二に講堂なり。『三經往生文類』(六)には、先づ第二十八願文を引き、次に此文を引く、見るべし。願文に少功德者と云ふは『小經』の説の

如く、即ち修諸功德の人にして諸行往生の機なり。眞佛土卷(三)に云く「良假佛土業因千差、土復應千差、是名方便化身土」と。千差の因に由つて千差の土を感ず。所感の佛土は優劣千差なり。其優なるは上品上生の如く、其劣なるは下品下生の如し。優劣異なりと雖も、化土に非ざるはなし。然に今此中に道樹、講堂の二種を擧ぐるものは且く二種に就て、諸相を准知せしむるなり。『六要鈔』(六)に云く「問。道場樹者既是極樂淨土道樹定是可報何屬化耶。答。此道場樹與佛身量不相應故。諸師各作種種異解。其中興師存佛身報、此道場樹爲化土義。又玄一師設三義。中初義同之。集主之意依此等義判屬化也」と。見るべし。道樹を明す中二段有り、初に道樹の相を明し、二に阿難等の下は見樹の益を明す。初の中、樹高等とは、高量、周圍、枝葉等、其量皆相應せず。即ち周圍五十由旬(一由旬は四十里なり)は二千里となる。若し高さの四百萬里に對すれば糸を舒べたるが如し。枝葉四布二十萬里も亦然り。これ云何が會通せん。今謂く、第二十八願は少功德者の所見なりと云ふ。修諸功德の人は各々修因同じからず。因已に同じからず、果豈に一ならんや。或は周圍を見るものあり、或は高量を見るものあり、或は枝葉を見るものあり、乃ち所感の果報に從つて、其所見も亦不同なり。此義を顯さんが爲に、此不應の量を説きて化相の一ならざることを示す。『對問』に云く「此中に、高量、周圍、枝葉の三あり。其量、皆相應せざるは各々其一を擧ぐ。若し高長の量に依らば周圍枝葉も亦其量に准すべし。若し周圍の量に依らば

高量、枝葉は其量に準ずべし。枝葉も亦然り。是の如く各々其一を説きて互相に准知せしめ、以て所見の差別を示す。彼不應の量以て一樹を成するに非ざるなり」と。知るべし。乃至とは經に一百三十六字あり、『三經往生文類』は則ち之を連引せり、今は則ち之を略す。『六要鈔』(六六)に云く、「繁故略之」と。柔遠師の『刪補聽記』に云く、「其文多く眞土に通ず、故に『百千萬色種々異變』と云ひ、又『一切莊嚴隨應而現』と云ふ、豈に數量に互るものならんや。又『其聲流布遍諸佛國』と云へば、この道樹は法界に周遍す、何ぞ四百萬里と云はんや。況や此道樹はこれ彌陀正覺の體なるをや。又『甚深法忍』と云へば下の三忍と同じからず、次第に三忍を説くは即ちこれ化相なり、三に即して一なるはこれ眞土の相なり、況や六根門に佛事を施作す、眞土の相に非ずして何れに名けんや。故に今は略省す」と、今云く、『六要』の説優れたり、眞に通ずるが故ならば『三經往生文類』を如何にせん。

阿難等とは見樹の益を明す。一者等とは次第して得る假益たることを示す。音響忍等とは諸師異解す、『略讚』に淨影の説を擧げて云く「淨影の云く、慧心理に安ず、これを名けて忍と爲す。忍の淺深差別に三あり。聲を尋ねて悟解し、聲を知つて響を知るを音響忍と名く、これ三地已還なり。詮を捨て、實に趣くを柔順忍と名く、これ四、五、六地なり。實を證して相を離るゝを無生法忍と名く七地已上これなり」と。『六要鈔』二末(三)に憬興の説を擧げて云く「尋樹音聲從風

而有、有而非實故得音響忍。柔者無乖角義、順者不違空義。悟境無性、不違於有而順空故云柔順忍。觀於諸法生絕四句故云無生忍」と。知るべし。威神力故等とは、威神力と本願力とは次での如くこれ佛の因果二力なり。満足願故等の四句は因中の別相なり。『述聞』に云く「此五種力は讚偈及び和讚の如きは意第十八願の因果と爲す。第二卷の中に憬興の釋を引きて『五會讚』の願力度生等を釋する意も亦相同じ。今の意は則ち別なり。謂く總じては則ち第十九願にして別しては則ち第二十八願力の義なるが故に、化土の所得なりと雖も、如來願力の恩に非ざることなきが故に」と。『對問記』に云く「威神力とは果力を言ひ、本願力とは因力を指す。満足等とは本願力を開き、其の不虛を顯す、此の二力亦權實二用を含む。今は權用の邊に約するなり」と。知るべし。乃至とは『六要』に云く「繁故且略」と。

又講堂等とは二に講堂を明す。上の道樹に准じ、少功德者の所見に約して取りて化土の相と爲す。直に經文に就かば、汎く眞假に通ず。故に鸞師は取りて眞土の相と爲す。今は化に通ずる邊に約す。『述聞』に和讚と今文とは講堂を化相となし、石壁は眞土の相と爲す、兩者何故に相違するやと問ひ。之を會して云く「集主の意は數量を越ゆるものを眞と爲す。假は則ち之に反して、數量に墮在す。經に道樹、講堂を説く、多く數量を見る。今の所引の如し。別して化と爲す所以なり。然に佛の知見する所を以てすれば則ち量、無量皆不可得なり、相即互入、喩へば帝網の如

し。須彌を芥子に入れ、毛孔に大海を納るゝこと亦唯だ尋常茶飯にして、奇と爲すに足らず、佛智を了する者、一たび超えて佛の境界に入れば、佛知見の如くならざるはなし。此中の數量皆不可得、即ちこれ無量なり。疑惑の人の如きは無量に於て箇々の量を認め、之を謂ひて實と爲す。實と爲せども、量、無量皆これ數量なり。集主は石壁の意を壞せず、第五卷に吳譯の經を引くが如し。石壁亦集主の意を存す、無明由在の衆生は數量を感ずる處に應ず。當に知る互に一邊を取りて、實相を彰はすなり」と。佳し。

對辨眞假得失

〔大意〕 引文の中二有り。一に直に諸行往生を顯して誘引の願意を示し、二に又言其胎生の下は眞假の得失を對辨して廢立の佛意を示す。初は上に竟りて、今は其の二なり。此中二有り、一に經說、二に光明寺等の下は師釋なり。已上の五文は直に方便の當分を顯し、已下の七文は廢立の意を示すなり。

經說引意

〔本文〕 又言其胎生者所處宮殿或百由旬乃至生彼國者不可稱計已上。

〔校異〕 (一)又言其胎生の文(大經下_三百九)。 (イ)是故彼國土の故の下經に於字有り。 (ロ)有七寶牢獄等の九字は所依の經は、別有七寶宮室種種莊嚴の十字に作る。 (ハ)牀張の牀、『明曆本』牀に作るは形誤、(ニ)若諸小王子の若の下經に有の字あり。 (ホ)輒内彼獄中の内、『寬永』『正保』二本は、町に作り、『明曆』『寬文』二本は、囚に作る。 (ヘ)疑惑佛智故生彼胎宮の智、『明曆』本は知に作る。又胎宮、經に宮殿に作る。

(二)如來會言の文(如來會下大正十一₁₀₀) (イ)隨於疑悔の隨、經に墮に作る。 (ロ)化生於導華中の導、經は蓮に作る。 (ハ)無因奉事等の點、は「無量壽佛ニ奉事スルニ因ナシ」と點する方穩かなり。 (ニ)皆爲昔緣の皆、『寬文本』は此に作るは形誤なり。 (ホ)如園苑宮殿之想の苑、經は苑に作る。 (ヘ)抄要『寬永』『正保』二本は抄出に作る。

(三)大經言の文(大經下_三百二) (イ)大經言の言の下、或墮宮胎に至るまで『報恩寺本』は脱落し、空白半紙餘あり。 (ロ)少行の少、經に小に作る。

(四)又言況餘の文(如來會下大正十一₁₀₀) (イ)不可稱計の稱、『寬永前本』及び『正保本』講に作るもの形誤。

〔細釋〕 經說の中二有り、一に正明、二に助顯なり。助顯の中三、一に唐譯、二に魏譯、三に唐譯なり。

又言其胎生等とは正依の文なり。正く眞假を對辨して廢立の佛意を示す。此中、化生を擧ぐるものは、胎生と對比して、方便に滯着する者をして、速に進んで弘願眞實に歸入せしめんと欲するなり。此正明の中自ら三段となる。一に胎生の相を明し、二に尗時慈氏の下は其の所由を示し三に彌勒當知其有の下は疑惑の失を結す。初に胎生とは喩に約して言ふ。彼の宮殿に處して、見佛聞法の事なきこと胎中に在るが如きを謂ふ。胎生と含華の同異云何と云ふに、『對問』に辨じて云く。「問ふ、胎生と含華と同異云何。答ふ、胎生含華とは體は一にして義は別なり。謂く、不見三寶は二經全く同じ。胎宮含華は唯これ内外なり。故に『如來會』に云く「彼諸衆生處華胎中猶如苑園宮殿之想」と。讚に云く「花はすなはちひらけねば、胎に處するにたとへたり」と、これ體一と爲すなり。然に二經の施設に約すれば其義各別なり。此經は誠疑の爲にして起り、『觀經』は攝機の爲にして設く、復た若し化土の相を論ずれば『觀經』を具なりと爲す。蓮華の開合、證果の遲速、品位の不同、見土の差別を一經に廣く説き、其相具悉せり。又此經の中の靈山の所現は、會衆の所見に應じて疑惑の失を示す、故に唯含華胎生を現じて以て其失を詳にす。『觀經』の中の華開已後猶ほ化土に處するの相の如きは隱没して現せず。皆胎生に屬す。所以はいかん。華開已後の諸相は或は廣門に同ず、若し其相を現せば、眞假混淆して大衆の眼見に何ぞ得失を辨せん。故に得失の辨じ易きに就て、但胎生を現じて疑惑の失を顯し、開後の諸相は存して論せず、若し具

さに其相を説かば、宜く『觀經』の如くなるべきなり」と、佳し。所由を示す中、初は慈氏の問、後は世尊の答なり。答の中、初は直明、二に譬如等は喩顯なり。直明の中二有り。初に正く胎生の相を明し、後に彌勒當知の下は重ねて胎化の別を示す。正明の中亦二有り。一に因を擧げて由を示し、二に果を擧げて結成す。『樹心錄』に云く「前に修諸功德と言ふはこれ十九願の機なり、後に修善本とはこれ二十願の機なり、影略して機を顯す」と。佳し。經文は本と十九、二十に通ず故に和讃に云く、「自力稱名ノヒトハミナ、如來ノ本願信ゼネバ、ウタガフツミノフカキユヘ、七寶ノ獄ニゾイマシムル」と。又云く「自力諸善ノヒトハミナ、佛智ノ不思議ヲウタガヘバ、自業自得ノ道理ニテ、七寶ノ獄ニゾイリニケル」と。知るべし。『三經往生文類』には、引きて二十願成就文と爲す。今は引きて十九願を顯し、以て胎生の失を判す。然に修習善本等を連引するものは、兼て眞門所入の土なることを顯す。故に眞門下に至りて略して之を引く。五智とは、初一はこれ總にして、後四はこれ別なり。別中、初二は離言絶慮を云ふ。深廣不測を不思議と名け、稱說不盡を不可稱と名く。後二は體用高廣を云ふ。凡聖善惡をして、連載して餘すことなきが故に大乘廣と云ふ、これ用徳の廣なり。十方三世に等しき者あることなし、故に無等最上と云ふ。これ體徳の高なり。總じて之を云はゞ、諸の衆生を攝して畢竟淨に入らしむ意なり。この無上佛智を信するを明信佛智と名け、之を疑ふを疑惑佛智と爲すなり。五百歳とは五智の五に對して且く

一數を擧ぐるのみ。常不見佛等とは古來二説あり。『仰信』に云く「不見三寶に古に二義有り。一に化土も亦隨分の三寶あり。『大經』下卷に講堂を説くこと及び『觀經』の九品はこれ其證なり。然に高祖の化土の見聞三寶を談せざるは、眞を以て化を奪ひて深く過失を誡めたまふなり。二に文の如く義を解す。五百歳中一向に三寶を見聞せず、『觀經』の九品も華胎に處する時は三寶を見聞せざるなり」と。『對問』は初義を取りて云く「業因千差なれば見土にも萬品あり。不見三寶とは其最劣なるものに約す。若し其勝れたるものにつかば、或は三寶を見聞する者あり。然りと雖も、三寶は皆眞實に非ず。故に之を眞土に望むれば奪つて不見に屬するも亦得たり。然に今は過失の重きに就て之を擧げ、亦自ら奪門の意を含み以て諸餘を該攝するなり」と。『對問』の説好し、乃至とは此中五たび乃至と云ふ、『述聞』に云く「初に化生を説くのを略す。今の所顯に非ざるが故に。次に胎生の過患を説くのを略す。上の所引を推して知り得べきが故に。次に譬説の後半を略す、前文に含蓄して、略するも亦足るが故に。次に無有刑罰等の四十一字を略す。亦上を推して知り得べきが故に、次に即得如意等の三十一言を略す。彼れ已に胎生に非ざるが故に」と。佳し。佛告彌勒譬如等とは二に喩顯なり、此中二、初に譬説、後に合法なり。合法の中亦二有り。初に處胎を明し、二に悔責を示す。本罪とは、疑惑佛智の罪を指す。疑惑を悔ひれば則ち自ら明信を成す、明信を以ての故に彼處を離れて、眞土に轉入するを得るなり。『仰信録』に唐譯を引き

て云く「唐譯に云く「彼幽繫時常思解脱、求諸親識居士宰官長者近臣、王之太子雖希出離終不從心、乃至刹帝利王心生歡喜方得解脱」と、今經は略して説かず、是に由つて之を言へば、輪王の王子を宮中に納るゝものは、慈悲方便して、その罪を改めしめんが爲なるのみ、故に王子深く自心を悔責すれば、輪王大に歡喜を生じて解脱を得しむ。此を以て法に合すれば、華胎の中に處して、三寶を見聞せざるものも亦佛の大悲なるのみ。胎生の行者佛の大悲を知りて深く自ら悔責すれば、從假入眞して眞土に轉入す。これは則ち果遂の願力の然らしむる所なり。讚に云く「信心の人におとらじと、疑心自力の行者も、如來大悲の恩をしり、稱名念佛はげむべし」と。又云く「佛智うたがふつみふかし、この心おもひしるならば、くゆる心をむねとして、佛智の不思議をたのむべし」と、此は則ち此經意に據りて、此土に約して知恩悔責を勸むるものなり」と。佳し。

如來會言等とは二に助顯なり、中に三文あり。初に唐譯なり。文を分ちて三節とす。一に正く胎生を明し、二に阿逸多の下は得失を分別し、三に佛告の下は重て胎生を詳にす。助顯に二意あり。一に因に約すれば、正依の中、「智慧勝故乃至皆無智慧」と云ふは未だ信疑の義たることを明にせず。然に今「因廣慧力」と云ふは即ち信心の智慧を示し、「昔緣疑悔」とは即ち信智なきことを顯すなり。二に果に約すれば、正依の中に「胎宮」と云ふは、其義未だ詳かならず。今は華胎の

中に處すること、宮殿の中に處するが如き想をなすことを顯すなり。墮於等とは疑悔して、攝取を領せず。是を以て策修して往生を祈求す故に積集等と云ふ。佛智等とは正依の五を開きて六と爲す。或は云く、佛智は同なり、不思議智、不可稱智は今の不思議智に當り、大乘廣智は今の普徧智、廣大智に當り、無等無倫最上勝智は今の無等智、威德智に當ると。『述聞』に云く「五や六や唯これ縁に赴きて異説するものなり。其實は無量なり、應に仰信すべし、局執して取捨を生ずること勿れ一と。『述聞』の説好し。於自善根等とは之を解すに異説有り、一義に云く、阿彌陀佛即是其行なるが故に、彌陀に歸命すれば、名號の全體即ち行者の自善と爲る。然に疑心の善人は未だ此義を辨せず、故に不能生信と云ふと。一義に云く、自ら善根を修すと雖も、往業の成不を知らず、猶豫して決せず、不定の想を作すを不能生信と云ふと、又一義に云く、於自等とは、自力を棄捨して無有出離之縁と深信すること能はざるを不能生信と云ふと。三義ある中、第三を好しとす。

阿逸多等とは胎化を分別す。下劣之輩とは胎生の人を指す。皆智慧なきが故なり。無因等とは僧朗師云く「無因等とは、直に文相に就かば宜しく奉事より無因に轉すべし。然に、今點の如く轉する祖意を按ずるに、因とは明信佛智を指す。即ち、今正因なくして無量壽佛に奉持するが故に、無量壽佛に奉持すと雖も、眞の奉持を成せざるなり」と。

佛告彌勒等とは重て胎生を詳にす。謂く、胎生の人の修因得果の相を詳にするなり。由聞等とは、彼國に生ずる因は名號に依ることを明すなり。名號に依ると雖も、而も自力を捨てざるが故に、本願成就の聞名信喜と其義異なるなり。故に蓮華の中に生じて、出現することを得ざるなり。

大經等とは已下に正依及び唐譯の二文を引く、二文の引意に就き異説有り。一義に云く、上は修諸功德の人を舉げて、疑惑の失を示し、今は修諸功德はこれ少功徳なりと顯すと。一義に云く、上文得失を判する中に四の相對あり、云く、大小、多少、勝劣、信疑なり、行卷に機教を明す中の如し。大小等の三は上に在つて已に顯れ、多少は則ち隱る、故に今二文を引きて上の多少の一對を助顯すと。一義に云く、已下の二文は諸行往生の人は其數多きことを助顯すと、此の如く三義ある中、第一、第二義は具略の相違あるも、大旨は同じ、今云く。修諸功德は即ち少功徳、少善根なることを助顯するなり。經文當分に果して此意味有りや否やに就ては『摘解』に辨有り、往見せよ。

師 釋

〔本文〕 光明寺釋云含華未出乃至故經別說實不相違也已上。略抄。

〔校異〕 (一)定善義(廿三)の文。(イ)或墮宮胎の墮、「明曆本」隨に作るもの形誤。

(二)述文賛下(大正十一¹⁶⁹) (イ)由疑佛智の由の下、本文此の字あり、(ロ)宜之重捨の重、本文は應に作る。

(三)往生要集下末(廿七)の文。(イ)此經下文言の言、『寛永』『明曆』『正保』『寛文』の四本は云に作る。

〔大意〕 眞假の得失を對辨する中二有り。一に經說二に師釋なり。一は上に竟りて、今は其の師釋なり。此中亦二有り。一に終南二に横川なり。

〔細釋〕 光明寺釋等とは初に終南なり。此中二有り、一に正く終南を引き、二に更に他師を擧ぐ。乃ち憬興を以て終南に係屬し、以て助證と爲す、行文類の如し。釋云等とは『定善義』(廿七)の實地觀釋心得無疑の文なり。『大經』所說の邊地胎宮を以て『觀經』所說の含華に合するなり。二箇の或字は所說の名異なることを示すのみ。和讃に云く「本願疑惑ノ行者ニハ、含華未出ノ人モアリ、或生邊地トキラヒツ、或墮宮胎トステラル、」と即ち此意なり。今疏文を引きて九品と胎生と同一の化土なるは、私の今案に非ざることを助顯したまふなり。

憬興等とは、更に他師を引きて邊地と胎生とは名は異にして義は同なることを顯す。又他師も猶ほ胎生を厭捨すべきを誡むることを擧げ、以て得失を對辨するの意を示す。

首楞嚴院等とは二に横川なり。上來胎化段の經文を引くは、但に直釋中の疑城胎宮に應ずるのみならず、亦眞假得失を示す。今『要集』の文を引くは、但に云ふ所の「如菩薩處胎經懈慢界」の文に應ずるのみならず、亦二土を判ずるの本を示す。今文は『集』の下末大門第十問答料簡の中の第二往生階位の文なり。首楞嚴院とは和尚所住の處なり。『要集良忠記』(淨全十五¹⁷⁰)に云く「比叡山總名延曆寺中有三院、寺内別處名之爲院、此名三塔、東塔名止觀院、西塔名寶幢院、横川名楞嚴院」と。知るべし。此中に横川に依りて感禪師を引き、直に『羣疑論』に依らざるは、『選擇集』に「師資之釋其相違甚多」とあるの意なり。然りと雖も、終南を師とし、亦聞く所有り、『羣疑』の作は玉石相混じ、以て取捨すべきの書なり。而して此一段の如きは、美玉の沙石中に在るものなり。故に横川大師之に依つて報化二土を分別す。大師の釋功豈に偉ならずや。『羣疑論』の次に『觀經』を引きて廣く往生を勸む、故に『處胎經』を以て准難するなり、問の意知るべし。

答群疑論等とは次に答なり。中に於て、引善導和尚前文とは、『集』の中に前に『禮讚』前序の專雜の得失を明す文を引く。今は彼文を指して前文と爲す。然に『羣疑論』は『禮讚』の前後の文を取意して「雜修之者萬不一生、專修之人千無一失」と云へり。又自助成云等とは『摘解』に云く「此に二の助成あり。一に執心牢不の經文を引いて、終南の專雜の義を助けて往生得不の由を成じ、以て處胎經の時有一人に會するなり。

又報等とは、二に報化多少の義を明して、終南の「希得一二三五」に合し、以て處胎の「時有一

人」に會するなり。若し初の助成の意に據れば、上に凡夫往生といふは、三信專修の人に就き、『處胎經』に不能前進と言ふは、三不雜修の人に就く、俱に眞報土に向つて之を言ふものなり。故に此義に依れば、九品往生はこれ眞報土にして、我祖の隱彰の義に合す。又後の助成の意に依れば、報化二土即ち勝劣の異なるが故に、其報土は生じ難く、化土は生じ易きなり。此義に據れば九品の機皆往生するはこれ化土なるが故に、『處胎經』の「時有一人」はこれ眞土なるが故にの義成す乃ち我祖の顯說の義に合するなり」と。知るべし。經別說とは『觀經』と異なるを謂ふ。不相違とは、二經其意、實は相違せざるを云ふなり。

勸 誠

〔本文〕 余者、夫按楞嚴和尚解義、念佛證據門中、第十八願者、顯開別願中之別願、觀經定散諸機者勸勵極重惡人唯稱彌陀也。濁世道俗、善自思量已能也。應知。

〔校異〕 なし。

〔大意〕 第十九願を釋する中三有り。一に直明、二に引文、三に勸誠なり。一、二は上に竟りて

今は其の勸誠なり。

〔細釋〕 上來の引文は、初は直に方便を顯し、後は更に廢立を示す。意は報化二土を分別し、以て假を捨て眞に入らしむるに在り。故に今終歸に就て道俗を勸誠す。然に二土を判ずるは楞嚴を以て指南と爲す。故に楞嚴の解義に就て、遠く上來の所明を承け、以て結示勸誠するものなり。念佛證據門中とは此門中(集下本三)に十文を引く中、第二已下の三文は集主の本意を開顯するものなり。今彼の第三四の文に據りて、要弘誠勸の意を述ぶるなり、第十八願等とは、『述聞』に云く、「別中の別とは、別とは言、通に對す。通とは自力法にして、他の十二、五百の願等の如し。別とは他方法にして、即ち彌陀佛の四十八願なり。復た別と云ふは、意、別中に於て更に通別を分つ。通とは十九、二十等の願の如く、未だ甚しく、自力法と殊異せざるなり。第十八願は超世無上にして、絶えて常通と相似せざるが故に、此言は一實本願を顯定するなり」と。佳し。觀經等とは、『觀經』に就て、衆機を勸勵するなり。初の一句は、定散自力の機を擧げ、勸勵とは、勸めて、弘願念佛に歸せしむるなり。『六要鈔』卷六(符)に云く「此自解意專明定散諸善之業非佛願故不生報土而說諸善是爲念佛三昧方便」と。見るべし。極重惡人とは九品最下の機なり。『述聞』に云く「定散諸機を、最下と爲すは、一機と爲すが故なり。一機と爲すものは、定散を亡するが故なり、定散を亡するものは、自力を捨つるが故に」と。佳し。

唯稱等とは、即ち一實の法なり。第十八願を別中の別と爲すものは、念佛の一法は諸餘を超絶

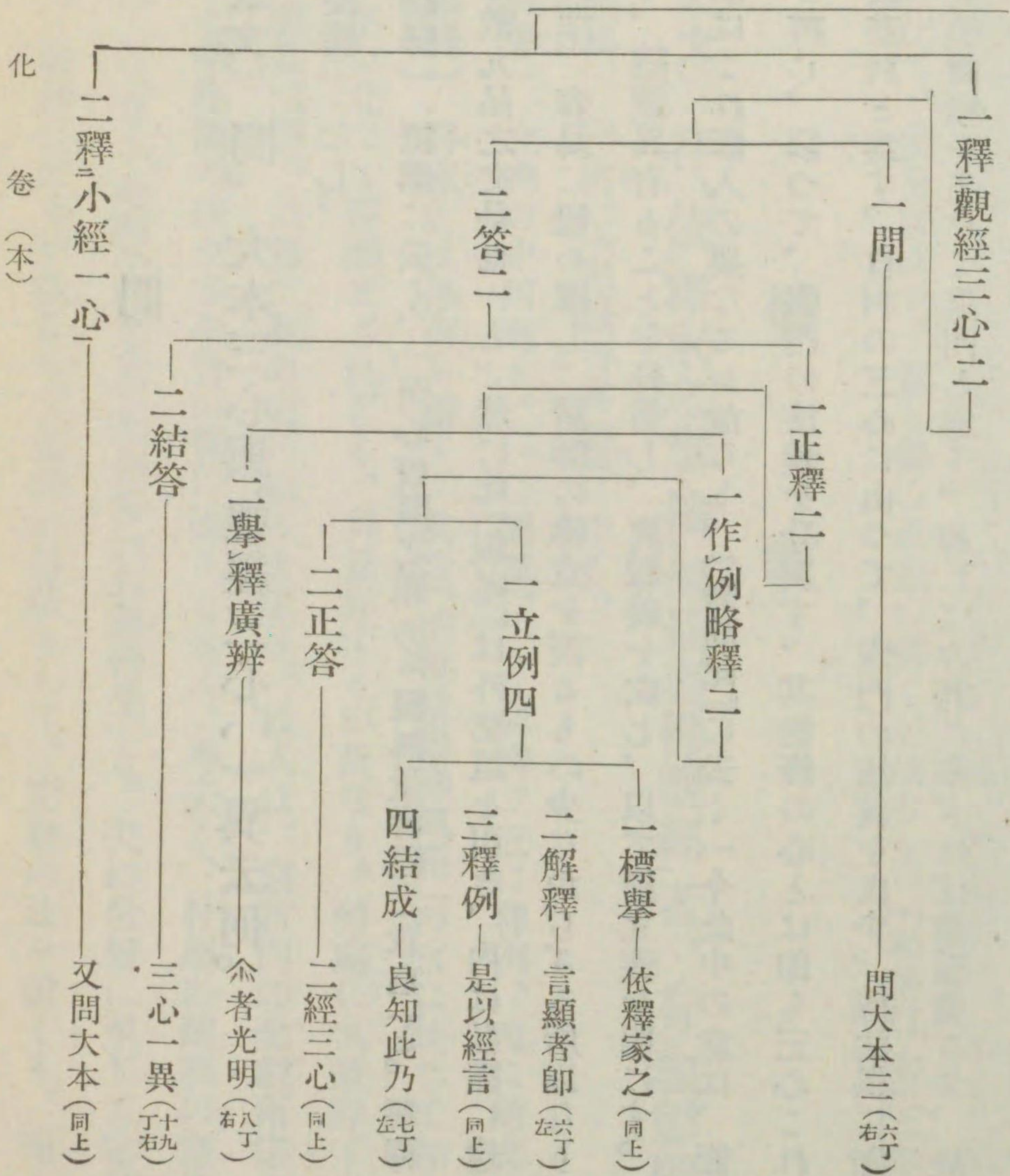
す。即ち法に約して念佛を立するなり。定散の機を極重悪人と云ふは、三福を善と謂ふを許さず諸機當に念佛に歸す。即ち機に約して諸行を廢するなり。廢立の義成して眞實方に顯る。楞嚴の本意は唯此に在り。古人或は勸勵の言あるを以て『觀經』顯說の念佛と爲し、或は、臨平に約して隱顯を分つ。『摘解』に評して云く「縱令報恩の念佛たりとも、行者の能修に就いて策勵を言ふときは或は濫あり、たゞ能教者の獎勵に就かば妨なきか。今の文は即ちその意なり。此文を以て眞門念佛を勸むると爲すもの領し難し、上來の引文は皆自力を捨て、他力に歸せしむるに在り。今の御釋に至つて、何ぞ自力念佛を勸めんや。(定散の人を弘願に入れと勸勵したまふなり、弘願に入りし者に念佛を勵めよとのたまふには非ず)、下の文に應速入圓修至德眞門等と云ふは、彼は方に眞門當分の教義を釋せんとするが故なり。今文の、上來の引文を結んで、捨歸せしむるものと異れり」と。知るべし。濁世道俗等とは言を『要集』の序に取る。彼文に集主、既に「如予頑魯之者豈敢矣」と言ふ。今此意に據つて時衆を教誡し、當に己が分を顧みて、弘願他力に歸せよと勸誡したまふなり。

釋二經隱顯

〔大意〕 別して二願を釋する中三有り。一に第十九願を釋し、二に二經の隱顯を釋し、三に第二十願を釋す。初は上に竟りて、今は其の二なり。

この中二有り、一に觀經の三心を釋し、二に又問大本の下(廿七)は小經の一心を釋す。初の中二一に問、二に答なり、一段の分科左の如し。

釋二經隱顯二



問

〔本文〕 問。大本三心與觀經三心、一異云何。

〔校異〕 なし。

〔細釋〕 標舉に云く、「至心發願之願乃至觀無量壽經之意也」と。解釋に云く「此願成就者即觀經定散九品之文是也」と。然に此『觀經』は外聖道を引き、内は弘願に達せしむるものにして、密意甚深、容易に曉め難し。諸師の佛意を誤るもの少なからざる所以なり。乃ち今楷定の釋意に依つて、隱顯異有ることを料簡し、真假義を成じ、以て廢立義を明にす。其の特に三心に就くものは信はこれ修入の要なるが故なり。『對問記』に云く「今此中の意は、能修の心に依つて、真假の別を辨じ、以つて、假門の法義を分別す。其能修の心とは即ち三心これなり。三心の一異は乃ち真假差別と爲す。自利の三心に由つて、假門の法義を成す。機法俱に漸なり。名けて要門となす。教頓機漸を名けて眞門と爲す。若し二力判に非ざれば簡濫盡きす、故に三心一異を辨ずる中、廣く假門の教義を攝して、二力異有るが故に真假別と爲すことを顯す。是れ今卷の體製なり」と。佳し。『御鈔』下(三)に云く「按觀經三心往生者是則諸機自力各別之三心也。爲歸大經三信也、勸誘諸機欲使通入三信也」と。和讀に云く「定散諸機各別ノ、自力ノ三心ヒルガヘシ、如來利

他ノ信心ニ、通入セントネガフベシ」と。實の權中にあるを顯明せんと欲せば、權を破し、實を顯し、權を捨て、實を取るを要す。即ち自利の三心を離れて利他の一心に歸す。これを佛の正意と爲し、之を今の一段の要と爲す。『聚鈔』(六)亦た問答有り。而して問は今と同じ。答は一のみを云ひて、異を言はず、蓋し佛の正意に就くが故なり。『和語燈』第三卷(三)の意亦同じ。

標 舉

〔本文〕 答、依釋家之意按無量壽佛觀經者、有顯彰隱密義。

〔校異〕 ①密、『報恩寺本』蜜に作る。

〔大意〕 立例の中四有り。一に標舉、二に解釋、三に釋例、四に結成なり。今は初の標舉なり。

〔細釋〕 釋家とは終南を指す。次の「按無量壽佛觀經」の言に映じて知るべきが故に。意とは疏主四字を立て、釋顯せざれども、其意存するが故なり。何處に其意存するやと云ふに或人は序題門の要弘二門、二尊二教の意に依ると云ひ、或人は、宗旨門の念觀兩宗の意に依ると云ひ、或人は第七華座觀の住立空中尊の釋に依ると云ふ。今云く、付屬の疏釋の意に依るなり。第九觀疏(定持)に云く「此經定散文中唯標專念名號得生」と。夫れ付屬に至りて定散を廢するは佛意實に始より、念佛に在るが故なり。是故に熾然として、定散の法を説くも、而も佛の本願遍く其中に在り

喩へば海水の地中に潜入するが如く、所としてあらざることなし。『對問記』に云く「釋家に依つて經意を案するに、經に隱顯の義あるを知る。終南大師の『觀經』を釋するや、要弘二門を分別し、念觀兩宗を辨立し、以て一經廢立の義意を釋顯す。今此の隱顯の判は、彼の廢立義に依つて立つ彼の廢立義は此の隱顯判に依つて成る。謂く夫れ定散權門暫用の處に即ち還廢の意存す。弘願念佛の未立の前に、既に能立の意を含む。廢立の意始終を貫通す。是故に疏中處々に其義を發揮す密意に據つて顯文を釋し、以て廢立の正意を彰す、隱顯の義此に於て立つ」と。知るべし。

顯彰隱密とは、先づ文の依據如何と云ふに、或人は、『序分義』(廿七)に「問曰夫人奉食乃至具顯夫人奉食之事」とあるより顯の字を取り、次に「牢城事還彰露」とあるより彰の字を取り、次に「言密者望門家述夫人意」とあるより密の字を取り、次に「無由相隱」とあるより隱の字を取ると云へり。又或人は云く、必しも、一所の文に依據を求むるの要なし。處々に散在せるものより四字を集成せられたるものならん。即ち『序分義』(廿七)に「隱顯隨機望存化益」と云ひ、又『定善義』(廿八)に「二尊許應無異。直以隱顯有殊」とあるに依り、隱顯の二字を取り、又『玄義分』釋名門(四)に說の字を釋して「隱彰有異」と云ひ、又序題門に「顯彰別意弘願」とあるより彰の字を取りたまひしものならんと云ふ。『述聞』に諸說を擧げ、而る後に云く「四字は本とこれ離散して諸文に在り、集主一聚して以て義目と爲す。其れ惟た言を取る。意は必しも彼と同じからず。諸家辨せずして力

めて同を語る。強會せざらんと欲して得べけんや」と。佳し。

次にこの四字の字訓を述べれば、隱とは玉篇に「不見也、匿也」と。字彙に「蔽也、私也、微也」と。彰とは玉篇に「明也、文章也」と。字彙に「著也」と。顯とは玉篇に「光也、見也、明也、著也」と。密とは字彙に「祕也、稠也」と。知るべし。

次に此四字の義を釋するに古來多岐一定せず。今其の五、三を紹介せん。

月筌師云く、「隱顯とは具に顯彰隱密と云ふ。密の言は顯に按し、彰の言は隱に屬す。顯密と云ふは、顯とは言詮の上に顯れたるものを云ひ、密とは其の言詮が盡理に非ざるを云ふ。凡そ密意といふは皆不盡理をいふが故なり。隱彰とは、隱とは、文の隱れたるを云ひ、彰とは一經の祕奥の義、彰はれたるを云ふ。若し隱密を合して一義目となせば頗る繁重となりて、善き造語に非ざるなり」と。

僧叡師は月筌師の説を評して云く、「筌の二義と爲すは大に文義に順ず。解釋の中に「顯義」と云ひ「隱彰義」と云ふは、乃ち是れ二義にして、三四等に非ず。既に隱彰といふ、其密は顯に屬して顯密と云ふべし。此は即ち意密にして、密意に非ず、闍王意密の問と云ふが如し。乃ち顯と隱とは文に在りて法を分つ言なり。定散は文にあらはれ、弘願は文に潛むが故に、密と彰とは義の權實を判す。密は覆相を云ひ、其本心に非ざる方便の語なり。密に對して彰といふは、即ち灼々と

して佛意を餘すことなきを謂ふ。即ち眞實の義なり。而も文の中に顯密と云はざるものは、且く稱呼の便に従ふのみ。然に第九觀の攝取念佛の説等は、弘願にして文に見はるゝものなり。既に文に見れたれば故らに解するを須ひず。喩へば、諸管鑰は鎖あるを發く所以にして、其鎖なきは鑰を用ひざるが如きなり。乃ち顯と彰とを牒するは意互に顯すに在り」と。善讓師は四の理由を擧げて此説を難せり。即ち云く、「顯密、隱彰の二義とすること恐く、祖意に非じ。何者、密を限つて顯に屬すること祖文に合せず。即ち、言顯者と牒し、即是顯義也と結す。說者の如くば宜しく即是顯密義也と結すべし(是二)。既に顯彰隱密と云ふ、密は限つて顯に屬するに非ずして前の顯彰隱の三に通ずるものと云ふべし(是三)。又義は、顯密、隱彰の二義なれども、今は言便に従つて顯彰隱密と云ふと會通す。若し然れば釋義に至つて、顯密之義也と結びたりとて稱呼の便宜として差支へなきに非ずや(是三)。又住立尊及び攝取不捨の文は釋例の外なりと云へば、この釋例は經文を洩すの失あるに非ずや(是四)」と。

法霖師は三義又は四義を用ふ。即ち意の云く、先づ三義と見るは、一に顯の義、二に彰の義、三に隱密の義にして密を隱に附す。顯とは文に顯れたる方便義を云ひ、彰とは第七觀の住立尊、或は第九觀の光明遍照等の如き、定散文中に顯はれたる弘願彰露の文をいふ。隱密とは、文の裏に隱れたる弘願義をいふ。次に四義とは、一に顯とは、顯文定散を云ひ、二に彰とは弘願の文に

彰はれたるを云ひ、三に隱とは弘願の文に隱れたるを云ひ、四に密とは、二尊に通ず。彌陀は弘願を顯彰し、釋迦は定散を弘開す、夫が二佛互に密意なり。即ち釋迦が要門を説くには弘願を密とし、彌陀が弘願を説くには釋迦所説の要門を密とす、と云へり。

柔遠師云く「顯とは謂く、經文の顯説にして盛に二善を説く是れなり。隱とは隱覆を義と爲す謂く、弘願を文中に隱覆して定散之を覆ふと雖も、弘願隱れて其中に在り、是を隱と云ふ。彰とは文中に隱ると雖も、事端還つて彰る、これを彰と云ふ(住立空中攝取不捨の如き是なり)。其隱を知るは彰に由つて之を知るが故に且く之を分つと雖も、其趣は終に一なり。たゞ眞實を隱すと眞實の端を彰すとのみ、其體は唯一なり。故に下に合して「隱彰義」と云ふ。密の一は祖文に釋なし隱彰顯を明す中に、密は其中に在り。二教且く途を異にすと雖も、其趣く所は一なり。本佛の密意は是れ一なるを以てなり、此を「佛密意弘深」と云ふ」と。

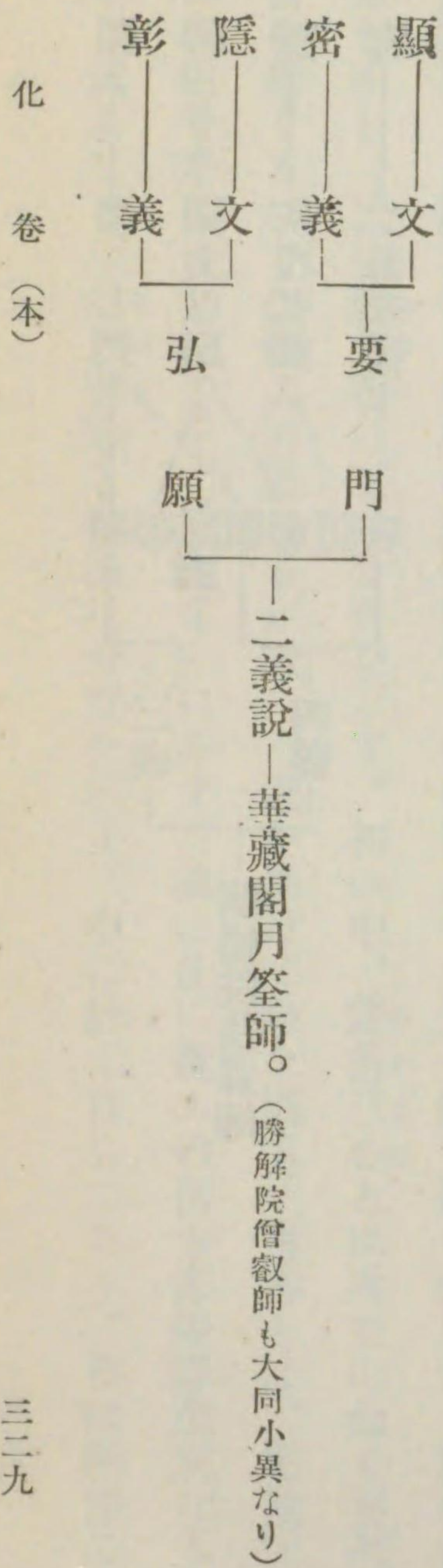
道隱師云く「顯彰はもと是れ同訓にして分つ可らず。今家は分つて二と爲す。定散を詮する文を取りて顯説と爲し、弘願を詮するの文を彰と爲す。其弘願を詮する文なくして、顯詮の定散中に隱覆する所の弘願を隱の義と爲す。能詮の文なし、故に「定散文中唯標專念」と云ふ。弘願要門の能詮相重なるものありて、弘願の能詮下に在りて、要門の能詮上に重なる。是を隱彰の義と爲す。次下所引の「以佛力故見彼國土」の文の如きは釋迦佛力を顯詮と爲し、彌陀佛力を彰詮と爲す

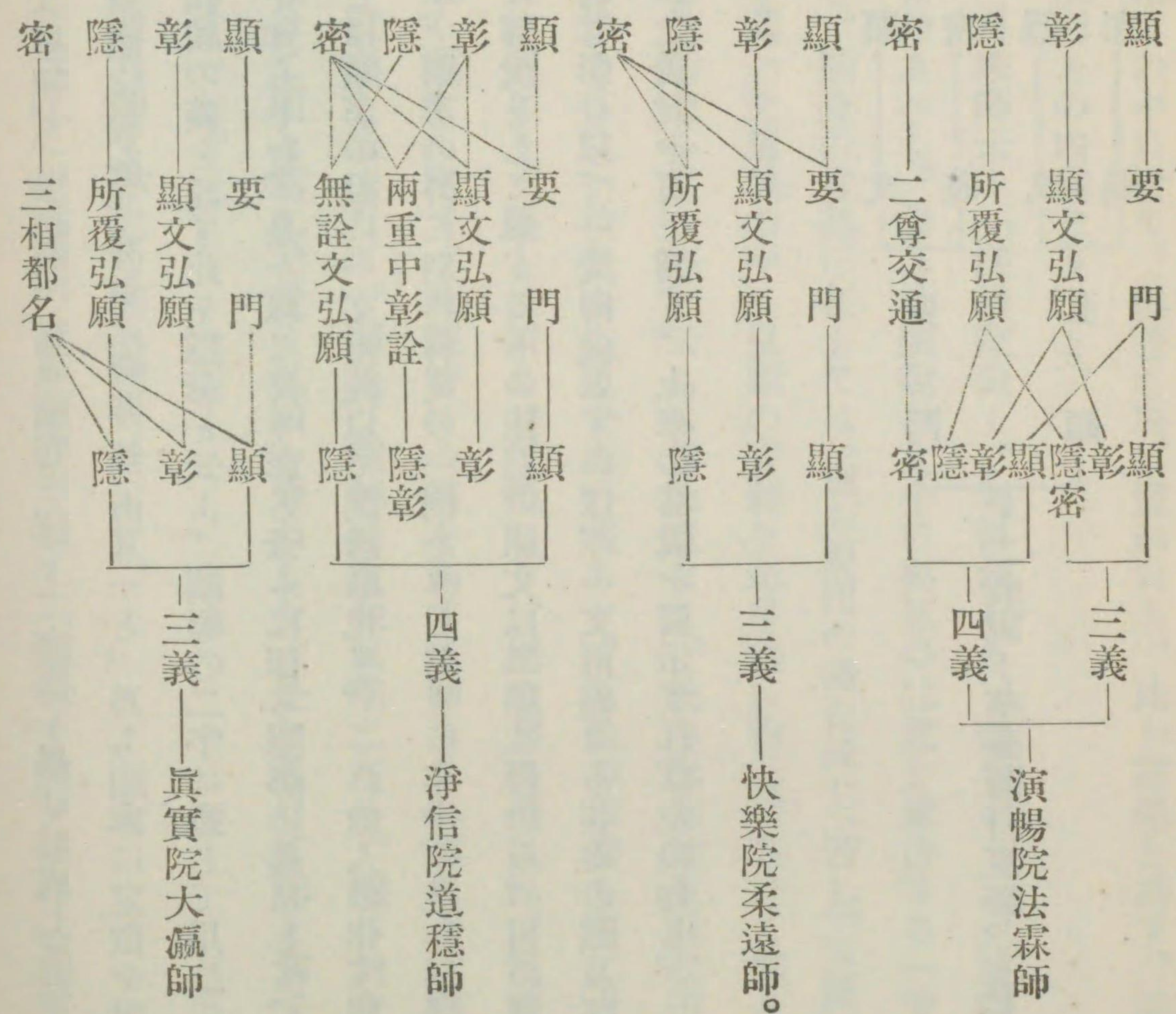
兩重の中に於て、彰詮の義は隠れたり、此を隱彰と爲す、故に具さに之を言へば、顯と隱と彰と隱彰との四義なり」と。

月珠師云く「深諦院云く、判目四有り、義相則ち三、法體二有り、旨歸唯一つと。善し、顯とは知るべし。彰とは顯説の文中に要弘の二意を兼含する一文兩義なるものこれなり。是を以て若し、顯詮の當義に在りては、則ち要門の義を成じ、若し『大經』より照せば方に弘願の實義を見ず、今其一文兩義の中に弘願の實義を彰す邊に約し、名けて彰と爲すなり。下の十三文例の中に「言如是凡夫心想」等と云ふは皆此意なり。彼の念佛衆生攝取不捨の如きは、若し顯説に准すれば、念佛の言は一往觀念に通ずるの義あり。下品の念佛も亦二力の別あり。要弘の二義を兼含するは皆此例なり。隱とは謂く、隱覆なり、權の爲に覆はれ、實體彰れざるを隱と云ふ。隱に別文なし遍く顯文に附す。此隱時に一班を露すは即ちこれ彰なり。隱と彰とは唯これ一法なるが故に合して隱彰と云ふなり。顯及び隱彰は文相は唯二なり。隱に別文なきが故に、唯要門を詮するを之を名けて顯と爲し、説に弘願を兼ねるを、是を名けて彰と爲す。顯の中に隠れて含むを名けて隱と爲す」と。

圓月師も亦之に同じ。

『摘解』に惠海師の説を擧げて云く「師云くたゞこれ二義なり。謂く、顯と彰とは祖文に見るべきが如し。『六要』は廣韻等に依りて字訓を擧げ結成して云く「是故顯屬分明顯示之義、彰字聊屬隱字義歟。分別之釋非無由耳」と。乃ち顯露に定散を説くを顯と云ひ、其顯文即ち亦幽微に弘願の義を詮す此を隱彰と云ふ。顯彰の二字は通じて用ひて分ち難し、故に隱の字を冠して其別を知らしむ。是を以てたゞ彰と云ふは即ち隱彰の義にして、たゞ隱といふも亦隱彰の義なり。密とは顯彰の説に一文兩義以て調誘攝化す。これ餘人の作す能はざるの善巧なるが故に謂て密と爲す。顯彰の外に別に釋文の一例ありと爲すに非ず。是れ別釋なき所以なり」と。今謂く、『摘解』に師説として擧ぐるもの佳し。祖文は二牒二釋のみ。何の見る所ありてか、隱と彰とを分たん。若し彰を以て一文兩義とすれば、一文兩義ならざるの顯及び隱は祖文何處に在りや。故に顯と彰の二義説を可と爲す。上來の諸説を圖示すれば左の如し。





解釋

〔本文〕言顯者即顯定散諸善、開三輩三心。然二善三福非報土眞因、諸機三心自利各別而非利他一心。如來異方便、忻慕淨土善根、是此經之意。即顯義也。〔釋顯〕言彰者、彰如來弘願演暢利他通入一心、緣達多闍世惡逆彰釋迦微咲素懷因章提別選正意開闡彌陀大悲本願、斯乃此經隱彰義也。〔釋彰〕。

〔校異〕○章、『寬文本』違に作るもの形誤。

〔大意〕立例の中第二の解釋なり。即ち初に顯を釋し、次に彰を釋するなり。

〔細釋〕言顯者等とは初に顯を釋す。中に三あり、云く牒、釋、結なり。釋の中二有り。一に顯相を明し、二に然二善の下は分齊を示す。初の中、諸善三心とは次での如く要門の行信なり。行信を擧ぐるはこれ修入の要なるが故に、之を擧げて餘を攝す。諸善とは、定散同じく機に隨つて其修相千差なるが故なり。行既に一に非ず、故に此に従ふの信も亦優降萬別なり。今は總じて三輩と云ふなり。然二善等とは後に分齊を示す。中に於て自ら二あり、初は所詮の法義に就て示し

後は能詮の佛意に就て示す。二善等とは上の定散諸善の句に應じて行の非を示す。二善三福は總別並べ擧ぐ、別して三福を擧ぐるは、意念佛を簡ぶなり。諸機等とは上の三輩三心の句に應じて心の非を顯す。自利々他は自力他力の異稱なり。各別とは之を解するに二義有り、或が云く、自力に由るが故に、十は即ち十様なり、故に各別と云ふと。或が云く、三心別發なるが故に各別といふと。初義は諸機の言に應じ、後義は次の利他の一心に對す。一心とは本願の三心なり。『勸章』に云く「三信トハイヘドモ、タゞ行者歸命ノ一心ナリ」と。

如來等とは能詮の佛意に就て顯説の分齊を示す。異方便とは經(經)に云く「諸佛如來有異方便」と、彼は定善を指す。故に『玄義』(玄義)に云く「日想水想氷想乃至十三觀已來盡名異方便」と。然れ共義自ら散善に通ず。故に『般舟讚』に云く「定散俱廻入寶國、即是如來異方便」と。今は即ち云何。『頂戴錄』に云く「異方便とは其二義あり。『觀經』所説の定散二善は、淨土に轉向する方便にして、聖道の通方便に非ざれば、之を簡んで異方便と云ふ(是)こ。此定散二善は第十九願所誓の修諸功德なり、茲に因つて方便の善なりと雖も、遂に其機をして第十八願に流入せしむるの方便なり、故に異方便と名く(是)こ」と。この二義は『楷定記』の説に本づくものならん。即ち『玄義分記』十(西六195)に云く「異謂別異義、此又二義、一云異即方便、今經定散異通定散名之爲異故。二云異之方便、異名別願別願之門名異方便」と。知るべし。『述聞』は『法華文句』に准解して云く「今謂く『法華

文句』十二に云く、正因佛性は即ち第一義なり。若し圓妙正觀を用ひば此即ち實相即方便にして名けて異と爲さず。若し七方便觀を用ひて第一義を助顯せば異の方便と名く、彼は第一義に非ざるを以て異と爲す。彼に准じて此を解せば、佛の願意に非ざるを異と謂ふ、異即方便を異の方便と名くるなり。斯を正義と爲す」と。今謂く『述聞』の説佳し。今の文意は顯説の法を貶するに在り、通途に望めて要門の法を褒むるは今の所用に非ざるが故なり。忻慕とは施設の一門、人をしつて望を懸けしむるの謂にして、稱實の法に非ざることを顯すなり。是此經等とは結文なり。

言彰等とは二に彰を釋す。この中、亦、牒、釋、結有り。釋中、古老異解す。『摘解』に出すが如し。今謂く、初は彰相を明し、後に緣達の下は分齊を示す。乃ちこれ、直に正宗に就て、幽隱に弘願の行信を説くことを示すを前の所明となし、一經は弘願の機實を彰すに在ることを示すを後の所明と爲す。自ら『觀經』和讃の所述に合するなり。如來弘願とは如來とは本佛を指す。疏に云く「安樂能人」と。弘願眞實はこれ本佛所成の法なり、故に如來弘願といふ。乃ち上の定散諸善に對す。彼は則ち機の建立する所の故に、正宗何處か弘願法を彰すや謂く、住立尊、光明攝取これなり。『摘解』に『對問』を評して云々す。見るべし。演暢等とは九品翻じて一機と爲す。同く願力に乗じて直に報土に入るが故に利他通入と云ふ。三心即一を弘願義と爲す。故に一心と云ふ以て上の三輩三心に對す。已上二句初は法に約し、後は機に約す、亦これ行信、彰相見るべし。

緣達等とは機法二實、二尊一教、此を彰の義と爲す、分齊見るべし。因緣とは猶し由藉と云ふが如し。唯これ分ちて之を用ふ、意は別なきなり。然に經文は興逆の事有り。韋提別選し、別選して行を請ふ。而して佛微笑し、微笑して、而る後に散善を開く、中に弘願の實義を洩す。今は則ち說次に拘はらず機法二實を示す、これ二尊の一致する所以なり。以て一經の實義を明す。故に素懷本願と云ふ。惟に夫れ、二尊東西に岸を分ち同く水火に臨む。悲心無二、唯だ他力の一道以て逆惡を攝取するに在り。謂ふ所の、極惡最下の人に、極善最上の法を説くとすものこれなり。達多等とは、逆惡最下これを機實と爲す。韋提等とは願力の土を擇ぶ、謂て別選と爲す。正意とは別選に傍正の異有り、疏釋(序_三)に六七二科を分つが如し、今は其傍意を簡ぶ。故にこれを法實と爲す。蓋し最下の惡機自力を捨て、他力に歸す、二尊の正意、所在たゞこれのみ。故に素懷を彰すと云ひ、亦本願を開くと云ふ。然にこの四句、惡逆と別選を二尊に分對するものは、云何といふに、『述聞』に云く「綺互の文なり」と。『對問』に云く「此文は深旨存す。謂く、達多、闍世興逆の始に既に釋尊の本意を扣くが故に、彼の興逆は能く佛の素懷を彰し、復た韋提別選の正意は、正しく弘願に在るが故に、口に定行を請ふ處、即ち本願の攝化を開闡す。順逆二尊郢匠以て弘願眞實の正意を彰す。一經皆然り、故に緣達等と云ふなり」と。今云く、此兩說併せ用ひて可なり。『序分義』(三_行)に微笑を釋して云く「明如來以_見夫人願生極樂更請得生之行稱佛本心。又

顯彌陀願意。因斯二請廣開淨土之門非直韋提得去有識聞之皆往有此益故所以如來微笑也」と。今文を以て、疏文を准解するに、隱顯兩意を交錯し以て釋す。微笑の義通するに由るが故なり。韋提去行を請ひ以て要門を開顯するは隨他意なり。而して稱佛等と云ふは、付屬より跨節して、隱彰の意を明し給ふなり。知るべし、斯乃等とは結文なり。『頂戴錄』に云く「斯乃の下は結なり。上に言彰者と牒し、今は隱彰義と云ふ。隱、顯、彰、の三義異なりと雖も、隱の所在を知るは彰の處より知る、故に常に彰を以て隱に合して之を用ふ、故に知ぬ理實にはたゞこれ隱顯の二義のみなり。合せ結んで隱彰の義と言ふはこの謂なり」と。『略讚』に云く「今彰と謂ふは、弘願を詮するの文なり。方便の能詮と相重る眞實の能詮を彰と爲す、今其の彰詮を彰すが故に結して隱彰義と云ふなり」と。『摘解』に云く「牒に彰と云ふものは總じて弘願の文の上に彰灼たるものと幽隱に之を説けるものとを指す。今隱彰義と云ふは、要門顯露の說に望めて此が幽微を顯すが故なり。住立尊及び光明攝取と雖も、たゞこれ錐の袋を脱するの分際にして、前後盛んに定散を説くものに望むれば總じてこれ幽微なり。故に名けて隱と爲すなり」と。今は『摘解』に従ふ。上に辨する如き理由に依るが故に。

釋例

〔本文〕 是以經言教我觀於清淨業處、言清淨業處者則是本願成就報土也
 (一例)。言教我思惟者即方便也(二例)。言教我正受者即金剛真心也(三例)。
 言諦觀彼國淨業成者應觀知本願成就盡十方無礙光如來也(四例)。言廣
 說衆譬則十三觀是也(五例)。言汝是凡夫心想羸劣則是彰爲惡人往生機也
 (六例)。言諸佛如來有異方便則是定散諸善顯爲方便之教也(七例)。言以佛
 力故見彼國土斯乃顯他力之意也(八例)。言若佛滅後諸衆生等即是未來衆
 生顯爲往生正機也(九例)。言若有合者名爲龜想是顯定觀難成也(十例)。
 言於現身中得念佛三昧即是顯定觀成就之益以獲念佛三昧爲觀益、即
 以觀門爲方便之教也(十一例)。言發三種心即便往生(十二例)又言復有三種
 衆生當得往生(十三例)。依此等文就三輩有三種三心復有三種往生。

〔校異〕 ①爲、『寛永本』方便之教の下にあるもの錯置なり。②彼、『寛永前本』及び『正保本』得に
 作るもの形誤。③二種往生、『寛文本』三種往生に作る。

〔大意〕 解釋の中第三に釋例なり。十三文を出して隱彰の釋例を示す。

〔細釋〕 『觀經』一部文句廣し。上の如き隱顯の義一一舉示すること容易ならず。故に少分を擧げ
 て應に隨つて以て解し、學者をして一を聞きて十を知り、遍く一經の玄宗に達せしめんと欲す。
 此釋ある所以なり。此中十三文を擧ぐ。文を釋するに就て諸家異説す。『笑螂臂』は初の十一文を
 彰の義と爲し、後の二を顯の義と爲し。『一滯録』は初の五文は隱の義例を明し、次の六文は彰の
 義例を明し、後の二文は顯の義例を明すとす。『略讚』は之に従ふ。『對問記』は、初の五文は隱
 の義を明し、次の六文は彰の義を明し、後の二文は三心の眞假に顯通するの義を例顯すとす。
 『仰信錄』は之に従ふ。今は『六要鈔』六(註)に「此一段者今師聖人已心領解隱彰意也」とあるに依つ
 て、十三文を總じて隱彰の義例と見るなり。蓋し擧ぐる所の十三文は、其の弘願の文に彰はるゝ
 の相、親疎あるべしと雖も、都て之を隱彰の釋例と爲す。親疎の相はたゞ一様ならず何ぞ能く之
 を分別することを得んや。中間の六文に彰顯の言ありと雖もこれ義同ならず、前の五文に望めて
 文體異なるは但だこれ任放のみ。

十三文の中、初九は是れ序分、後四は正宗の文なり。初九文の中、初三は欣淨緣、次二は顯行
 緣、後四は示觀緣の文なり。

第一文經言教我等とは欣淨緣(經)の文なり。問。隱顯は佛説に在ること勿論なり。今韋提能請
 の言に於て隱顯の判あるは何の義ぞや。答。『述聞』に云く「主伴同く大心海より現するが故に、

中心の所期は正しく人をして彌陀の報土に入らしむるに在り、故に別選正意と云ふ」と。『仰信録』にこの説を評して而る後に云く「今按ずるに定散を顯と爲し、弘願を隱と爲るは、正しく是れ教主の化儀に就て言ふなり。然に之を韋提能請の言辭に論ずるは、韋提の能請に通別の二請ありと雖も、唯これ定善なり。世尊請に應じて廣く十三觀を説くの處に隱顯あるが故に、後を以て前に及ぼして隱顯の判を加ふ。能請所請異なりと雖も、其體は是れ一なり。唯其法に於て隱顯あることを論じ、其人に於て之を談ずるに非ざるなり」と。今謂く『仰信』の説從ふべし。清淨業處とは顯文は通請の初に在り、所求の佛土は汎く十方佛刹に通ず。然に正宗所説の依報より之を推して隱彰の釋となす。本願の二字は清淨業を釋し、報土は處字を釋す。『論註』に云く「從菩薩智慧清淨業起莊嚴佛事」と。此意なり。

第二、三文は欣淨緣(註)の文にして、此は夫人、所求を選びし後、其の去行を請ひし中の言なり。次での如く要門觀中の方便と成就なり。疏文(序註)に云く「言教我思惟者即是定前方便思想憶念彼國依正二報四種莊嚴也。言教我正受者此明因前思想漸漸微細覺想俱亡唯有定心與前境合名爲正受」と。疏は顯文に順ず。今の方便は疏と同じからず、彼は進趣を謂ひ、此は則ち權假にして、後の金剛真心に望むれば、乃ち諸機各別の三心を指す。次に正受を釋して金剛真心と云ふは眞實の一心を云ふ。此の如く二文は利他の一心に通入せしめんとするの前方便なることを知る。これ隱彰釋となす所以なり。

第四文言諦觀等とは顯行緣(註)の文なり。此經文は淨影は「諦觀彼國及淨業成者」と訓じ、元照は「諦觀彼國之淨業成者」と點じ、終南は訓じて「汝當諦觀彼國淨業成者」と爲す。六要卷六(註)には今點と終南の序分義の點とを對比して二の相違を設く。一に能觀(序分)所觀(今文)の異二に依報(序分)、正報(今文)の異なりとせり。『述聞』に能所の異に就きて補説して云く「顯説は疏の如く能觀に爲して解す。其の業成は修觀の人に在ることを明す。隱彰の意は業成は佛邊に在り、衆生は佛の業成を受くるのみ、故に所觀に爲す。今謂く、二祖各々一義に據る。教我觀於清淨業處の言に准すれば所觀なるべく、「欲修淨業者」「淨業正因」の言に准すれば當に能觀なるべし」と。『述聞』の説從ふべし。觀知とは證文(註)に云く「觀ハ願力ヲコ、ロニウカベシルトマウス、マタシルトイフコ、ロナリ」と。又(註)「知トイフハ觀ナリ、コ、ロニウカベオモフヲ觀トイフ。コ、ロニウカベシルヲ知トイフナリ」と。知るべし。本願成就とは第十八願に酬いし佛をいふ。眞佛土卷及び『末灯鈔』(註)の釋の如し。上に金剛真心といふは此の能觀の人を謂ふなり。

第五文言廣說衆譬等とは顯行緣(註)の文なり。これ觀門を方便と爲すの釋例なり。譬とは猶し方便と言ふがごとし、知らざるものをして之を知らしめんが爲に、相似たるものに就きて比説するなり。然に此經文に就き古に二義有り。一には只定善に約す。是れ『序分義』に科して「二從衆

時世尊下至廣說衆譬已來、正明答前夫人別選所求之行」と云ふに依る、二に定散に通ず、これ「序分義」(註)に科して「言我今爲汝已下、此明機緣未具不可偏說定門佛更觀機自開三福之行」と云ふに依る。今は定善に約す。謂く、經中に無生忍を以て觀門の益と爲す。是れ弘願の益を以て要門行に寄説し、觀門の終歸は正に弘願如實の觀に在ることを顯す、乃ち知る十三觀をして、弘願に入るの方便と爲す。故に觀門を指して方便と爲し、實に非ざることを示すなり。

第六文汝是凡夫等とは定善示觀緣(註)の文なり。『般舟讚』(註)に云く「韋提即是女人相、貪瞋具足凡夫位」と。則是等とは爲の字は須く人の下に置くべし。『述聞』に云く「觀經の所爲は常没の凡夫なりと雖も、其の顯説は尙これ善を先にし、其惡を後にす。隱彰の意は之に反す。諸機齊しく下々品に會す。故に初に汝是等と曰ふものは、竊に彼の請を抑へて其の自力心を捨てしめんとするが故なり」と。今謂く『述聞』の説好し。自力心を捨てしむる所惡人能生の機たることを彰すなり。

第七文諸佛如來有異方便等とは同じく示觀緣の文なり。異方便に就きては上に述ぶるが如し。既に得忍を以て觀門の答と爲す。知ぬこれ觀門の終歸は弘願念佛に在ること明かなることを、異方便の語は眞に入る方便の義を含む、觀門既に爾り、散善豈に別なるべけんや。則是定散等と云ふ所以なり、顯の字は是の下に安じて見るべし。

第八文以佛力故等とは同じく示觀緣の文なり。他力とは本願力を云ふ、行文類の如し。『觀念法門』(註)に『觀經』を引きて「以佛願力故見彼國土」と云ふ、この佛願力とは彌陀に約す。蓋し、今文經の顯相は則ちこれ釋迦の佛力を云ふ。然れども、今は彌陀の佛力を指して隱彰の義と爲すなり。

第九文若佛滅後等とは示觀緣の文なり。經文の顯相は韋提を其の正所被と爲し、未來を兼爲とす。今は則ち之に反す。隱彰の義の故なり。上は横に約して韋提を當機と約し、今は豎に約して未來を正機に約す。

第十文若有合者等とは已下に正宗の四文を擧ぐ。四文の中、初二は是れ定善にして後の二は散善なり。今文は即ち第八像觀(註)の文なり、『對問』に云く「經に龜想と説くは、後の眞觀に對す縦ひ經に合するも、像想なるを以ての故に、若し眞觀に對すれば龜想と爲す。故に若有合者名爲龜想と云ふ。然に今念佛三昧を以て弘願の益と爲す、故に龜想の言自ら像眞に通ず。要門の假觀總じて龜想と爲すなり、定觀難成とは定善の當分は、縦ひ、眞觀成すとも猶ほこれ龜想なり。究竟に非ざるが故に難成と云ふなり。其の難成は、成就すべからざるの義なり。若し弘願念佛三昧に達せざれば、究竟に非ざるが故に」と。『仰信錄』に補説す。見るべし。

第十一文於現身中等とは第八像觀(註)の文なり。經文の上は、眞の爲に假を觀じ、假に由つて

真を見る。真とは無量壽佛の眞身なり、之を謂ひて、得念佛三昧といふ。念佛は觀稱に通ずる中
是は其の觀念を云ふ、卽是等とは顯説は上の如し、今は隱彰に就く。按ずるに、彼の觀念は轉じ
て稱念となる、これ本願念佛なり。第九觀に佛光の攝取不捨を説くものこれなり。定觀成就とは
第九觀を云ふ。第九觀の中、念佛を言ふもの兩處有り、初は稱念にして、其後は觀念なり。今の
文勢は彼の後なるものを貶して來して像觀に收め以て定觀成就といふ。眞假別なりと雖も、弘願
より望むれば總じて方便なり。上に定觀難成と云ふは、弘願の易を彰し、今は則ち念佛の勝を語
りて諸行の劣を示す。彼此相映じて其義見るべし。

第十二、十三兩文は上品分抄中の文なり。卽ち此經の三心は要弘二意を兼含することを彰す
初文は一箇の三心に自ら二種往生を具し、後文は經は上品中の三種人を指すも、今は總じて三
輩を攝す。乃ち三種の機を擧げて三輩の機は皆三心を發するの義を成じ、三輩の衆機皆三心を發
して卽往、便往生を得ることを彰すなり。依此等とは次上の二文を指す。卽ち三輩三心各々眞假
を具するの義を成す。三種三心とは定、散、弘願の三、二種往生とは報化の二を謂ふ。下文(廿五)に
云く「又有三種三心亦有二種往生二種三心者一者定三心、二者散三心、定散心者卽自利各別心
也。二種往生者一者卽往生二者便往生」等と。二卷鈔下(廿)に云く「凡就心有二種三心、一者自
利三心、二者利他三信。又有二種往生一者卽往生、二者便往生」と。彼此對照するに三心に就て

定、散、弘願の三種有り、故に今總じて合して三種三心と云ふ。心に三種有りて眞假を分別すと
雖も唯これ二と爲す、故に其往生は則ちこれ二種なり、三心に就て二、三の別有るは則ち開合の
異有るに由る、用に隨つて皆妨げなし。二種往生の二、校異に示すが如く「寛文本」は三に作る、
このときは難思議等の三往生を云ふ、此亦開合にして相妨げざるなり、此の如く二文は隱彰の義
を詮示す。知るべし。

結 成

〔本文〕 良知此乃此經有顯彰隱密之義。

〔校異〕 ①密、『報恩寺本』蜜に作る。

〔大意〕 立例の中四有り、一に標舉、二に解釋、三に釋例、四に結成なり。上の三は竟りて今は
結成なり。

〔細釋〕 上の釋例を承けて、結成し以て義を立するなり。

正 答

〔本文〕 二經三心將談一異應善思量也(警覺)。大經觀經依顯義異。依彰

義一也。可知(結答)。

〔校異〕 無し。

〔大意〕 作例略釋の中二有り、一に立例、二に正答なり。一は上に竟りて今は正答なり。

〔細釋〕 此中二有り、初に先づ警覺し、後に正しく結答するなり。隱彰の義は釋家に意有りて判なく、故に其意を得ざれば、經及び釋に於て通せざる所多し。他流の眞假を混淆して義趣明かならざるは此義を辨せざるが故なり。然に宗祖の卓識深く經家の深意を探りて隱顯の判を成す。故に先づ警覺して二經の三心を談せんと欲せば、應に善く隱彰顯密の義を思量すべしとのたまふなり次に大經觀經等とは正しく結答す。顯説はこれ第十九願開説なれば異にして同ならず、隱は則ち選擇本願を以て宗と爲すが故に一にして異ならず、故に顯異彰一と云ふなり。知るべし。

舉釋廣辨

〔大意〕 正釋の中二有り。一に例を作りて略釋し、二に釋を舉げて廣辨す。初は前に竟りて今は其の二なり。此中三有り、一に引文、二に然今(并釋)の下は釋義、三に二經之三(并結)の下は正答なり。初の引文の中、三有り。一に終南、二に雁門、三に西河なり。

終南引意

〔本文〕 余者光明寺和尚云、然娑婆化主因其請故即廣開淨土之要門乃至韋提即是女人相。貪瞋具足凡夫位已上。

〔校異〕 (一)玄義分(并釋)の文。(イ)息慮の慮、『明曆本』は慮に作るは形誤なり。

(二)玄義分(并釋)の文。校異なし。

(三)序分義(并釋)の文。(イ)說一切法の法の上に疏文は諸の字有り。

(四)序分義(并釋)の文。欲生彼國者の彼、『寬永前本』は得に作るもの形誤なり。

(五)散善義(并釋)の文。(イ)又眞實の實、『明曆本』は實に作るもの形誤なり。(ロ)制捨自他諸の捨、諸本作に作る。(ハ)行住坐臥の坐、『報恩寺本』は座に作る。(ニ)勤修自他凡聖の勤、本文は勤に作る。(ホ)合掌禮敬の掌、『明曆本』常に作るもの形誤なり。(ヘ)證讚彼佛依正二報の證、『高田本』『澁谷本』『寬文本』は稱に作る。(ト)思想觀察憶念の憶、『寬永前本』及び『正保本』憶に作るもの形誤なり。

(六)序分義(并釋)の文。校異なし。

- (七) 序分義(經)の文。校異なし。
- (八) 散善義(三)の文。校異なし。
- (九) 禮讚(五)の文。(イ)先具三心の先、本文は者に作る。(ロ)稱揚彼佛の揚、『寛永』、『正保』二本楊に作るものは形誤なり。(ハ)勉生死の勉、本文は免に作る。
- (十) 禮讚(每)の文。(イ)憶想間斷故より但能真心に至る十一行半『報恩寺本』は脱落す。(ロ)是久種の是の上本文は即の字有り。(ハ)徹心髓の髓の上、本文徹の字有り。(ニ)重障皆頓の皆頓、本文は頓皆に作る。(ホ)終は無益の終『禮讚』の文は衆に作る。(ヘ)差不作者の差、本文は若に作る。
- (十一) 觀念法門(廿)の文。校異なし。
- (十二) 法事讚(廿五)の文。(イ)禪坐思量の坐、『報恩寺本』は座に作る。
- (十三) 般舟讚(三)の文。(イ)末期門門不同の期の下四十八句を乃至す。(ロ)佛迎將の將、『寛永前本』及び『正保本』時に作るもの形誤なり。
- (十四) 般舟讚(三)の文。校異なし。

〔細釋〕 初に終南を引く、余者とは次上の顯異彰一を承く。この下三祖を引くと雖も終南を以て正證と爲し、餘は其の助顯なり。故に前世なる雁門西河を後に出す所以なり。終南に十四文有る中、要は三心釋に在り。是れ一段の所明の宗なるに由る。『禮讚』を並べ出すもの其意見るべし。

第一文は『玄義分』序題門の文にして第二文は同じく宗旨門の文なり。第一及び第二の前半は先づ隱顯あることを證す。中に於て初はこれ二尊二教、後は則ち一經兩宗なり。教に要弘を分ち、宗に觀念を辨す、豈に隱顯なかるべけんや。

第一文は『對問記』に云く「序題門の中要門には即此觀經と云ひ、弘願には如大經説と云ふ。要門は釋迦に屬して廣開と云ひ、弘願は彌陀に屬して顯彰と云ふ。要門は廣く顯し、弘願は時に彰る。文に在つて見るべし。又能人顯彰とは正しく第七觀を指す。此意は二尊二教を分別して住立空中尊を以て弘願の主と爲し、一經の弘願を總じて本佛に屬するなり。而して彼尊體は則ち弘願法體の直爾全現にして、一經の所説に關せず。然りと雖も、除苦惱法の言に應じて、弘願の妙益を施すを以ての故に、釋尊の密意を知るも亦弘願に在り。二尊の郢匠許應無二なり。釋迦は則ち彌陀來應の徑路を開き、彌陀は則ち釋迦施權の本意を彰す。一經の隱顯は是を根基と爲すなり」と。『仰信錄』に云く「問ふ、序題の文は二尊二教に約す。然に隱顯は釋迦の經説に就いて在るが故に當にこれ一尊二教なるべし。今此文何を以て隱顯の基礎を成するや。答ふ、所問實に然り、然るに釋尊の許説するに、聲に應じて即ち現す、是に由つて除苦惱法の言を按ずるに自ら隱顯を成す。顯は則ち正報觀を許説し、隱は則ち韋提をして見佛得忍せしむ、故に佛意は弘願の實益に在ること以て見るべきなり。」と、佳し。如大經説の如とは稱契の義又は如同の義なり。一切善惡

等の文を引かざるは今は部主に約するが故なり。

第二文の中二段有り、初は念觀兩宗を辨じ、後に言教等の下は分齊を判す。中に於て今此所引は初を以て主と爲す。謂く一經に兩宗有つて真假の義別なり。其兩宗あるは即ち隱顯を存する所以なり。『一滯錄』に云く「もとの一經兩宗を明すは『觀經』流通の文意に依り給ふ。彼文に阿難問ふ、この經をば何とか名くべきぞと、佛の答に「此經名觀極樂國土無量壽佛」等とは觀佛三昧なり。「若念佛者當知此人」等とは念佛三昧なり。是の如く兩三昧を分ちて説いてあるゆゑに大師兩宗をたて給ふ。兩宗を立つといへども經の本意は念佛に歸す。茲に因つて次の付屬には「汝好持是語」等と念佛のみを付屬し給ふなれば、念佛三昧爲宗をもてこの經の本意とすること明かなり」と。『摘解』に此の義を批評して云く「私に云く、所依は則ち然り、其之を立つる處は則ち第九觀に於てす。「廣明念佛三昧竟」と云ふが如くなるが故に、是れ宗とは正宗分所明に於て立つる所なるに由る。」と。『摘解』の説佳し、一心廻願等とは『頂戴錄』に云く「一心廻願等とは體とは猶し趣と言ふが如きなり。今此兩宗の所趣は則ち是れ廻願して淨土に往生することなるが故なり。『六要』(六本持)に云く「此有二義一云一心廻願是約觀佛。往生淨土是約念佛。二云顯念佛之體觀佛三昧遂可廢故、不立體也」と。初義は可なり、後義は妨げあり。何となれば觀佛は廢の爲に説くと雖も已に其宗を立つ、豈に其趣なきを得んや。又師説に依れば文兩義なり。若し顯の宗

に約すれば廻願求生極樂の義なり。若し隱彰に約すれば一心と言ふは信心なり、廻願と言ふは廻心なり、謂く自力心を廻して往生を求願するの義なり」と、知るべし。

次に言教等とは教の分齊を明す。『頂戴錄』に云く「今家の所判に凡そ三重有り、一に大乘中の權を漸となし實を以て頓となす。二に實教中に就いて聖道の實教は自力を以ての故に漸となし、淨土の法門を頓となす。三に淨土の中に就いて要門は尙ほ是れ他力中の自力なれば漸となし、弘願は即ち他力中の他力なれば頓となす。下に頓中之頓等といへり。此中に頓漸と云ふは正しく第二重の位に在り、知るべし」と。『述聞』に云く「此中の義勢は兩向す。謂く頓教の言は下に望むれば定散を標す。常途に對すれば『觀經』の顯說尙ほ是れ頓なるに由るが故に、後に『般舟讚』を引くが如し。上に望むれば頓中の漸あることを知るべし」と。『摘解』に云く「高祖は未だ要門を判じて頓教と云はず。今の引意は蓋し上に同じく、『觀經』に隱意の弘願あることを證す。若し弘願なければ頓教と云ふべからず、定散は成佛法に非ざるが故なり」と。『摘解』の説好し。

第三文は『序分義』如是の釋文なり。引用の祖意を窺ふに諸説同じからず。『頂戴』に云く「中に於て其三義あり。一に又言如是等とは上の「其要門者即此觀經定散二門」を承け來る。此は則ち機行必益の義にして釋迦教に約す。又言如者の下は二に隨機應度の義にして彌陀の方便教に約す。又言如是者欲明の下は三に所說契法の義にして化前一代に約す」と。『對問記』に云く「初一釋は

總じて所説の定散は説の如くにして誤り無きことを明し、第二釋第三釋は機と理とに稱ふに約して如是の義を明す」と。『摘解』に以上の二義を評す。即ち『頂戴』の第二重に彌陀に約するを難じては、釋迦も亦機教相應するが故にと云ひ、『對問』の説を評しては、「此説は今の引文を以て顯説を褒むるものと爲すが如し、疏釋の意は然るべしと雖も、引用の祖意は何ぞ然らんや」と云へり。今謂く引用の意は蓋し定散は是れ釋迦の方便説なることを顯し、反つて本意は弘願に在ることを示し、以て上の二教二宗の引意に同するなり。第一重の中に定散兩門也とは先づ顯説の法を標出す。是即定辭也とは、定散はこれ方便法なることを引定するを謂ふ。機行必益とは逐機の説其機を益するを謂ふ。所説無錯誤とは權法を説くこと權法の如くするを謂ふ、已上は是れ總明なり。第二重は別して逐機の説なることを明し、第三重は別して其法に隨つて之を説き自の本意を彰ざざることを明すなり。

第四文は『序分義』の顯行縁の文なり。此文は上の如衆生意を助顯して逐機の法を詳かにするなり。經に「一切凡夫欲修淨業者」と言ふが故にたゞ善機を擧ぐ、宿習は定散の行を發すべし、故に定機、散機と云ふ。受法の已前は唯知作惡なりと雖も、念佛はこれ散善中の攝なるが故に受法の後に約して善機と謂ふ。『二卷鈔』上(廿)に云々するが如し。

第五文は『散善義』の三心釋の文なり。正く三心に一異有ることを證す、乃ち次上の二文は行の非なることを明し、今は其の信の非なることを明す。之を第三卷所引と比較するに、彼此兩所に於て、互に出沒有りて、以て權實別なることを示す。又兩處並べて出さざるものあり、四重破の如し。又同じく出すものあり第三深心釋の如し。又下の釋第二十願處に此に沒する所の深心釋の文を引く。是の如き等の意は當に處に隨つて辨すべし。

至誠心中先づ二種を標す。疏の初に何以故等と明すものは義利他に當る、本意に據るが故に。次に今標有り、而して後に隨釋して自利眞實に二種を分つものは意は利他眞實に對揀して明さんと欲するが故に。其不善の三業の下は略して上の圓成の釋を提げ、利他眞實を釋するなり。『二卷鈔』下(三)に「就利他眞實亦有二種」等と云ふが如し。今は則ち止た其の自利の釋を出して前後の利他眞實の釋を沒す。沒するものは上已に出すが故に、出すものは上に在りて沒するが故に。此は唯だ其自利を語りて利他を言はず、而して二種を引きて標するものは、自利々他の義即ち隱顯にして、上の二教二宗と脈絡貫通す。文は則ち此に在りて義勢は下の二心を統ぶ、今は則ち自利各別の三心の外に更に如來利他の三信あることを知らしむるが故なり。

次に深心の中、先づ初より二種深信の盡くるに至るまでを沒す、これ第三卷に引くが故に。今こゝには第三深心の文を引く。この文の引意に就きて『頂戴録』に云く「又決定深信等とは、此文は眞實と方便とに關涉す。若し方便に約すれば、この經所説の定散は能く修して廻向すれば、往

生を得、是故に人をして忻慕せしめて此二善を修せしむと深信するなり。今の引意は是れなり。又眞實に約すれば、十三の定善を説くは佛意正しく彼佛の別願所成を證讚する爲なり。此義を深信する之を深心と謂ふ。信卷所引は即ち此意なり」と。『述聞』に此義を評して云く「此文を引くは誘引の能あるを示すが故なり。第三卷は則ち定散の眞實に非ざるを知らしむるが故なり。此中第三卷と俱に遠の初義の中に攝し、而も廢立を以て其別と爲すなり。後義の如きは西山の意なり。眞實の義に非ず、『觀經』の身土及び其九品を揀びて方便と爲すは首章の如きが故に」と。今謂くこの第三深心を引くは、誘引の能あることを示すが故なり。三福等とは是れ往生行なり、依正二報とは其所期の土なり。經中に弘説する定散觀境及び九品淨土を指し、彼の依正二報を證讚するなり。使人忻慕とは、釋尊は此の定散の行を修せば則ち彼の淨土に入ることを得と説き人をして忻慕せしむ。其の所説を信するを名けて深信と爲すなり。乃至とは四、五、六の三深心を沒す。彼は則ち眞實なり、第三卷に引くが如し。但し其の第四は方便に分通す、眞門下に引くが如きが故に。

又深心深信等にはこれ第七深信の文なり。第三卷に於ては之を略す。此れ建立自心を以て自力の心と爲すが故なり。自心とは自己の心にして、建立とは策勵決定の謂なり。疑雲起れば定散の教に順じて疑錯を除き、別解等の難破に遇へば亦教に順じて傾動せられざる此を建立自心と云ふなり。次に乃至とは問曰の下より就人立信也に至るまでの四十九行を沒す。第三卷の如きは則ち不相違失と云ふに至るを沒して釋迦指勸以下を出す、是れ疏文は從假入眞の所明にして、初の半は是れ假、後の半はこれ眞なるが故に。信卷は後半の眞なるものを出して、前半の假なるものを略し、今は後半の眞なるものを略して前半の假なるもの、中、初を出して後を攝するなり。

次に就[○]行[○]立[○]信[○]等とは上は能修の心を明し、下は所修の行を示す。中を分けて二と爲す。初には行相を明し、若[○]修[○]已[○]下は後に得失を辨ず。初中亦標釋有り。釋の中初は正行を釋し、後に雜行を指す。正行の中初は五正を列し、後は助正を判す。此の一段の眞假通局及び引意に就きては、古來異説有り。『述聞』の意に云く「此就[○]行[○]立[○]信[○]の文は弘願眞宗の[○]大[○]行[○]を[○]顯[○]し[○]盡[○]したるものにして、すべて弘願なり。何を以て弘願なることを知るとなれば、初は開きて五と爲し、次に合して助正とす。此の開合は一物の上に存すべきなり。然るを開は方便、合は弘願とすれば開合の義を成せず。吉水既に『選擇集』に開合と宣ふ。故に知ぬ開合共に弘願なることを。若し弘願なれば化卷に引用すべきに非ず、云何と云ふに、蓋しこれ所迷を以て能迷に隨へるものなり。即ち要門行者は弘願を誤解す。眞門行者の誤る所も亦弘願の外ならず。中に於て要門行者は正雜、助正皆誤り眞門行者は則ち其の正定業を誤るなり。即ち能迷を以てせば則ち方便となり、其の所迷に據れば亦唯だ弘願なり。若し佛意に就けば常に第十七願に在り、弘願法を説くとき、三機集會し同聽異聞

し、乃ち正解有り不正解あり。方便行者を不正解となし、不正解と雖も弘願法を離れざるなり。是の如く今は所迷を以て能迷に従へて要門とす。此時は五失のみにて五得は無きなり。然に今何故に五得の文を除かずして爰に出すやと云ふに、蓋しこれ所迷の自爾の徳なり。自爾の徳なれども能迷より云ふときは、得も皆失とする。單に五得のみならず、一心専念も、順彼佛願も意皆同じ。喩へば天子蒙塵すれば即ち威徳無きが如し。思うて知るべし」と。『對問記』に云く「復此一段義要弘に通ず。然る所以は、此中但だ往生經中所説の行を取り來つて分つて五種と爲す。未だ正助の差別を辨せず、故に其の列する所の五行は要門に通せざるを得ず。且く觀察正行の如きは、既にこれ定善の所説なり、豈に要門に通せざらんや。稱名行亦下品中に出で、一分散善に屬するの義有り、其余皆然り。加之、今師弘願を論するや必ず佛願に依りて其義を確立す。『玄義』に云く「言弘願者如大經說大願業力爲増上縁」と、『散善義』に云く望佛願意と。亦云く望佛本願と。夫れ此の如きは若し經説に依れば要弘を兼含するが故に、其の弘願を論するは必ず佛願に依る、是故に次下に正助を判するに亦佛願に依つて以て其義を決し、順彼佛願故と云ふ。今此の文の如きは、通じて經説に依つて五行を擧出し汎く要弘に通ず、道理必然なり。吉水の如きは、弘願に通ずる邊に約して下の正助に望めて開合の義と爲す。高祖は要門に通ずる邊に約して雜行等の義を示す、沈思して味ふ可し。次に今の引用の意は、正助の一段は亦假中に屬す。雜行正行及び正助皆要門

に攝す。故に下文に「從此要門出正助雜三行」と云ふ。然る所以は彼の法相廢立は但だ行體を簡び、自力の機情を遣盡する能はざるが故に、縱令念佛一行を立つるも、機情或は存し、還つて假中に落在す。稱念の功を以て正定業に擬し、常に得失を見て猶ほ失中に處す。今は權機の情見に約して假門の法義に屬す。又信卷所引の如き則ち眞實義門に約す。是を以て一文を兩引し、眞假二義を證明す。對映して知る可し」と。『仰信錄』に云く「此一節は文は要門に約し、義は弘願に通ず。何を以て文の要門に約することを知るとならば、謂く文相の所明は傍正同じからず、初の二行には直ちに一心等と云ひ、後の三行には若禮等と云ふ、是れ讀觀を主と約し、禮稱讚供は施設して（若禮等と云ふが故に）隨屬するものなり。下に一心専念と云ひ、若依禮誦と云ふ、彼を以て之に例して文勢見るべし。その此の如くなるは是れ要門に約するが故なり。謂く讀誦は是れ散善の勝行にして、觀察は即ち定機の所修なり、此二行を擧げて以て二善を表す故に正しく一心等と云ふ。禮稱等は是れ下品の所修にして散善に隨屬するが故に、施設して若禮等と云ふ。若し稱名を主とせば、宜しく下の文の如くなるべし。今の文は之に反す、明かに知んぬ、文相は要門に約して之を明せるなり。高祖信卷の引文に此一節を略するは蓋しこの意か。何を以て義の弘願に通ずることを知るとならば、次下の分別助正の中に今の文を承けて又「就此正中」等と云ふ。助正はこれ弘願なるが故に、今の文も亦弘願と爲すこと理在見るべし。『選擇集』に開合に約して釋するはこ

れ弘願に約するものなり。今は則ち文相に依つて要門となすなり。次に今の引意を云へば、第二科の中の正定業を除いて已外の正、助、雜の三は皆要門と爲し、一心專念等の文は是れ弘願專修なり。下の文に云く「專修者唯稱念佛名離自力之心」と、これなり。順彼佛願の行豈に假門の行ならんや。然に之を連引するは、簡別の爲なるが故に、下の文に「除名號已外」と云ふ、知るべし」と。空華先師の義に就いては『敬信記』に云く「空華先哲の意は、五正行は方便、次の正助二行は一心專念に就て助に見ざる趣きより取れば、則ち吉水の御取扱ひにして、弘願の助正、又『二心專念』の意に依れば、若依禮誦等と云ふは雜修になりて一心專念のみ弘願なり。其時は專修雜修の取扱となる。此の二途疏文に含む、此の如きものを五正行と開きたるは、何れ方便の方なり」と。次に引意に就きて自解を述べて云く「今謂く、禮誦等の助業次上の一心專念等と組合ふときは弘願の助正となる。又初の五正行中の第四の稱名と組合ふときは、方便の助正となる。この方便の助正を以て往生に望むときは、六種を總て助業と名く。稱名と雖も、自力稱名は獨立の正定業に非ざるが故に、六種兼行して往生を資助するの域を免れず。就中本疏の意は、正く弘願の助正に在り、初の五正行を誘引して助に助の相をみざる弘願の一心專念に歸せしむるが故に。『選擇集』正く此意に依つて、助正を弘願の上に立て給ふ。疏文本と弘願の助正を當然とす。然も兼て方便助正の義を含まざるに非ず。助正の名を立て、引入し給ふ故に、其名に與へ稱を募り助を認

むるもの必ず爰に無んばあるべからず。高祖は嚴に弘願を守り給うて、要門助正に墮せざるように意を用ひ給ふこと切なるが故に、助正の目をば弘願の上には用ひ給はず。故に若禮誦等は今の引用の思召は、下に謂ふ所の助者除名號已外四種是也と云ふ五正行中の第四の稱と、前三後一の助との由れにして、方便の助正なるべし。信卷本に又就此正中乃至名雜行迄を引く。此引文に就て、若依禮誦等の助業は、所立とするや所廢とするやと云ふに、或か一義には、信卷所引の上は仍り『選擇集』の如く弘願の助正とし給ふ意なりと解して、高祖の上も弘願の助正を立つると解する義あり。快樂院の意は信卷に若依禮誦等の文を引くは簡捨の爲なり、弘願の上に助正を立つ思召とは解す可からずとす。今は此義に隨ふ」と。以上の如く、石泉、豊前、空華諸師の間に異説有り。

今謂く、前段の五行及び後段の助業は、並に眞假に通ず。通じて弘願と爲すは二行章の如し、即ち彼に開合と爲すもの見るべし。宗祖は並に假門と爲す。下の釋に云く「從此要門出正助雜三行」と。又云く「正者五種正行也、助者除名號已外四種是也、雜行者除正助已外悉名雜行」と。則ち知る正定業を除きて已外を皆要門と約す。一心專念を正定業と爲し。之を弘願の專修と爲すなり。下文に則ち云く「專修者唯稱念佛名離自力之心是也」と、彼の佛願の行に順する豈に假門ならんや。然に之を連引するものは要門より弘願に入らしむる爲なり。

初に行相を明す中、就。行。立。信。とは、鎮西の義に依れば則ち二行二信なり。二行とは諸行念佛なり。此二行に就て各往生の信を立つ、本願に望むれば唯念佛にあれども、諸行も亦往生を遮せず故に二行二信と云ふべしと。西山の義に依れば、一行一信なり。即ち定散諸行は三信發得せざれば往生の正因に非ず。故に別立して二行二信とはならざるなり。若し三信發得の後に諸行を修すれば、則ちみなこれ正行となる。由て諸行は念佛胎内の妙行にして一行一信なりと主張す。次に今家の意に依れば隱顯有り。顯に就きて云はゞ二行二信なり。若し隱彰に由て之を云へば、一行一信、にして、五正行猶所廢となる。即ち一心專念願彼佛願故と爲すが故なり。以上の如く三家に互りて見解を異にす。鎮西の二行二信と爲すは可なれども、諸行、念佛共に入報の行と爲すは不可なり。又西山の如きは、反つて是正雜混亂することとなり、終南大師の正雜二行の判を立つるものをして無意義ならしむ。知るべし、依。往。生。經。行。とは『敬信記』に云く「鎮西は往生經に依つて行を行すると訓ず、此の時は上の行は能行、下の行は所行なり。これ一義なり。又行じ行すると訓ず。これは行一にあらざるが故に、彼を行じ、此を行じ、行者の縁に従つて、何れの行なりとも行する故に行じ行すると云ふなり。今家の意は往生經の行に依つて行すると點し給ふ。上の行は所行、下の行は能行なり」と、今謂く往生經の行とは往生經所出の行なり。往生經とは三經なり。即ち淨土の三部經所出の行を名けて往生經の行と云ふ。彼の三福行の如きは經中に之を説き

給ふと雖も、本これ聖道經所出の行なり。『選擇集』特留章(上)に云く「此經雖有菩提心之言未説菩提心之行相」等と知るべし。而してこの五行は純らこれ淨土の行なれば名けて正行と云ふなり。然にこの五正行の出據を經中に求むるに異説有り『敬信記』に云く「前の二は總じて定散の文による。後の三は下三品の文に依る、禮拜は下上品に取り、口稱は下上下々に取り、讚嘆は下中品の爲説阿彌陀佛等に取り」と。これ『觀經』一經より取るの説なり。『仰信錄』には云く「初に讀誦正行は『大經』に云く「受持讀誦如說修行」と。觀察正行は『觀經』の十三觀是れなり。稱名正行は同經下品所説の一念十念是なり。禮拜正行は同經に云く合掌叉手と、『大經』に云く「五體投地禮無量壽佛」と是なり。讚嘆は『大經』に云く「聞其光明威神功德日夜稱說至心不斷」と、供養は『大經』に「懸繪燃燈散華燒香」と、これ餘佛に通ずと雖も、今は其の別を取るなり」と。この義は大觀二經に互りて取るの説なり。以上二説何れに依るも差支へなからん。念々不捨者に就きては、前に既に釋するが如し、正。定。之。業。とは、問ふ、何故に五種の中、獨り稱名念佛を以て正定業と爲すや。答へて云く、願彼佛願の故に、即ち稱名念佛は是れ彼佛の本願の行なるが故なり。吉水の大經釋に云く「讀誦等行即非本願選擇之行故名爲助」と。『顯正鈔』(中行)に云く「スデニ稱名ヲモテ正定ノ業トナヅクレバ、ソノ餘ハ正定ノ業ニアラズトキコエタリ。念佛ヲモテ佛ノ本願ニ順ズト釋スレバ、ソノ外ハ本願ニ順ゼズトシラレタリ」と、知るべし。正。業。助。業。とは『對問記』に云く「衆生の往

生正決定の業因を名けて正定業と爲す。正は偏邪に對し、定は不定に簡ぶ。唯此一行のみ、往業圓滿し、一聲、十聲正業に非ざることなし、故に名けて正定業と爲す。業に動作、業因の二義ありて、今は業因の義に約するなり。是れ餘行を簡去して信を本願念佛に立てしめんが爲に、稱名の體徳に約して、正定業の目を立つるなり。助業とは餘行の正業に非ざるを顯す。助に二義有り。一に力を正業に與へて往益を助成す、『要集』に「萬術助觀念成往生大事」と云ふが如し。是れ因體に望めて正因を助くるを名けて助と爲す。是れ弘願の義に非ず。二に正業に隨屬して行相を助成す。國王の行装に群臣必ず隨ふが如し。念佛正業に必ず前三後一ありて如實の行相を助成す。是れ業因を助くるに非ず。念佛既に是れ正決定業なり、何ぞ餘行の助を假りて、始めて往因を圓滿せんや。然りと雖も、若し永く禮誦等を廢するときは、不如實の失に墮す。餘行隨伴して方に如實を成す、故に助業と名く。業はこれ動作の義なり、資助の作業を名けて助業と爲す。正定業と所望不同なり。業因と作業とは名は通じて義は別なり、沈思して知るべし」と。『摘解』に云く「業とは動作を當義と爲す。而して動作には必ず其の成果の用あり、此を爲因の義と爲す。故に正定と助と同じく動作の成用を顯す。前三後一の動作は稱名を助成するの用あり。故に助業と名く。稱名を助くと云ふと雖も、往因を助成するの謂に非ず。舊に或は云く、助縁と作して相續せしむと。或は云く莊嚴して流布を助成すと。或は云く、如實を助成すと。衆義皆妨げなし。稱名は正

く往生を決定するの用あり、故に正定業と名く、往生を決定すると雖も、能稱以て往因を成するの謂に非ず、所稱の法體に願行圓滿して能く往生せしむが故なり。亦いふべし。稱名はこれ信等流の相なるが故に相の處に於て、其の體徳を談するものにして、信に對して別して行因ありと言ふには非ず。以上は終吉の意に就て之を解す。若し高祖の意に依れば、弘願念佛は是れ獨立法にして絶えて助業を用ふることなし。信卷に助業の文を引くと雖も、たゞこれ餘行を簡去せんが爲に助の名を用ふるのみ。五得の文を略するは正助二行を修すと云ふに由る」と、見るべし。

若修等とは『述聞』、『對問記』に云く「本疏の意は則ち要弘相對して得失を判ず、今は則ち機情に隨つて之を引く」と、從ふべし。

三者廻向發願心等とは『六要』六本(六)に云く「三者廻向發願等者於此心中有三重釋。今所引者是其初重廻向因果自力心也。是故當卷故被引之。下之二重廻思向道廻入向利。第三卷中既引之訖。彼二重約他力故也」と『述聞』及び『摘解』に云く「顯說の三心は、前二は第三に至つて極まる。故に此を至要と爲す。序題に「廻此二行求願往生」と云ふが如し。十一門の中に第四門の三心正因を提げ、之を第八門に出して「廻所修行願生」と云ふもの、亦意を同じうす。此と弘願の信爲能入とは善意自ら別なり」と。佳し。過去等とは即ち前の三業所修の諸善、汎く聖淨世出世の諸行を指す乃ち修善を擧げて其止惡を攝す。以此等とは回願の相を示す。回願の心は深心に由つ

て生ず、故に眞實深信心中と云ふなり。

第六文及び第七文の二文は『序分義』に據る。二縁の名を釋すること西鎮に異解す。『六要』六末(七)に云く「問云何故略出二縁名乎。答前所引之三心之中第三之心所云隨喜過去今生一切凡聖三業所修世出世間善根等者是定散也。是故散善爲佛自開顯往生行、定善答韋提請示往生觀、此定散機各歸他力得往生益今表名題蓋其意歟」と。『頂戴錄』に云く「問ふ、今文點を加へて之を引くは何の意ありや。答ふ、定散二善は弘願に入らしむるの方便なることを彰さんが爲なり。觀とは信心の智惠觀なり。定善は是れ信心の智惠觀に入るの縁なり。散善も亦爾り、故に知る、行とは即ち是れ弘願眞實の稱名なり、其義は下輩の隱彰の如し」と。『述聞』に云く「前後の引文に經の顯說を示すに准するに、定善示觀とは通じて正宗を示し、縁とは序を謂ふ、彼が爲の由藉なるが故に。散善等の名義も意亦同じ。此二文を引く意は上の三心に二種あるを示すが故なり。下の釋に「二種三心者、一者定三心、二者散三心、定散心者即自利各別心也」と云ふが如し。是故に二縁の名に意あるに非ず。乃ち之を以て略して正宗の廣說に代へんと欲して聊か引出するのみ」と。『摘解』に云く「或は云ふべし。此文の引意は、次上の所引の三心は、其顯說はこれ自力心なることを顯すなり。定善、散善とは、以て一經の所說を盡すの言なり。一經の所說は唯觀と行とを明すに在り、此を示觀緣顯行縁と云ふ。縁とは由藉の義なり。既に一經は觀、行を以て所詮と爲す。

乃ち知る、其相應の心はたゞ是れ自力心なり。是故に次上所引の三心釋に三業の勤修を明すなり」と。今謂く『述聞』の說好し。二文の次第疏と異なるは云何と云ふに『六要』六末(七)に云く「問如本書者顯行在前示觀居後。今何前後。答序分說相夫人之意先依當機雖請定善如來爲攝一切諸機先開散善後示定善。正宗說相先應請問後顯自開今就正宗說相次第前後如此」と。『頂戴錄』に云く「今逆次に之を引くは上に玄義の定散兩門を引きたる次第に順せんが爲なり」と。今謂く二釋何れも妨げなかるべし。

第八文は『散善義』後序の文なり。『六要』六末(七)に云く「淨土要者有其二意。一要門義即定散也。二要法義即念佛也。如事讚云故使如來選要法也。即眞要義是爲『本意』と。『頂戴錄』に云く「又云淨土之要等とは、『散善義』の後序に云く眞宗匠遇、淨土之要難逢等と、眞宗等は行卷(四)に之を引く、知るべし。今此句を引くは、上の『玄義』の要門の名を成せんが爲のみ」と。『述聞』に云く「要即門此を當義と爲す。是れ照應を知らしむるなり。序題の要門は其の弘願に對し、後序の要の言は眞宗に對するが故に」と。『對問記』に云く「聖道に望んで淨土の定散は是れ入道の要なることを顯すと。是れ直に定散を指して要門と爲する義なり。初の二文は、則ち要の門の義なり、後は則ち要即門の義なり。以て上來の要門義を結成す」と。今謂く、引意は上の二文と同じく、三心は是れ淨土の要なることを示す。定散の行を要門と爲すは、其意三心に在るが故なり。

抄出とは疏文を引き訖るが故なり。

第九文は『禮讚』前序の文なり。『述聞』に云く「此と次の又菩薩等の文とは勸誠の意を存す。勸は他の聖道門の人に向ひ、誠は要門に保着するものに於てす。乃ち分つて二と爲す。初の意は誠に在り、又菩薩の下の意は其勸に在り。初の文に深心釋を沒するものは、一心を少くに應せんと欲するが故なり。一心を少くものは、即ち是れ要門に保着する行者なり。弘願より望めば、大利を失して將に諸の厄を受けんとするなり。上の三心の如きは、三にして三に非ず。必生彼國は空言にして實なし、誠に哀むべしと爲す。誠めざるべからず。除没するの意深し。看るもの忽せにすること勿れ。具此等とは、西鎮の諸流は文に隨つて解し去る。今家は則ち義語に順じて解す。『文意』^(評)に釋して云く「具此三心トイフハ、ミツノ心ヲ具スヘシトナリ。必得往生トイフハ必ハカナラストイフ。得ハウルトイフ、ウルトイフハ往生ヲウルトナリ。若少一心トイフハ若ハモシトイフコトシトイフ。少ハカクルトイフ、スクナシトイフ。一心カケヌレハムマル、モノナシトナリ。一心カクルトイフハ信心ノカクルナリ。信心カクルトイフハ本願眞實ノ三信心ノカクルナリ。觀經ノ三心ヲエテノチニ大經ノ三信心ヲウルヲ一心ヲウルトハイフナリ。コノユヘニ大經ノ三心ハエサルヲハ一心カクルトイフナリ。コノ一心カケヌレハ實報土ニムマレストナリ。觀經ノ三心ハ定機散機ノ自力ノ心ナリ。定散ノ二善ヲ廻シテ、大經ノ三信ヲエントネカフ方便ノ深心ト至誠心

トシルヘシ。眞實ノ三信心ヲエサレバ眞ノ報土ニムマレズ、ムマレサレハ即不得生トイフナリ。即ハスナハチトイフ。不得生ハムマル、コトヲエストイフナリ。定機散機ノ人、雜行雜修シテ三信心カケタルユヘニ多生曠劫ヲヘテ大經ノ三信心ヲエテノチニ眞實報土ニムマルヘキユヘニスナハチムマレストイフナリ。モシ胎生邊地ニムマレテモ、五百歳ヲヘ、アルヒハ億千萬衆ノナカニトキニマレニ一人マコトノ報土ニハス、ムトミエタリ。三信ヲエンコトヲヨク、コ、ロエテネカフヘキナリ。」と。又和讚に云く「眞實信ヲエザルヲハ」等と。此は是れ其の義語に順じて解するが故に、序題門及び付屬の釋は並に本願を主とするに準せば然らざるを得ず」と。『對問記』に云く「以下の引文、是れ第二に利益の分齊を分別するに二あり。一に心に約して得生の益を明し、二に行に就いて難得の失を示す。初の中に二あり。一に直明、二に對顯なり。乃至然に經疏の文、彼中の三心各々要弘二途の解釋を施すに對檢するに、今此讚文は前後の二心は要門に約して明し中間の深心は、弘願に約して示す。是を以て若し要門に約せば、二心を以て深心を攝す。若し弘願に約せば深心を以て二心を具す。前後と中間、要弘互顯、今要門義を證するが故に二心を擧げて深心を攝するなり。若少等とは要弘二義を含む、今自利各別の三心に就て之を言ふ」と。今謂く、祖意に依つて讚文を解すれば須く『對問』の釋に従ふべし。今の引意を伺へば宜しく『述聞』に従ふべし。乃至とは五念四修の文を略す。讚文は眞假兩通、今は即ち繁を恐れて沒し給ふか。後

假の文は聖道の難證に對して、淨土の利益を顯す。是れ要の要たる實に斯に在ることを示す。中に於て菩薩等とは聖道の難證を明し、然今等とは今時の機を擧げ、上を承けて下を起し、隨緣等とは淨土の易證を明す。

第十文は亦『禮讚』に據る。中に二有り、初は過を擧げて呵し、後に懺悔有三の下は難を語りて易を示し、意弘願を勸歸するに在り。由難等とは十三失の中、是は其の初九なり。後の四は眞門を明す處に至つて出す。蓋し其實は互に相通するなり。且く親疎に従つて之を兩處に分つ。謂く、初四は自らこれ二行廢立、次四は不專修に由る。後一は法徳を仰がず、乃ち要門に親し。無念報佛恩等とは、宗祖は眞門の過を言ふに常に此事に於にす、乃ち眞門に親し、餘三は但だ之に従ふのみ、夫れ終南の方便と爲すもの要門乃ち盡く。宗祖云ふ所の眞門方便は本と收まつて此中に在り。引用の意當に知るべし。希得一二とは『對問記』に云ふ「希得一二とは、十即十生の益に對し自力難成の相を示す。而して十即十生とは眞報土に約し、希得一二とは、化身土に約す。然に終南の所明は土の眞假を論せず、通じて淨土に就て、得生の難易を辨明す。是故に其言は汎く通ず。若し其實意は報化自ら別なり。若し然らざれば、現在の佛光攝不既に別なり、生後の果徳何ぞ齊等なる可けんや。而して彼土の差別を論せざるもの暫く諸師の謬解に對して、是報非化の義を成立す。故に報中の眞假は存して論せず。之を論せずと雖も、其意必ず存す。知るべし」と。『仰信

錄』にも辨有り、見るべし。『摘解』に云く「希得一二とは、古老は皆云く、化土の往生尙ほ難きを彰すと。私に云く、上に引く、『要集』の文は、『處胎經』の「億千萬衆時有一人」を引きて、之を終南の得一二に合し、之を結して「報土生者極少」等と云ふ。舊説は之に違す。此は是れ緩に與ふの辭なり、其實は後に千中無一と云ふが如きのみ」と。今謂く取捨任情。後に難を語りて易を示す中、種解脫分とは、『六要』六末(五)に云く「菩提心上所修之善云解脫分善根者也」と。但能眞心等とは、和讃に云く「眞心徹到スルヒトハ、金剛心ナリケレバ、三品ノ懺悔スルヒト、ヒトシト宗師ハノベタマフ」と。云ふ所の眞心とは次上に云ふ所の無上信心なり。彼に由て是を見るに弘願を勸歸するもの知るべし。

第十一文は『觀念法門』の文なり。心光に約して不攝を誠む。現生に佛光に攝せざれば、生後何ぞ報土に往生するを得ん。二善三福は報土の因に非ず、以て見るべきなり。

第十二文は『法事讚』の文なり。已下は方便欣慕の義を明す。中に就て、此文は化前の教益多門を示す。『六要』六末(五)に云く「法事讚釋此讚略標一代說教遂勸念佛爲其出要。如來等者是依能於婆娑國土五濁惡世等之經文。隨宜等者對機意也。或說多聞指聲聞教或說少解約緣覺教已上小乘。或教福慧指菩薩教此是大乘。加前二乘即爲三乘若依圓宗於菩薩乘。又攝大小有三藏教菩薩故也。言福惠者六度之中前五是福、後一惠也。或教禪念約佛心宗。故此中含大小權實

教門教外一代意也。種々等即許隨分得度之益是就根性利者之類且所論也。於彼鈍根無智機者難得其益爲之所設稱名行也」と、見るべし。

第十三、第十四文は『般舟讚』に據る。初文は、二門の難易を明す。上は隨分の得益を明すこれ與門の義なり。今萬劫等と云ふは、則ち奪門の意なり。萬劫等とは修功の續き難きことを示す。畢命等とは淨土の易往を明す。聖道を該して漸教となす。要門は之を弘願に望むるに是れ漸教なりと雖も、今は聖道に望めて謂て頓教と爲す。念佛とは來迎に准ずるに是れ第十九願の益と爲し之を要門と爲す。終南の意は必しも然らざるなり。一食等とは、六道の難出を明し、乃ち聖道の難證を示し、淨土の易往を反顯するなり。

後文は異の方便の義を明す。乃ち定散はこれ弘願に入るの方便たることを明す。

雁門引意

〔本文〕 論註曰有二種功德相 乃至若因若果皆是顛倒皆是虛偽故名不實功德已上

〔校異〕 (イ)功德相の相註文に無し。

〔細釋〕 助顯の中初は『論註』の眞實功德を釋する文なり。『仰信錄』に云く「註の文は、上の文に

人天を受くる路を防ぐことを助顯す。謂く、上は則ち二善、三惡相對し、人天猶ほ善趣に屬して貪瞋を障と爲し、生を受くること甚だ難し。今は縱令能く人天の生を受くるも、猶ほこれ顛倒虛偽にして、不實功德と爲すことを顯す。此れ乃ち眞實功德に非ざれば、六道を出で難きことを示す。たゞ不實功德の文を擧げて、自ら眞實を對顯するの意を存す。故に有二種功德相の標を除かず、其意見るべし」と。佳し。

西河引意

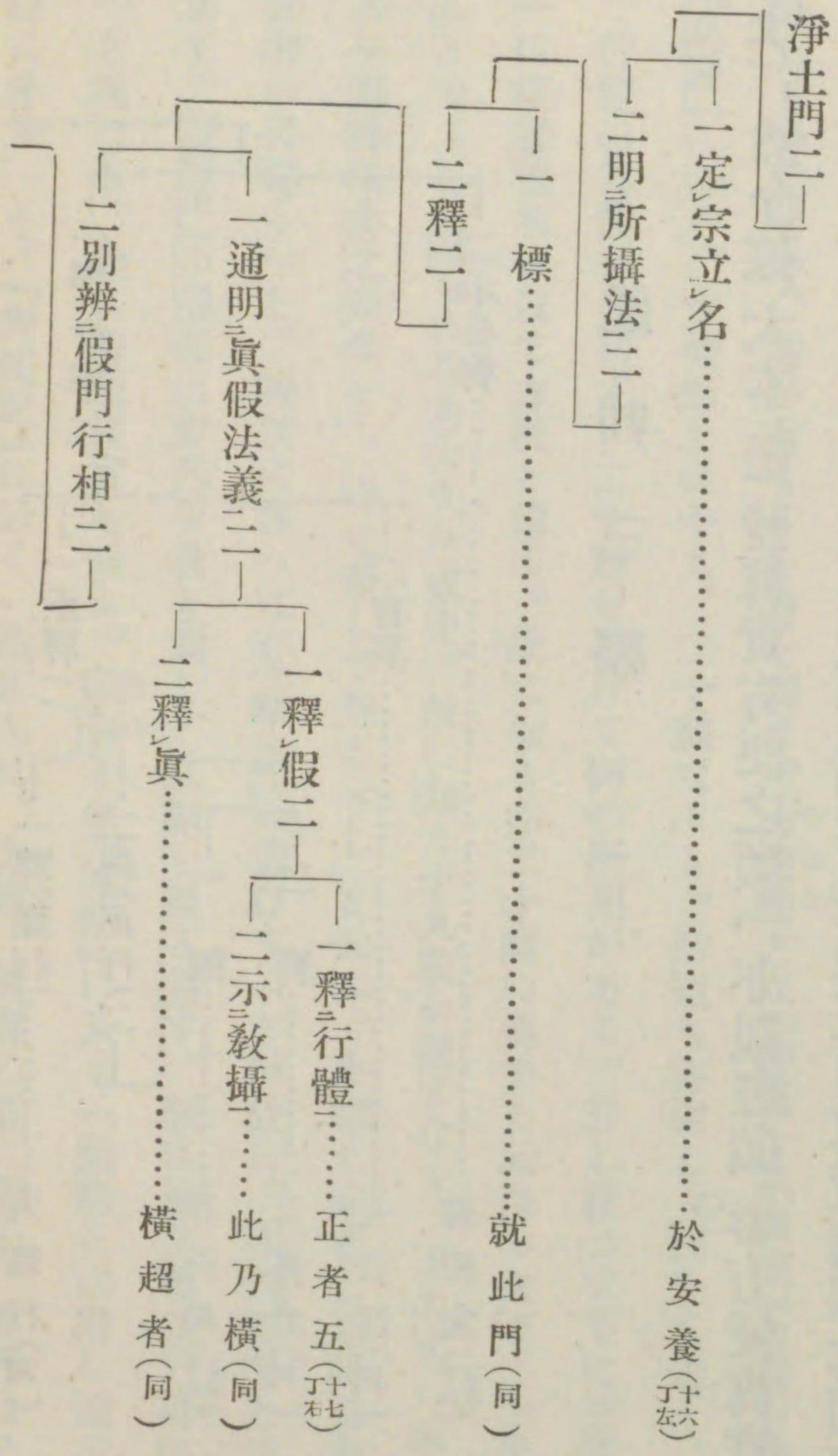
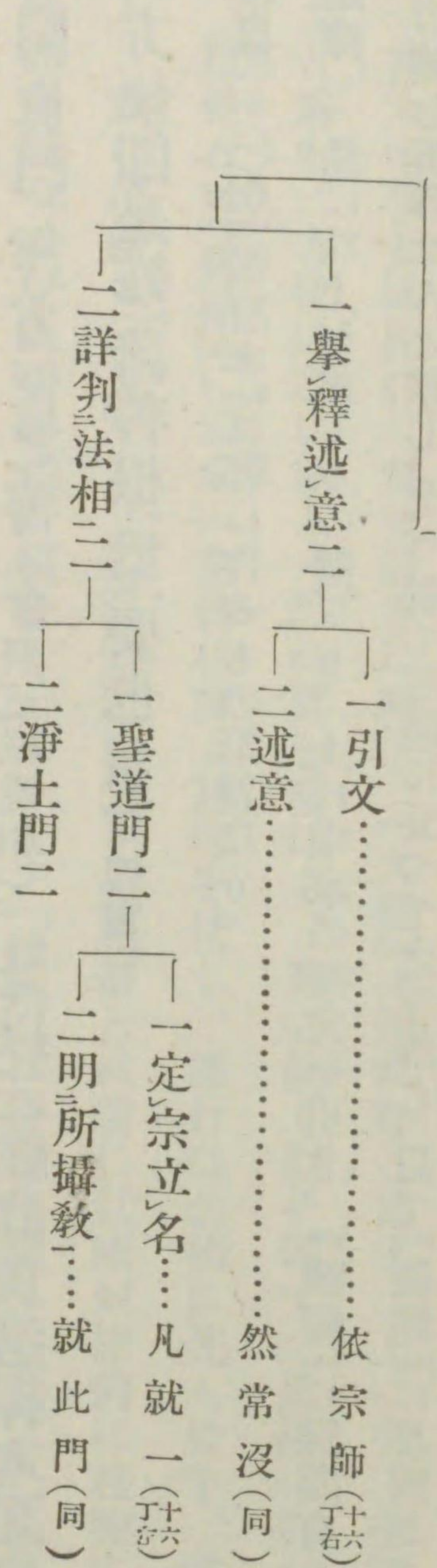
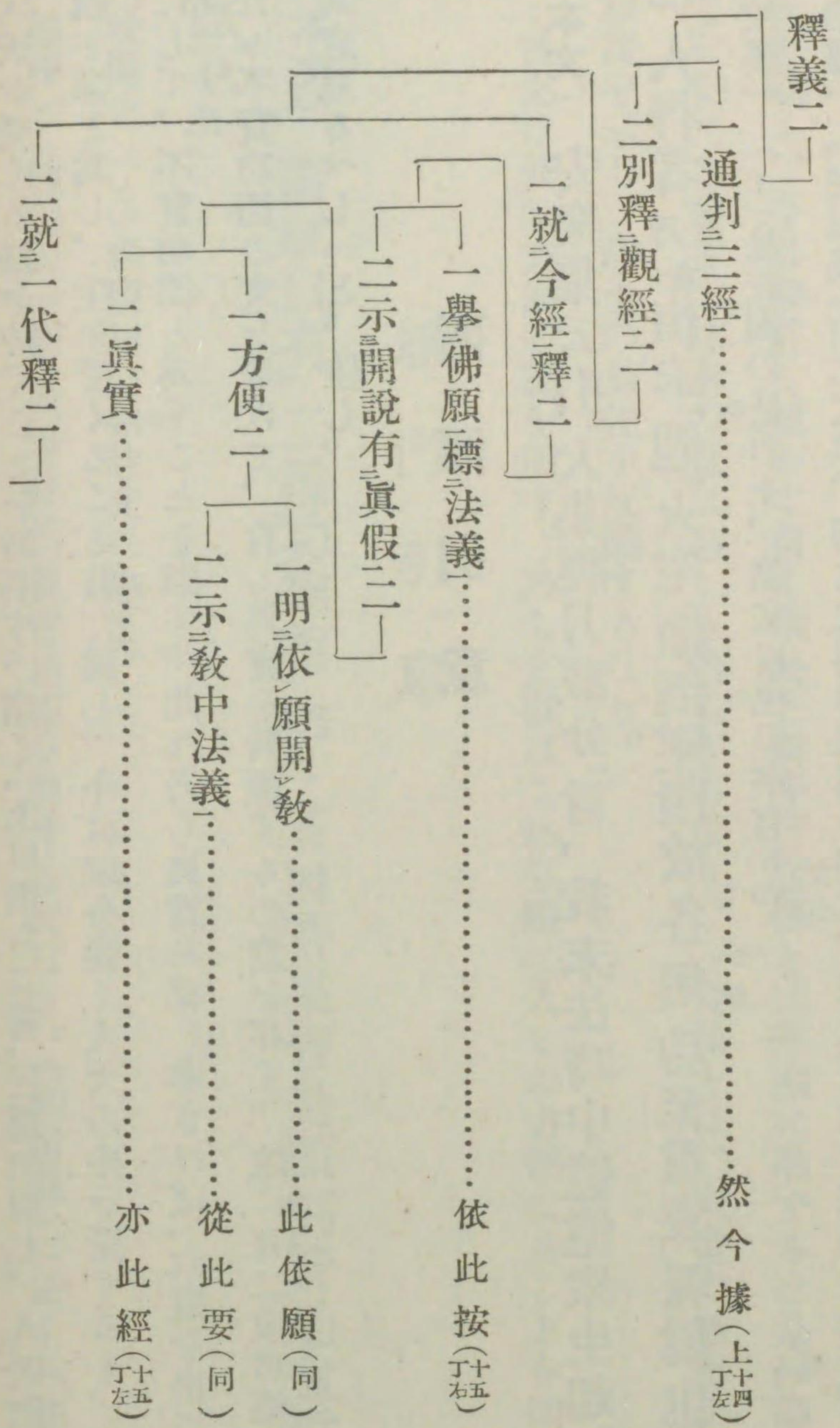
〔本文〕 安樂集云引大集經月藏分言、我末法時中億億衆生起行修道未有
一人得者乃至恒未勉火宅顛倒墜墮故各用功至重獲報偽也已上。

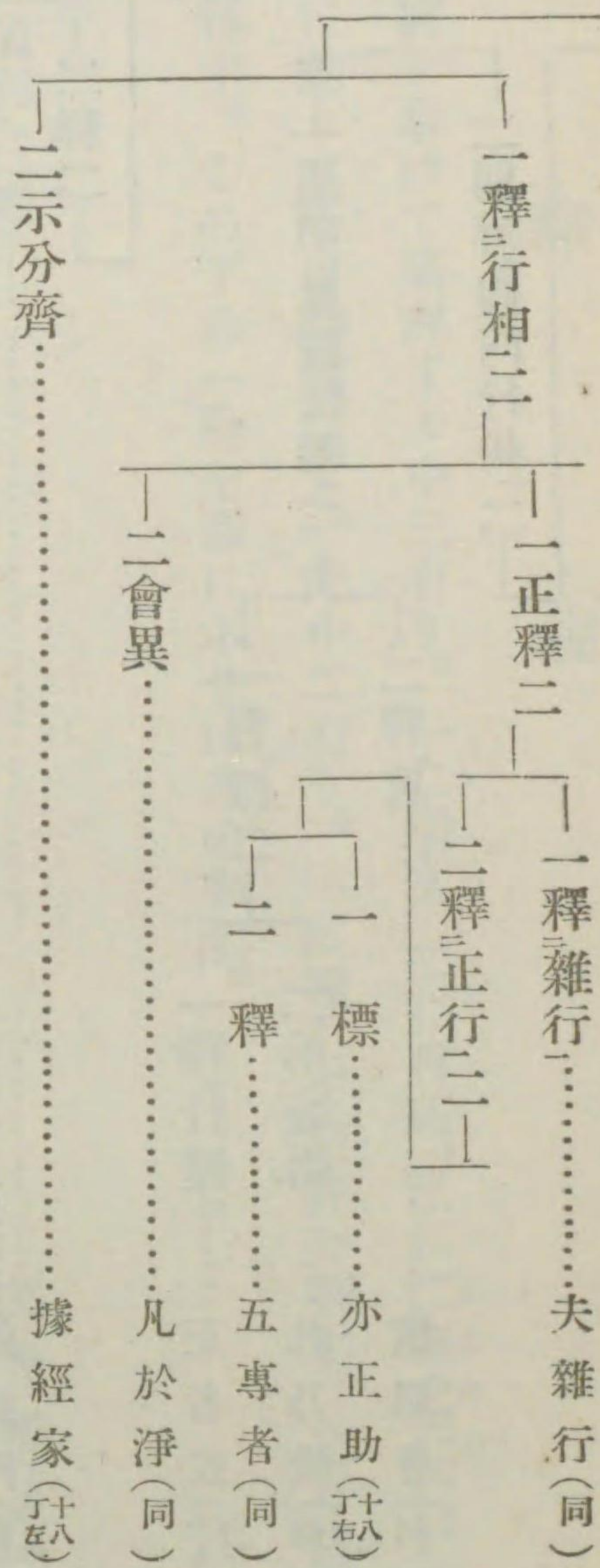
〔校異〕 (イ)是五濁の是の上、集文は現の字有り。

〔細釋〕 『安樂集』の二文は、初は二門の通塞を明し、後は修功の虛偽を示す。上の文に萬劫苦行證不退と云ふは猶ほこれ與門なり。今未有一人得者と云ひ、顛倒及び偽と云ふは即ち是れ奪門なり。乃ち聖道を奪つて人天に同するなり。以て上の萬劫修功實に續き難きの意を助するなり。世出世の善は、皆これ虛偽不實なり。須く之を捨て、淨土を欣慕すべし。而して淨土中要門は是れ方便、弘願は其の眞實と爲す。助顯の三文は究竟の義に約して欣慕の意を示すなり。

釋義

〔大意〕 釋を擧げて廣辨する中三有り。一に引文、二に釋義、三に二經之三(廿七)の下は正答なり、引文は上に竟りて今は釋義なり。此中二有り。一に通じて三經を判じ、二に依此按の下は別して『觀經』を釋す。この下の一段を圖に示せば左の如し。





通判三經

〔本文〕 然今據大本超發眞實方便之願、亦觀經顯彰方便眞實之教。小本唯開眞門無方便之善（分別三經說相）。是以三經眞實選擇本願爲宗也。復三經方便卽是修諸善根爲要也（攝定權實）。

〔校異〕 ①彰『明曆本』は鄣に作るもの形誤なり。

〔細釋〕 然には上を承くるの辭なり。上に宗家の衆文を引き、『觀經』に隱顯有ることを證す。今其の義を辨釋せんと欲し、先づ廣く三經に亘つて之を辨じ、以て『觀經』に眞假ある所以を述ぶるな

り。據大本等とは此れ二尊の教意に約す。『大經』は彌陀經と爲す。上に引く序題門の如きは眞實を主と爲し、方便は之に従ふ。假は眞を覆はず、眞は能く假を制す。是故に眞を先にし假を後にす。超發とは『述聞』に云く「念佛は能く諸行を伏し、諸行は念佛に先んせず、唯これ一選擇本願有り、故に超發と云ふ」と。『對問記』に云く「超發とは管に弘願が諸佛に超踰するのみならず、要門亦た超ゆるが故に總じて超發と云ふ」と。『摘解』は後說に従ひ、『仰信』は前說に依る。今謂く必しも局定せず、並び存するを可と爲す。方便願とは『仰信』に『略讚』の義を評して云く「然るに『略讚』に云く、方便願とは十九、二十願なりと。助覽も亦同じ。評して云く、此下は要弘相對し、行體の眞假を分別す。二十願を擧げて何の所用かある。若し救つて下に三經方便と云ひ、『小經』は植諸徳本を以て方便と爲す。故に知る亦二十願に通すと云は、次下に「小本乃至無方便之善」と云ふと、忽ちに乖角の失を成ず。故に知る十九願を指すなり。下の文に云く「依此按方便之願乃至臨終現前之願也」と、併せ照して知るべし」と云ふ。今謂く亦必しも局らず、行體に約すれば評者の言聞くべし。機情に従へば亦『略讚』の義存すべきが故に。亦觀經等とは『觀經』は釋迦教と爲す。『觀經』の隱顯は要門を表と爲し、弘願を裡と爲す。假は眞を覆ひ、眞は假中に隱る。『大經』と異なり。故に方便眞實と云ふ。顯彰とは『述聞』に云く「顯彰とは猶し說示と云ふがごとし義目に非ず」と。『對問記』に云く「顯彰とは、方便、眞實の語に應ず、要門は是れ顯、弘願は彰

と爲すが故に」と。今謂く前説を可となす。小本等とは、『小經』の説の如きは、諸の餘行を廢して、唯念佛を立す、故に唯開眞門と云ふ。方便之善とは、即ちこれ諸行なり。之に對して之を云へば宜く眞實と云ふべし。然に眞門と云ふは乃ち別意あり。即ちこれに同異の義有り。謂く、これ方便の外の故に同なり。眞實と云はざるが故に異なり。同は教頓を顯し、異は機漸を示す。下に至りて隱顯あるを辨す。今は彼の張本として此言あるなり。以上は三經の説相を分別す。

是以等とは、權實を攝定す。若し眞實を論すれば、三經一致にして唯一の弘願なり。故に選擇本願を宗と爲す。選擇本願とは第十八願にして意ろ念佛を指す。修善に對するが故に。三經所説の方便は要は修善に在り、故に修諸善根爲要と云ふ。要は猶し宗と云はんが如し。此は法體を擧げて以て三經を攝す。二法を擧ぐる處、權實を判じ盡し、機情は之に隨ふが故に。然に『小經』の如きは、諸善無しと雖も其の機情に隨つて修善に屬するが故なり。

別釋觀經

〔大意〕 釋義の中二、一に通じて三經を判じ、二に別して觀經を釋す。後中二、一に今經に就て釋し、二に依宗(付)の下は一代に就て釋す。初の中亦二有り、一に佛願を擧げて法義を標し、二に依此願の下は開説に眞假有るを示す。今は初めなり。

舉佛願標法義

〔本文〕 依此按方便之願有假有眞。亦有行有信。願者即是臨終現前之願也。行者即是修諸功德之善也。信者即是至心發願欲生之心也。

〔校異〕 なし。

〔細釋〕 依此とは、次上の所明を承くるが故に。謂く、『觀經』に方便を説く所、佛意眞實を存す。『大經』方便の願、豈に眞實無からんや。今此經の意に依つて溯つて佛願の義を釋す。故に依此等といふ。方便之願等とは古に二説有り。一義に第十九願を指す。云ふ所の修諸功德の言の中、亦名號を含む、六念中及び下輩等の如し。故に眞有り假有りと云ふと。一義に云く、十九、二十の兩願を指す。故に假有り眞有りと云ふ。眞とは謂く二十、假とは即ち十九なり。『頂戴』述聞は各々一説に依り、『對問記』は、第十九願を指すは可とするも、六念中の念佛を有眞の眞と爲すは不可として、更に云く「假有りとは願文に依り、眞有りとは願意に約す。假は徒張ならず、施設の意、常に眞實に在り。是故に方便願中、若し佛意に依れば常に弘願眞實有り、故に有假有眞と云ふ。是れ觀經開説の根基なり」と、佳し。有行有信とは、別して行信を標するは修入の要なるが故に。已上はこれ標なり。願者等とは已下其の釋なり。眞假は標有りて釋なし。次に之を承けて

云く、淨土要門方便權假と。後に亦云く、此經有眞實と。則ち經に於て眞假を辨じ、以て願の眞假を准知せしむるが故なり、別して方便願と云ふは即ち第十九願なり。故に願者即是等と云ふ。これ益に就て、願目を標し以て行信の所得なることを示す。

明 方 便

本文 依此願之行信顯開淨土之要門方便權假(明依願開教)。從此要門出正助雜三行(舉行體)就此正助中有專修有雜修。就機有二種、一者定機、二者散機也(辨修相)。又有二種三心亦有二種往生。二種三心者、一者定三心、二者散三心、定散心者即自利各別心也。二種往生者一者即往生、二者便往生。便往生者即是胎生邊地雙樹林下往生也。即往生者即是報土化生也(標信與證)。

〔校異〕 なし

〔細釋〕 開説に眞假有ることを明す中二有り。一に方便を明し、二に亦此經下は眞實を明す。方便を明す中二有り、一に願に依つて教を開き、二に従此要門の下は教中の法義を示す。先づ初の

中、依此等には『觀經』は第十九願を開説す。讚に云く「臨終現前ノ願ニヨリ、釋迦ハ諸善ヲコトク、觀經一部ニアラハシテ、定散諸機ヲス、メケリ」と、蓋し此意なり。故に依此等と云ふ。要門に亦四法有り、正助雜の三は是れ行、二種の三心はこれ信、二種往生はこれ其の證、而して之を開説するを要門の教と爲す。四法の中行信を要と爲す、故に願有行信と云ふ。已下此より其四法を開く、今は則ち先づ其教を出す。要門とはこれを釋するに二有り。初に要即門の持業釋を以てすれば、要とは樞要の義にして、門とは能通に名く、淨土の定散の法門は之を聖道迂廻の諸善に對するに、修入の捷徑得道の要術、此法に過ぎたるは無し、故に名けて要と爲す。此要法に由つて淨土に通入するが故に名けて門と爲す。和讃に云く「諸善萬行コトク、至心發願セルユヘニ、往生淨土ノ方便ハ、善トナラヌハナカリケリ」と。又『證文』(三)に云く「オホヨソ八萬四千ノ法門ハミナコレ淨土ノ方便ノ善ナリ、コレヲ要門トイフ。コレヲ假門トナツケタリ。コノ要門假門トイフハスナハチ無量壽佛觀經一部ニトキタマヘル定善散善コレナリ」と、知るべし。

次に要の門の依主釋とすれば、要とは念佛を指す、弘願念佛は要中の要なるが故に。『法事讚』下(廿三)に云く「故使如來選要法、教念彌陀專後專」と。又『文意』(評)に釋して云く「故使如來選要法トイフハ、釋迦如來ヨロツノ善ノナカヨリ、名號ヲエラビトリテ五濁惡時惡世界惡衆生邪見無信ノモノニアタヘタマヘルナリトシルヘシ。コレヲ選トイフ。ヒロクエラブトイフコ、ロナリ。

要ハモハラトイフ、モトムトイフ、チキルトイフナリ。法トイフハ名號ナリ」と。即ち定散を門として、彼の定散門によつて能く念佛の要に通入するを要門と云ふなり。以上の如く、持業、依主の二釋ある中、初義は聖道に對し、後は弘願に望む。此の二義具して要門と稱するなり。方便權假とは、弘願眞實に對して教の分齊を示すなり。

從此要門等は二に教中の法義を示す。中に於て二有り。初は行の體相を擧げ、次に又有二種の下は信と證とを標す。初の中亦二、一に行體を出し、二に就此正の下は行相を辨す。行體を出す中、正、助、雜の三行とは之を解するに異説有り。『略讚』に云く「正は謂く五專、助は謂く禮誦等なり。この正助を除く已外は衆て雜行と名く」と。『述聞』に云く「合すれば正雜二行なり。今は則ち開に就て正を示す、故に三行と云ふ」と、『對問記』に云く「稱名を正と爲し、余の四を助と爲す。其餘を雜と名く要門の行體は此三に歸するが故に『觀經』所說の行體を總括して出三行と云ふ」と。今謂く、要門の行者は未だ正雜を知らず、況や正助の別をや。而して之を云ふものは但だ行體につき稱して三行と云ふ。正、助、雜とは下の釋に云く「正者五種正行。助者除名號已外四種是也。雜行者除正助已外悉名雜行者此乃橫出漸者乃至自力假門也」と、知るべし。

今この正助雜の名義を釋するに、正行と雜行との相對のときは、正は正當、正是の義なり。即ちこれ正く西方往生の行なるが故に正行といふ。雜とは雜多、雜穢、雜通の義なり、雜多とは行體萬差なるを云ふ。即ち西河は萬行往生と云ひ、終南は「除此正助二行已外自餘諸善悉名雜行」と云ひ、吉水は「雜行無量不遑具述」と云ふ。見るべし。これを雜行の本義とす。雜穢とは自力修善の行なるを云ふ。下に云く「自本非往生因種廻心廻向之善故曰淨土之雜行也」と云ひ、『散善義』に「名爲雜毒之善亦名虛假之行」と云ひ、『法事讚』に「隨緣雜善」と云ふものこれなり。雜通とは人天三乘の行を以て西方の行に混通するを云ふ。『選擇集』に云く「次雜者是純非極樂之行、通於人天及以三乘亦通於十方淨土故雜也」と、知るべし。雜穢、雜通の義を以つてする時は、假令一行にても雜行と名くるを得るなり。以上記する所の名義は、正雜の二字を對目とするもの非ず。若し對目とすれば、正は邪に對し、雜は純に對すと云ふべし。爾れば正雜二行は具さには正純邪雜の二行と云ふべし。今は影略互顯するものなり。念佛は正當純一の行なり、故に正行と名け、萬行は偏邪雜多の行なり、故に雜行と名くるなり。

次に正業、助業の相對の時は、正は君長の義なり。助とはこれに二義有り、若し起行報恩門に約すればこれ隨伴の義にして、方便の往因門に約すれば資助の義と成る、知るべし。

就此正助等とは後に修相を辨す。行體は三なりと雖も修相は萬差の故に、今之を分ちて專修雜修と云ふ。若し夫れ雜行に於てせざるものは、雜行はこれ要門の行なれば、正行を分つ處に自ら准知すべきが故なり。就機等とは、要門の行信は、機に隨つて不同なり、故に今亦其機を分別し

て之を行信の中間に安じて以て差別を示すなり。

又。有。二。種。の。下。は。信。と。證。と。を。標。す。二。種。三。心。等。と。は。各。々。牒。釋。有。り。定。散。三。心。と。は。經。に。三。心。を。説。く。は。九。品。の。首。に。在。り。散。の。三。は。知。る。べ。し。定。の。三。は。疏。に。云。く。『又此三心亦通攝定善之義』と。既にこれ諸機各々の發す所即ちこれ自力にして他力に非ず、故に定散心等と云ふなり。二種往生者とは、『略讚』に云く「經中に因を説いて發三種心と言ふを、疏釋は因の三心に於て、眞實、方便を分つ。因に既に眞假あれば、果も亦眞假あるべし。この義を以ての故に即便往生の果を分ちて二と爲す、巧みに即便の二字を寄せて、眞假の二果を點示す、字義に拘はるにあらず」と、佳し。『述聞』に西鎮の説を擧げて云々す、披くべし。問、眞假を分別するに亦信因に於てすべきに今は但だ證果に於てするは何の意有るや。答、『略讚』に云く「上に方便之願有假有眞と云ふ。方便願の中に既に眞假を含む。故に今開說の經を釋する中、文勢に乗じて、即往生を明し、而して次の眞實を起す」と。佳し。『御鈔』(下評)中に便往生を双樹と難思との二に分つ。今は『觀經』の當分に約して假門の四法を明す、故に其の難思往生は之を下の釋に讓るなり。

明 眞 實

〔本文〕 亦此經有眞實(標)。斯乃開金剛眞心欲顯攝取不捨(略明)。然者濁世

能化釋迦善逝、宣說至心信樂之願心、報土眞因信樂爲正故也。是以大經言信樂。如來誓願疑蓋無雜故言信也。觀經說深心、對諸機淺信故言深也。小本言一心、二行無雜故言一也。復就一心有深有淺。深者利他眞實之心是也。淺者定散自利之心是也(具辨)。

〔校異〕 なし。

〔細釋〕 中に於て二有り。初は標にして斯乃の下は釋なり。標の中、亦此の亦とは『頂戴錄』に云く「上の方便教に亦す。謂く要門中に亦眞實を含むが故に」と。『略讚』に云く「方便願に眞有るに亦す」と、取捨は情に任す。斯乃等とは釋、中に二有り。一に略明と然者の下は二に具辨なり。略明の中、『對問記』に云く「金剛眞心とは、散善所說の深信なり、是れ機受の安心を顯す。攝取不捨は定善所說の光益なり、是れ法徳の攝取を明す。欲の字は如來の望欲なり。定散を開說するの意此に在るが故に」と。今謂く二句互に映す。前を以て後を見れば、則ち念佛衆生はこれ三心具足の行者なることを顯し、後を以て前を見れば、則ち信心の行者は光攝の益を蒙ることを示す。『述聞』に子細の辨有り、須く一讀せよ。

然者等とは具辨の中、先づ立、是以の下は證なり。『頂戴錄』に云く「然者とは上を承く。謂く、

攝取の益は唯金剛心に在るが故に。善逝は第十八願の信樂を持ち來りて、今經の三心を開説するが故に宣説等と云ふなり、是以大經等とは、前を承けて三經一致の義を明すなり」と。『對問記』に云く「然者とは猶し所以然者と言ふが如し。謂く釋尊は『大經』中に本佛の願心を宣説して信樂を正と爲すが故に、彼を以て此を推せば、今此『觀經』施權の本意は、金剛眞心を開して、攝取不捨を顯さんと欲するに在るなり。故也の二字は上の開顯に應じて其所由を顯す。是以の下は、通じて三經同じく信を以て要と爲すことを明す、故に是以と云ふ」と。『述聞』に云く「具辨とは、廣く三經に通じて辨するが故なり。三經に通ずと雖も、意は則ち正しく『觀經』を明すに二經を以て一經に對映するなり。此中に先づ立し、是以等の下は證す」と。以上三義ある中、述聞の説佳し。然者とは上を承く、上に眞實と云ふ。眞實とは第十八願の故に、宣説等とは、謂く、三經同じく本願の信心を説く、願心とは猶し願意と云はんが如し。報土等とは其所由を釋す。報土とはこれ即ち往生なり。即往生の因を眞と云ふは、便往生の假因なるに對するなり、信樂とは三を全するの一、即ちこれ金剛の眞心。正とは邪に對す、信樂を除いて餘は報土に入る能はざるが故に。是以等の下は、前の立義を證す。是以とは上を承けて、今之を證するが故なり。大經等此は釋尊の宣説を云ふ。『述聞』に云く「信樂の目は下輩、流通等に取る、意は成就の信心歡喜に名くるなり」と、佳し。上は法を擧げ、如來の下は義を釋す。如來誓願とは佛願力をいふ。疑蓋無雜

とは疑を容れざるをいふ。佛願の無疑蓋は全じて衆生の明信を成す、故に信樂といふなり。觀經等とは法を擧ぐ。上に二種の三心と云ふ。則ち知る、深心亦要門に通ずることを、初後の二心は亦是れ弘願に通ず。第三卷の如し。而して此中特に信樂と云ふものは何ぞや。『述聞』に云く「禮讚の三心、第三卷中には其の深心を出す。初後の二心は則ち此上に出す。之に由つて之を思ふに、蓋しこれ如來善巧の説、實を以て權に間へ、一種の三をして、權實不定ならしめ、以て誘引すべく、以て究竟すべきものなり」と。披きて讀むべし。對諸機等とは、説意を釋す、深の言は一往は顯説に通ずと雖も、名の實を盡さず、經に言く、「若聞深法」等と、人他力の深法を聞かざるときは其心堅固不動なること能はざるが故に、弘願の信を以て名實相稱ふものと爲すなり。小本等とは、法を擧ぐ、二行等とは義を釋す。第二、三卷に專心專念を釋して云々す。今は則ち行を以て心を解す、是れ願力の信心なるが故なり。復就等とは、淺深を分別す、意は非を簡びて是を示すに在り。『述聞』に云ふ「亦是れ下に隱顯を言ふの張本なり」と。知るべし。

舉釋述意

〔本文〕依宗師意云依心起於勝行、門餘八萬四千漸頓則各稱所宜、隨緣者則皆蒙解脫（引文）。然常沒凡愚、定心難修、息慮凝心故。散心難行、廢惡修

善故。是以立相住心尙難成。故言縱盡千年壽法眼未曾開。何況無相離念。誠難獲。故言如來懸知末代罪濁凡夫立相住心尙不能得。何況離相而求事者如似無術通人。居空立舍也。言門餘者門者即八萬四千假門也。餘者則本願一乘海也。述意。

〔校異〕 ①難。寛永前本、及び「正保本」は難に作るもの形誤なり、②廢。『明曆』、『寛文』二本は廢に作るもの形誤なり。

〔大意〕 一代に就て釋する中二有り。一に釋を擧げて意を述べ、二に凡就（合）の下は詳に法相を判す、今は初めなり。

〔細釋〕此中二段有り。初は引文、後に然常沒の下は述意なり。此は上に『事讚』『舟讚』、及び『樂集』を引き、來りて一代を判じて、佛の密意聖道諸教は、是れ、化前の說にして、要門と爲すことを承くるなり。『證文』(二)に云ふが如し。知るべし。依心等とは修入の門戸を明す。漸頓等とは隨宜得脫を明す。若し疏意に依れば聖道に局れり。今は汎く二門に通じて一代の教益を示す。下の門餘の釋の如し。

然常沒の下は教益多門の中に就て、難易權實の意を述べ。中に二節有り、初は機に約して、法の難易を明し。後は字に寄せて、教の權實を明す。初の中、先づ要門難成を明し、後に何況無の

は聖道難成を明す。縱盡等とは、華座觀疏の住心作法を明す中、行者を誠むる文なり。今は則ち轉用して要門の難成を證す。定の修し難きを言ふ意則ち散に通ずるなり、如來等とは像觀疏中諸師の謬解を斥くる中の語にして、以て理觀の難成を證す。意は極に就て辨じ、諸行を攝す。此の如く要門聖道の難成を明すものは、弘願の易修を反顯するに在り。言門餘等とは、門餘の文を以て權實の法に配し、本願一乘は餘乘の表に超出することを顯す。若し本疏の當分に據れば、『傳通』(淨全二五)に云く「餘者雖立八萬其實無量故云餘也」と。『楷定記』第二(西全六三)に云く「八萬四千漸對治門、餘即頓教一實觀門一實體門」と。此の如きの文義は集主之を知るも、別に宗釋を作して、此法の別途不共なることを顯し、疏主の意を釋顯するなり。『述聞』に云く「然るに本文に門餘八萬四千と云へり。今の釋は思ひ難し、何となれば、餘の言は門を釋す、門は是れ法なり。餘は本願ならば、門も亦應に是れ本願なるべし。門は是れ假ならば、餘を本願と謂ふべからず、門を假門と爲し、餘を本願と爲さば、法と義と相應に非ざるが故に云何が之を解するや、曰く此は是れ文を破りて、其の密意を示すなり。是故に止門餘の二字を牒して、下の四字に及ばず、須く活解すべし」と。佳し。

明 聖 道 門

〔本文〕 凡就一代教於此界中入聖得果名聖道門云難行道。〔定宗立名〕 就此門中有大小漸頓、一乘二乘三乘、權實顯密、豎出豎超。則是自力、利他教化地、方便權門之道路也。〔明所攝教〕。

〔校異〕 ①密、『報恩寺本』は蜜に作る。

〔大意〕 二に詳に法相を判する中亦二有り。一に聖道門を明し、二に於安の下は淨土門を明す、今は初めなり。初の中、二有り。一に宗を定めて名を立て、二に就此門の下は攝する所の教を明す。

〔細釋〕 初の宗を定め名を立つる中、聖道門とは西河の目する所『安樂集』の如し。蓋し此言は『十地論』に採れるなり。聖は所得の果にして、道は是れ其因、聖處に至るの道の依主釋名なり。淨土門とは具さには往生淨土といふ。彼土入聖を淨土門と名く。難行道とは南天の名くる所にして、喻を帯びて法を顯す、同體簡濫の依主釋なり。又これ持業得名なり。西河の立名を南天に先んずるものは吉水を相承す、二門章の如し。『述聞』に云く「易行は諸佛に通ずるが故に、安ぞ知らん、其難行道と云ふものまた彌陀に通ずるにあらずやと、則ち未だ彼此の際を曉むるに足らず、是を以て雁門は正意を搜索して彼此を決了し、西河は註を承けて二門を判じ、先づ黒谷ありて集

の建章に二門の釋を引き、二道は則ち却つて二門に従ふ、今の集主承けて此釋あるなり」と。知るべし。就此等等とは攝する所の法を明す。中に就て、初は正く法を指し、後に則是の下は分齊を明す。初の中、大小等とは總じて他家の名目を擧ぐ。即ち大小とは三論、法相等の如し。曇無讖の如きは或は二教を立てて、半滿字と云ふも亦是れ意同じ。漸頓とは大遠劉虬等の如し。南北通用す。亦漸頓ありて彼に不定を加へて以て三教と爲す。一乘等とは至相、賢首等の如し。權實はこれ天台を擧ぐ、顯密は即ち眞言の判なり。次に豎出等とは即ち別して自宗の判目を出すなり。則是等とは分齊を示す。自力とは他方に異なるが故に、此等の諸家は自心を宗と爲す、即ちこれ云ふ所の依心起行なり。利他教化地とは乃ち往相回向に對して二十二願の還相の法を指す。方便とは誘引して極處に詣らしむるが故に、此れ其の眞實に非ざるを示す。『述聞』には、『末灯鈔』(三)の「聖道トイフハステニ佛ニナリタマヘル人ノワレラカコ、ロラス、メンカタメニ佛心宗眞言宗法華宗華嚴宗三論宗等ノ大乘至極ノ教ナリ。佛心宗トイフハコノ世ニヒロマル禪宗コレナリ。マタ法相宗成實宗俱舍宗等ノ權實小乘等ノ教ナリ。コレミナ聖道門ナリ。權教トイフハスナハチステニ佛ニナリタマヘル佛菩薩ノカリニサマノノ形ヲアラハシテス、メタマフカユヘニ權トイフナリ」とある文を引用して次の如く云へり「問、横豎の判は二門各々究竟を謂ふに似たり。此上の文及び『末灯鈔』の如きは、聖道門をして、究竟成佛無しとす。南天、西河及び諸祖の意は恐く是